獨逸政治大學叢書

ナチス獨逸の人種問題

日獨文化協會譯編

實業之日本社版

序文

本書はドイツ政治大學叢書 Schriften der Hochschule für Politik 中人種問題に關する四冊子 W. ziegler; Die Judenfrage in der modernen Welt, M. Sabri; Islam—Judentum—Bolschewismus, H. A. Grunsky; Der Einbruch des Judentums in die Philosophie, W. Gross; Rassenpolitische Erziehung を飜譯したものである。

國民社會主義ドイツ世界觀の人種民族問題に對する見解を理解しなければ、その眞髓を把握し得ずと言はるゝ如く、この問題に對するドイツの立場はドイツ全政策の根幹をなしてゐる。國家と言ひ、民族と謂ふも窮極する所ドイツにありては血の純潔を以てその構成上最大の要素としてゐる。ナチス政權樹立以來の猛烈な猶太排擊運動は實にこの血の純潔保持のための一大闘爭に外ならない。

古來猶太人の寄寓する所必ず猶太人問題を惹起し、歐米に於ては或は當該國の政治、經

濟、文化等國民生活諸分野に於て完全なる猶太支配を實現し、或はその中樞部に勢力を占むるなど殆んど猶太と無關係の國家なしと言つても過言でない。猶太人に對しては親猶排猶各國各々その事情を異にし、かくて猶太の歸趨は世界注視の的となり、殊にドイツの猶太人放逐、斷壓は新なる波紋を捲き起すことゝなつた。

大東亜共榮圈樹立の大事業に邁進しつゝある我國は、今後幾多の人種問題に逢着するであらう。勿論我が國策は八紘一宇の大精神に則り、萬物をしてその處を得しめ共存共榮の實を擧ぐるにあるが、四隣猶太の勢力端倪すべからざる事情を鑑みる時、本書が我國民族政策上資する所あれば幸甚である。

昭和十七年八月

財團法人　日獨文化協會

目次

現代猶太問題……ウイルヘルム・チーグラー……一
回教・ユダヤ民族・ボルシェヴイズム……モハメッド・サブリ……六三
回教とボルシェヴィズム……六五
回教とユダヤ民族……九四
哲學への猶太禍……ハンス・アルフレード・グルンスキー……一一三
ヘルマン・コヘン……一一五
カントとプラトンの歪曲……一二三
律法書と猶太法典……一三四

エトムント・フッセル……………………………一四四
タルムード主義とスピノーザ……………………一四八
結　論……………………………………………一六六
人種政策教育……………………ヴルター・グロース…一七一
教育の仲介者的役割……………………………一七三
民族を滅ぼす三要因……………………………一七七
廣い意味の教育・宣傳…………………………一九〇
民族衰亡の對策…………………………………一九四
消極的方策と積極的方策………………………一九八
人種政策教育の任務……………………………二〇一

現代猶太問題

啓蒙宣傳省
主席參事官　ウィルヘルム・チーグラー

猶太人問題は約二千年の歴史を持つてゐる。從つて、西暦年數と略々同じ位古い歴史を持つてゐるのである。否、猶太人問題は猶太人の歴史自體と同樣に古いと言つても差支へない。

然しながら、猶太人問題が始めて活潑な段階に入つたのは、キリスト紀元七十年卽ち、エルサレム崩壞後猶太人が世界に四散した時からである。猶太人問題が殆んど解決されたかに思はれた時代もあつた。この時分には、彼等の寄寓するところ到る處に於て、つまり、スペインであらうが、ポーランド、フランス、オランダ、等要するに東方、西方の何れたるとを問はず彼等猶太人は平和に我が世の春を謳歌し祝福してゐたのである。然るにやがてこの猶太問題の消滅も實は見かけだけの消滅に過ぎず、また猶太問題は一時睡眠の狀態に入つただけであり、表面下の現實に於てはそれは以前と同樣に益々醱酵の狀態にあつた

といふ時代が到來した。つまり、猶太民族とこの猶太人の寄寓する諸民族との間の對立が最も尖鋭な形となつて爆發した時代がそれである。それは先づ第一にローマ帝國に於ける迫害，特にキリスト教暦が數へられるに至つた後のアレキサンドリヤの事件がその特色となつてゐる時代である。次いで十字軍の時代となり、やがて一四九二年のスペインよりの猶太人追放となつたのである。スペインでは猶太人は幸福な事情にあり、富も地位も得て居り、この時代は猶太人にとつては正に黃金時代とも言ふべきものであつた。

さて近代に目を移せば、その特徵は外面的平和の新時代とも言ふべく、猶太人が全西部ヨーロッパ、中部ヨーロッパに比類なき大飛躍を遂げた時代である。それは凡そ一六五〇年頃からである。つまりこの間の二、三世紀の間猶太人が幾多の迫害、制限、壓迫に曝された後のことである。かくして今や猶太人には飛躍進展の一途を辿る時代が始まつた。「進展」といふ概念の通りとの全時代は進展してゐた。卽ち啓蒙の時代であり、また猶太問題に關する限り、同化の時代であつた。この時代は猶太人にとつては非常な樂觀主義によつ

て始まつてゐる。然らば今日は如何？　今日眼を全世界に向けるならば、到る處に於て猶太人問題が最尖銳な樣相を呈して炎上してゐることを確認しなければならない。

今この旋回を四つの事件現象に分けて述べて見たい。

第一の理由は精神的、イデオロギー的性質の成行である。即ち今日沒落しつゝある自由主義的民主々義の時代が崩壞したことである。この時代は猶太人にとつては理想的な時代であつた。何故なれば、この時代は國民の平等といふ原則が支配してゐたからである。つまり、この原則によると國家といふ目から見れば凡ての國民はその信仰、民族的系統が如何なるものであらうとも一向構はず全く同等といふのであつた。この原則が絶對的であつた時代に、今や猶太人の所謂同化の時代從つて外界への猶太人の融解（アウフゲーエン）といふ時代が展開して來た。この時代は猶太人には全く黃金時代であつた。當時同化といふ概念によつて猶太人問題は解決され得ると考へたものもあり、またそれは猶太人側のみならず、猶太人の

寄食する諸民族の側でもさう考へたのである。同化の時代には猶太人は――こゝでハインリッヒ・ハイネの言葉を借用しよう――洗禮により、或はキリスト教への改宗によつて「ヨーロッパ文化への入場許可證」を得ることが出來ると信じた。その他の所謂宿主民族（註・原語は Wirtsvolk で猶太人に寄寓され居る民族の意味であるが適譯なし）は、猶太人が斯くの如くキリスト教へ改宗し、他の諸民族中へ同化して行くことによつて、猶太人問題は最も簡單に、最も平靜に亦最も良好に世界から除去され得ると信じてゐるのである。然しながらこれらのイデオロギーは何れも飛んでもない苦々しい瞞着であつたことが證明された。これは正に當時の幻想であつた。

なるほど第十九世紀、二十紀に幾十萬の猶太人がキリスト教へ改宗し、また文明開化した人々は少くとも人間の容貌を持つものはすべて平等なりといふ原則を信じてゐた。それにも拘はらず、猶太人と非猶太人の間の問題に關する限り今日でも諸民族の間には新しい間隙が存してゐるのである。そして益々猶太人に對しては種族が全然違ふといふ認識が深

くなりつゝあるのである。

今日吾人はこの幻想崩壊の前に立つて居り、この破產の中から猶太人問題のこの尖鋭な急性の性格が現はれて來た。而も最近——一九三三年以來——ドイツのみならず、全世界到るところに現はれたのである。

第二の理由は全く明白な性質のものであり、社會的、人口政策的性質の經過である。最近約二世代の間に猶太人は全く巨大な眞に革命的な規模の一大民族異動を行つたのである。勿論この民族異動は公然人目につくやうなものではなかつたが、今日吾人が猶太問題として全世界に於て體驗しつゝあることにとつては決定的な意義をもつてゐるのである。

吾人は次のことを想起しなければならない。十九世紀始め全世界猶太人口數は三百八十二萬であつた。今日では約一千六百萬人に達してゐる。從つて猶太人口の增加は全く未聞の增加率であると言はざるを得ない。この增加は一八二五年以來の一世紀の間にヨーロッパでは五倍であり、僅かに三・五倍に過ぎない他のヨーロッパ諸民族の人口增加數より遙

かに多い。

然しこのことはまだ最重要なことではない。決定的な而も特徴的なことは、この猶太民族自體內の增加經過と共に猶太人の地理的分布卽ち實に亘大な範圍に亘る異動が行はれたといふことである。この永遠の異動は今や猶太民族の本質となり運命となつてゐる。この異動によつてこの民族の傳說そのもの丶中に於ける眞の猶太史が始まつた。筆者は猶太人自身が彼等の歷史の端緖なりと考へてゐるかのイスラエルの子達の遍歷をこ丶で想ひ起す。この異動は全世紀を通ずる彼等の歷史に附隨してゐる。略一八七〇年始まつた近世工業時代の絕頂時代に、大體外面的には何等の動機もなかつたに拘はらず、再び新しい異動が始まり、而も今度は從來未だ嘗つてなかつた程の大規模の異動が始まつたのである。

その後の發展を逐一擧げることが出來るが、その場合筆者が何等か意圖するところあつての宣傳に過ぎないとの非難を受けぬやうに、數字はわざ〳〵猶太側の發表したものに據つたことを豫め斷つて置く、蓋し事實と數字は雄辯に事情を物語るからである。

一八八〇年全世界猶太人の數は約八百萬であつた。この八百萬の中八十八パーセントがヨーロッパに住み、三パーセントがアメリカ、約四乃至五パーセントがアジヤに、殘りが他の世界各地に住んでゐた。從つて猶太人の壓倒的多數はヨーロッパ、殊に東部ヨーロッパに住んでゐた。一九一四年には全世界猶太人は一千四百萬となり、從つて、人口増加比率は實に驚異すべきものがある。この一千四百萬の猶太の中六十八パーセント以上がヨーロッパ、二十五パーセント以上がアメリカに住んでゐた。一九三五年にはこの發展は更に進展した。現在全世界に千六百三十萬の猶太人があり、その中六十三パーセントはヨーロッパ、三十一パーセントがアメリカに住んでゐる。從つて猶太人はこの二つの地區に主として住んでゐるわけである。而もその間には全く巨大な猶太人の民族異動が行はれつゝある。數百萬の猶太人がこの約五十年の間に東部ヨーロッパから新大陸へ移動してゐる。東から西へのこの異動は最初英國へ流れ込んだものである。かくして一八九一年から一九〇

〇年までの十年間には約二十萬の猶太人が英國へ移住した。人口四千萬の英國にこの數が如何なる意義を持つかを想像するがよい。斯くの如き猶太人の流入は餘りにも強烈なものであつたために、英國政府もこの問題に注意し始め、この移住增加を如何にして喰ひ止めるかを研究する特別調查委員會が一九〇二年設立された程である。然しながら、猶太人の主流は合衆國へと向つて行つた。その上遂には合衆國猶太人口數は一九一二年の約三百萬から一九三五年の四百五十萬に增加したのであつた。アメリカ合衆國一ケ國だけのこの人口數は全世界猶太人の二十七パーセントに當つてゐる。從つて今日合衆國には全世界猶太人の四分の一が住んでゐるわけである。

この移動過程は約五十年間卽ち僅々二世代の間に行はれたのである。

然らば全世界各國に於ける猶太人分布は如何なる狀態にあるだらうか？　大抵の猶太人に指摘される國は四百五十萬の猶太人を擁する合衆國である。アメリカに次ぐ第二の猶太人口數を持つのは三百十五萬の猶太の居住するポーランドである。こゝには世界猶太の十

九パーセントが住んでゐる。次に續くのはロシヤの三百十萬、ルーマニヤの百萬、ハンガリーの四十二萬、チェコスロバキヤの三萬六千、英國三萬二千、フランス二萬五千、アルゼンチン二萬五千となつてゐる。ドイツは今日信仰上の猶太人約四十五萬である。從つて以上を要約すれば、世界全猶太人の四分の一が合衆國にあり、その他の猶太人の大寄寓地は東部ヨーロッパでは特にポーランド、ロシヤ、ルーマニヤにかたまつてゐる。合衆國と東歐は近代世界に於ける猶太人の大貯水池と言ひ得る。

この巨大な異動經過は今や世界猶太人一般の地位にとつての決定的な事柄となり、また非猶太人隣人の猶太人に對する態度の特色ともなつた。この移動過程こそは今日吾人がそれに當面しつゝある猶太人問題を緊張せしめ、急速に尖鋭化せしめた所以のものである。なぜなれば正にこのどこにも根を持たざる新に膨脹し來つた猶太民族こそは、不安騷擾の要素を彼等の到着した新しい國々へ運び込んだものであるからである。この新參者は大部分は徐々に足場を据えたり、謙讓或は頗る巧妙に宿主民族の中へ入り込む餘裕を持たず、

偏愛を以て強引に押し切り、殆んど到るところで宿主民族の神經を痲痺せしめることを心得てゐた。

かゝる二つの前提條件卽ち精神的、及び集團的社會的事件から近代世界猶太問題に直接連結する他の二つの現象が今や現はれて來た。

第一は、猶太人の蔓延してゐるところ殆んど總てのところで一方では統制が行はれ、他方では支配が行はれてゐるといふ事實である。

統制の狀態とは猶太人が非常に高度のパーセンテージを占めてゐる凡ゆる諸國で擴がり、行はれてゐる事情である。これについては一九三三年以前のドイツの事情を想起するだけでよい。さうすれば、著者の言はんとすることが直ちに理解され得よう。つまり、實際的に言へば次のやうな統制がある。

一、新聞雜誌支配による輿論の統制

二、文化生活（劇場、舞臺、音樂、映畫）の統制
三、金融資本特に銀行の統制
四、其の他の經濟的生活の統制、特に銀行の工業企業監督委員會に與へる影響

最後に猶太人が智的職業、精神的自由職業（辯護士、醫者、文筆業者）に入り込んでゐる事實である。これらの職業ではドイツでは彼等はその絶對權を掌握して居り、而も獨占支配を恣にしてゐる。殊に高等專門學校、大學でさうであつた。

この統制の事情は決してドイツに限られたものではなく、猶太人の今日居住する到るところで多少の差こそあれ必ず見られるところである。猶太人が實際に纒まつた量をなして寄食してゐる個々の國々を摘出するために、ポーランド、ルーマニヤ、合衆國、ハンガリーに目を轉ずれば、到るところこれと同樣の姿が現はれる。卽ち片方で統制を行ふ一方に片方では支配するといふ狀態がそれである。換言すれば、古くからの土着民族が、外部か

ら入り込み、全然樣式性質の異る一の民族に精神的に經濟的に依存し屈服することゝなつたのである。英國へ移住し、カトリック教に改宗したフランス文藝家ヒレー・ベロスは猶太人に關し非常に賢明な興味ある本（「猶太人」、一九二七年ミュンヘン、ケーゼル・ウント・プステット出版所――獨譯）を書いてゐるが、これが何よりの證據である。彼は猶太人問題の本質を特にこの統制と支配といふ現象の中に見出し、これに就いて次の如く言つてゐる。「近世猶太人問題の本質は、猶太人が我々に對する統制を要求し、而も我々は彼等に統制さるゝを欲しないといふ點にある」と。これが文化が或る程度に發達してゐる凡ゆるところで猶太人とその隣人との間に今日見られる諸々の事情である。

近世猶太人問題を勃發せしめた第四の要因は、この異動と同化の精神の影響下に猶太人自身の民族構成中に出來上つた一の現象である。今日の猶太人自體は生理學的に見るならば、根のない樹木と全く同樣である。言葉を換へて言ふならば、たとひドイツであらうと

その他のヨーロッパ諸國であらうと更に亦近代世界のヨーロッパ外の諸國であらうとも今日の猶太人なるものを觀察すれば、殆んど到るところで百姓や手工勞動者のゐない民族なることが分るのである。これが一つである。我がドイツでは一九三三年猶太人の中農業に從事するものは何でも彼でも引くるめて僅かに一・四七パーセントであつたのに、商業や交通關係の猶太人は五九パーセントといふ事情であつた。一方ドイツの人口內譯は商業、交通十七パーセント（猶太人は五九パーセント）、農業二九パーセント（猶太人は一・四七パーセント）であつた。從つて、このことは、ドイツではドイツ人口の職業別分類は猶太人のそれとは全然逆であることを意味する。次に勞働者を見るに、猶太人は八パーセントであつたが、ドイツ人は四七パーセントであつた！　これらのことから猶太人が肉體的勞動を忌み嫌ふことが明である。從つて樂園を追はれるに當り、自己の創造史中で「汝は汝自身の汗によりて汝のパンを嫁ぐべし」との言葉を口にとなへて遍歷の途に上つたこの民族が、正に多くは他人の汗によつて生きてゐるといふ逆說的な、殆んどグロテスクとも

言つてよい狀態となつたのである――このことは嘗つてウェルナー・ゾンバルトも指摘したことがある。

然るにこの民族はこの關係に於て一つの完全に異常なばら〳〵になつた人口構成を持つてゐるのみでなく、この民族が文明といふ見かけだけの面貌を追求してゐる方向では大都市へ集中してゐるのである。地方を逃れ、大都市へ入ることこれが異動の始まつた古代よりこの民族を支配して來た特色なのだ。從來さうであつたし、且つ今尙さうなのである。プロシヤの全猶太人の四二パーセントが殆んど皆集つてゐたベルリンを取つて見ても合衆國を見ても全く同樣の姿が見られたのである！　既に述べたやうに合衆國は總計四百五十萬の猶太人を有してゐる。この四百五十萬猶太人の中少くとも二百萬は、ニュー・ヨーク一市だけに住んでゐる。從つて、全合衆國猶太人の殆んど半がニュー・ヨークに集中し、ニュー・ヨーク人口の三十パーセントを占め、從つて人口三人につき一人は猶太人といふことになつてゐるのである。次にフィラデルフィアでは人口の十四パーセント、シカゴ、ボ

ストンでは夫々十パーセントとなつてゐる。これと全く同様の事情は他の諸國にも見られる。例へば、ロンドンでは全英國猶太人三十二萬の中の十八萬五千、パリーでは全フランス猶太人三十萬中の十三萬五千、アムステルダムでは全オランダ猶太人約十三萬五千中の約六萬六千、ウィーンでは全墺太利猶太人十九萬二千中の十七萬六千、ブダペストでは全ハンガリヤ猶太人四十四萬四千中の二十萬以上、ソフィアでは全ブルガリヤ猶太人四萬七千中の二萬六千、ワルソーでは同市人口の二十六パーセント即ち三十二萬、ロッヅでも同じく人口數の二十六パーセント十六萬、ウィルナでは三十三パーセントの六萬五千、ブエノスアイレスでは全アルゼンチン猶太人二十五萬中の約八萬、モントロールではカナダ全猶太人中の十八萬五千、トロント約四萬五千、ウィニペヒ約三萬、となつて居り、從つて、このカナダでは僅か三つの大都市に同國全猶太人の五分の四以上が集中してゐるわけである。斯かる傾向は猶太人に對し他の民族から培まれ、或は注ぎ込まれたものであると猶太側では屢々書き立てゝゐる。然しながら、この改良し得べくもない傾向は、餘りにそ

の歴史が古く、爲めに後世になつてこれを剪除出來るやうな傾向では到底なく、また餘りにも廣く擴がり過ぎた傾向なるが故に、單に或る一時的な歴史的經驗によつてのみ由來したやうなものでもないのである。それについては幾萬言を費すよりも事實を擧ぐれば直ちに明白な結論が下されることであらう。それは彼等の遺傳なのだ。そしてこの傾向は性格から見れば何等の根底を持たぬこと、一方何等の骨折をもなさずにたゞ齷齪と金を儲けることばかりに努力することとこれである。

そのために猶太民族には農民も手工勞働者もないのだ。要するに何はともあれ地方から逃げ出す民族、アスファルトの民族と言つて差支ないと思ふ。

筆者の見解によれば、以上の事柄が據つて以て今日世界到る所に炎上し、猶太人問題として吾人が體驗してゐるものを招來した前提條件なのだ。若し歴史が二百年前と全く同樣であり、猶太人がゲットー（猶太人の特殊住居區域）に閉ぢ籠もつてゐたならば、恐らく

猶太人問題は今日のやうに尖銳化するに至らなかつたことゝ信ずる。若し例へば猶太人がポーランドやルーマニヤ、ウクライナに於てのやうに纒まつて居たならば、西部ヨーロッパに見る今日の如き猶太人の統制も見ずに濟んだかも知れない。また文化的に高度の諸國に所謂東方猶太人が今日の如く特に著しく進出することもなかつたらう。彼等の登場はこれらの諸民族の誇と健全な思考を殆んど到るところで要求してゐる。然しながら、正にこの東から西へ卽ち東方の無限の貯水池から新に目覺め、開發されつつあつた西方への異動こそは、猶太人問題をこれらの世界に輸入するに役立つたのである。かくして今日の世界猶太問題なるものが起つて來たわけである。猶太人は精神的、經濟的、政治的生活の重要な絲が交流してゐるところ殆んど到る處に巢喰ひ、郭公のやうに巢作りの雛鳥を巢から追ひ出してゐるのである。而もこのことは相當の文化を持つてゐる諸民族の間に特に行はれたのである。だが、今日吾人が猶太問題として見てゐるものに對しての衝擊は、一九三三年及びその後の年猶太法を制定したアドルフ・ヒトラーのドイツによつて先づ切つて落さ

れた。ドイツから一の精神的運動が燃え上り、拍車を加へられ、これが益々他の諸國に擴まりつゝある。

従つて著者は今こゝで猶太問題の輪廓と、ヨーロッパに於けるドイツ近隣の諸國及びその他の世界各國に於ける猶太問題の現狀を述べて見たい。

抑も他の國々を概觀し或は觀察せんとする場合には、猶太問題の意義を先づ第一に認識してかゝらねばならないと信ずる。猶太問題としての猶太問題がドイツ外の世界で荒れ狂つてゐるのである。

先づ猶太問題が益々特に抑壓されてゐるポーランドから筆を進めよう。ポーランドの今日の事情は如何？　前にも述べたやうに、ポーランドは世界第二の「猶太人國」である。卽ち三百十五萬の猶太人がある。この事實は決して最近始まつた事新しいものではない。むしろ猶太人は今日のポーランドをなしてゐる植民區域の中へ、この區域がロシヤやドイ

ツの支配下にあつた頃にさへも益々多く入り込んだのである。然しながら、今日の事情は、ゲットーの開放により、また同化の時代によつてポーランド猶太人もこの民族の精神的、經濟的生活の中に喰ひ入り、それは益々一の危機となり、今日でも愈々尖鋭化し危険を増しつゝある狀態である。かくして次の如く言ひ得る。今日ポーランドでは人口の十一パーセントが猶太人である。この事實だけでも旣に大いに問題とすべきである。だが、猶太人が公共生活に於て、精神的、文化的、經濟的生活に於て如何なる役割を演じてゐるかを見れば、彼等の地位の重要性と危險の大さが分るであらう。

精神的職業の約七十パーセント、特に辯護士、醫師に於ては旣に我がドイツの猶太人職業別を述べた際と全く同樣である。更に猶太人が商業を廣汎に我が物とし、時によつては五〇パーセント以上彼等の勢力下に收め、卽ち東部諸州、昔のガリシヤ、ウォルイニヤ、更にリスアニヤに接する地方に於ても然りであることに注意しなければならない。從つて、これらの事情は一九三三年以前のドイツのそれと全く相似してゐる。

かくて猶太問題はポーランドに於ても今や勃興するに至つたのである。特にこれを促進した要因は學生階級であつた。即ち最近單科大學で猶太人學生とポーランド人學生の間に激烈な軋轢が起つた。それによれば、猶太人學生は猶太人の所謂「ゲットー椅子」といふ一種の特定席に限らるべしといふのであつた。特に「Numerus clausus—制限付の許可」を實施すべしとの要求が掲げられた。つまり、猶太人學生の數は猶太人の人口比率と一致すべきことゝいふのである。實際猶太人學生數が人口數と相一致してゐないことは事實が證明してゐる。一九二三年から二四年にかけて全ポーランド學生の中の二四・四パーセントは猶太人であり、一九三二年から三三年にかけても尙依然として一八・七パーセントであつた。醫學部では一九二三—二四年猶太人學生三〇・二パーセント、一九三二—三三年一八・四パーセントであつた。ポーランドに於ける猶太支配が如何に猛烈を極めたかを最もよく示す實例を二、三擧げよう。本年ワルソーの控訴院に於ける辯護士宣誓に宣誓した二十四人の辯護士の中七人はキリスト教を宗派とし、十七名はモーゼ教であつた。従つ

て、既に各州で醫者、辯護士、俳優等の職業組織が彼等の會員集會を行つて「アリアン人章」實施に賛成し始め、それが殆んど規則正しく增加しつゝあることは怪しむに足りない。
その場合ポーランドに於ける反セム主義運動の本來の擔當者は政府關係の黨派でなく、既に新國家ポーランドの成立以來國家民主黨の反對黨卽ち「自由主義者」の反對派の陣營であつたのである。だが二、三ヶ月以前から反セム主義いやもつと精確に言ふならば、猶太の危險に對する憂慮が政府陣營內を襲つたのである。かくて遂に、ポーランド政府筋も今日では國內の猶太勢力を如何に驅逐し得るか、特に三百十五萬猶太のとの無限に重苦しい抑壓から、如何にしてポーランド人を解放し得るかを眞劍に考慮し始めたのである。何故なら、一民族はこの外國異分子を長い間の中には遂に消化出來ないからである。それは今日明白に證明されてゐる。輿論は愈々「如何にして吾人は猶太人を除去し得るか」といふ問題に集中して益々尖銳化してゐる。
とのためにポーランド政府は三ヶ月前重大な處置をとらざるを得なかつた。ポーランド

政府は國際聯盟に請願書を提出し、國際聯盟が猶太人をポーランドから外へ異動せしめ得ないかどうかを問ふた。一九三六年末外相ベックはジュネーブに於て猶太人移出の問題は「ヨーロッパ問題」なりと述べた。その結果一應やゝ平靜となつたが、それも外相ベックがロンドンを訪問した後のことであつた。この點については最初ポーランド政府の努力を抑へつけてゐた猶太＝英國の或る勢力が確に一役買つたに違ひない。然し事態はそれに構はず前進した。かくしてコーク大佐の作つた國民統一陣營の首領コワレフスキー大佐は、一九三七年四月末新聞記者との會見に於て詳細に事態を説明した後次の如く結んだ。「猶太問題は只移民といふ方法によつてのみ解決し得る」と。と同時にポーランド政府は三人の專門家より成る探險隊を移民研究のためマダガスカルへ派遣した。

このこと自體はポーランド人の問題であつて我々はこれに氣を使ふ必要もなく、またそれを配慮する義務もない。たゞポーランドでは猶太人問題が今日政府によつて認識され、肯定されてゐるといふことを確言するだけで充分である。

猶太人數から言へば第二の大國たるロシヤは問題にしなくてもよい。何故なれば、今日のロシヤの廣汎な猶太人の實際的事情に就いては餘り詳しいことが分らないからである。これがために目下のところ信憑するに足る學問的基礎を筆者は持合してゐない。

從つて猶太人口百萬を算へるルーマニヤに移らう。ルーマニヤで先づ第一に强調しなければならぬことは、この百萬といふ猶太人々口數が頗る怪はしいといふ點である。即ち、ルーマニヤ官廳の發表では百五十萬とあり、殊に所謂民族運動の黨派の言によると約二百萬とも見積られてゐるのである。ルーマニヤの事情はポーランドのそれと類似してゐる。ルーマニヤでも近年眞劍な論題となつて今日では實際問題とまでなつてゐる。ルーマニヤでも猶太人問題は政府當局注目の的となつて來た。つまり猶太勢力を益々防止しようとの努力が熾烈となつてきた。猶太人自身でさへルーマニヤの事情が大分變つて來たことを認めてゐる。このことは、ルーマニヤで改宗が非常に顯著に行はれてゐる事實からも分る。

極く最近でも約六百の猶太人が時を同じうしてブカレストの總主教を訪れ、洗禮を受け、正教に改宗せんことを乞ふた。このことは猶太人が身の危險を感ずるに至つたことを如實に物語るバロメーターである。ルーマニヤに於ては東歐諸國で常に見られるやうに反對派としての反對派は學界や學生層の中にある。即ちそれはクーザ教授の「國民基督教」運動及びコドレアヌの率ゐる「鐵衞團—Eiserne Garde」といふ組織である。然しながら、最も大事なことは、この點でも既にルーマニヤ政府は自らこの問題をとり上げ、而も——議會は休會となつてゐるにも拘はらず——緊急令を發して、猶太人のためにルーマニヤ經濟界が外國化してしまふといふとの問題を解決しようとの意圖さへあるといふことである。「國民勞働を防衞するために」、今や緊急令の發布が待たれてゐる——この觀念は頗る興味がある。この緊急令の內容は將來ルーマニヤの總ての企業や經營は、純ルーマニヤ系の職員、雇員、勞働者で以て七十五パーセントを占め、他の系統をひいてルーマニヤ國籍のものが二十パーセント、外國人は五パーセントたるべしと言ふのである。これまで多くの經

營内の事情が如何なるものであつたかを知るためにはパーセンテージを調ぶればよい。ルーマニヤに於ける猶太人の獨占舞臺は特に銀行、新聞界である。經濟界への猶太人滲蝕を示す事實は、一九二七年から三六年の十七ケ年間にブカレストの住宅建設に投ぜられた三百六十億ライの中二百九十億ライは猶太系資本から出たといふ例である。ルーマニヤでも辯護士職は特に猶太人が好むところであり、最近ルーマニヤ辯護士會議は「Numerus clausus」の實施を決議した程である。シーベンブルグの雜誌「Volk im Osten」に最近掲載された「ルーマニヤの猶太問題」と題する論文中に識者ドクトル・ウィクトール・C・イルク氏は次の如く述べてゐる。

「大ルーマニヤの凡ての今日の國内政治問題中、ルーマニヤ生命圏に關してルーマニヤ國民が猶太民族要素、種族要素に對してとつてゐる如き最後的態度より大なるものなし」と。

更に目をハンガリーに移せば此處でも亦事情は同樣である。ハンガリーでの猶太獨占支

配の最も目立つのは第一に殆んど完全に猶太人によつて牛耳られてゐる新聞界であり、第二は銀行である。また猶太人が特にブカレストに集中してゐることも充分注意しなければならない。即ち、全ハンガリー猶太人の殆んど半數がこの一市に住んでゐるのだ。その結果政府は反猶太的處置を容易にとり得ない事情にある。然し、ことルーマニヤでも最近非常な反對運動が目立つて來た。特に醫者、辯護士の職業の外國化は益々顯著となつて來た。一九一七——一八年全學生の中の三一・七パーセントが猶太人であり、一九三一年尚一〇・五パーセントを占めてゐた。かくして個々の大學では暴動が起り、殊にセゲディン、フュンフキルヘンでひどかつた。到るところハンガリーの學生は猶太人學生の蔓延に反抗し「numerus clausus」の實施方を要求し、またそれを實行に移した。フュンフキルヘンでは猶太人は聽講生の僅かに五パーセントだけを許可されることになつた。

ハンガリーでも最近二、三年との方猶太問題は政府當局も放置して行くわけに行かなくなり、一九三七年四月十八日首相ダラニーはセゲディンの綱要演說中に「猶太問題」を取

り擧げた。その場合彼は平和破壞による解決法には斷乎たる處置を以て臨むことを言明した。同時に彼は次の如く述べた。

「ハンガリーの猶太人比率が他の多くの諸國のそれより遙かに大であることは否定出來ない。主として經濟的問題たる猶太問題の核心が、猶太人が經濟生活に於ては彼等の高度の人口比率をも遙かに凌ぐ程度に達してゐるがためであることも事實である。ハンガリーの社會は猶太問題に關しては、緊密性と本能的商業慾を持ち東から入つて來るガリシヤ人によつても刺戟された。吾人は先づ第一に、こゝに古くから定着し、後から入つて來る猶太人より遙かに高度の文化を持つもの﹅ために、彼等と感情思考を全く異にする諸分子を同一視せざること、またかゝる異分子のハンガリーへの侵入を我々政府は嚴重に防止するものなることを確言して置かねばならない。吾人はまた彼等の活動、彼等の投機的違法的有害な經營を嚴重に取締り、彼等及び彼等の活動を法によつて規定しなければならない。これらの者達は、さなきだに多くは我等の祖國ハンガリーをたゞの通過區域とか經濟的狩場

としか考へてゐないのである」と。

西部ヨーロッパでは斯かる反猶太運動はそれ程進展してゐない。だが英國でも或る程度の反猶太運動が目につくやうになつた。猶太人自身がこのことを彼等の雜誌に書いてゐるのである。予はこゝでは、二、三ケ月前ロンドン猶太人の避難所たるロンドン・オストエンドで暴動が惹起し、その結果英國內相シモン卿は、議會に於て演說を行ひ、警察が何故に時を移さず充分の處置をとらなかつたかに就いての答辯を餘儀なくされたことを想起して置かう。

猶太人數の稍少いイタリアでも同樣に反猶太的運動が認められる。而もそれは人種的見地に立つた猶太排撃運動である。かくしてイタリヤ在住の猶太人は共產主義に對して彼等が如何なる態度をとつてゐるかを鮮明にしなければならなくなつた。何れにしてもとの點に關してもイタリヤは目覺めたのである。

オランダでは技師長A・A・ムッセルトの率ゐる「オランダ國民社會主義運動――NSB」がこの運動のために鬪爭中である。この運動の首領の最近の聲明によれば、この運動は反猶太的ではないが、政權をとつたならば、凡ゆる部門に於ける異常な猶太支配は間もなく終局を告げるであらうと述べてゐる。

かくしてドイツ周邊の各國を見渡せば、猶太人に對する覺醒が明に進軍を開始してゐると斷言し得るのである。一方ではこれに相應じて猶太人はヨーロッパの世界で新に移出し出してゐる。猶太人は出來るだけ多くポーランド、ルーマニヤ、リスアニヤ等から逃げ出ようとしてゐる。彼等は自分の安全なりと信ずる出來るだけ遠隔の地に到達しようとしてゐる。これは今や全ヨーロッパに擴がつてゐる一般的經過である。

今日世界の問題となつてゐる事柄を一猶太人而も世界猶太の中の指導的一人物たるハイム・ワイズマン博士の言より要領よく總括したものはない。シオニストの指導者たる彼は

最近次のやうに述べてゐる。「世界は二つのグループの國に分れてゐる。一は猶太人を驅逐せんとする國であり、他は猶太人を收容し度くないとする國々である」と。

猶太人を驅逐せんとする國々に就いては上來述べて來た。これに屬する他の國は、これまた旣に神經質となり、憂慮して居り、猶太人に對しては其の門戶を閉し始めてゐる國々である。

これらの國々を概觀すれば、特殊の、殆んど逆說的とも言へる觀察が生じてくる。新に發見せられた國々に於ての反セム主義の擔當者は正に猶太人移民なのである。

最近十年間の猶太人の巨大な異動經路は、新世界への道であつた。アメリカ合衆國では猶太人が幅を利かし勢力を張つてゐるが、合衆國も時折彼等の門戶を閉鎖した。とゝでは只ニュー・ヨークの猶太人市長ラ・ガルディアの不遜、無禮な言辭を指摘するに止めよう。彼の言によつて今日合衆國で猶太人が如何に僭越なことを爲し得るかゞ分るのである。それにも拘はらず、合衆國は賢明にも猶太人に對する門戶を閉してしまつたのであ

る。その結果最近に於ける猶太人の移動は南米に方向を變へてしまつた。特にブラジル、アルゼンチンへの移住が熾烈である。然しこゝでも亦猶太人は既に閉め出しを喰つてゐる。これについては猶太人自身に責任がないとは言へない。

最初これらの國も公つぴらな態度で何等猶太人を意に介しなかつたが、やがて一瞬にして聰明になつた。而もそれは猶太人の打建てた方法を基礎にしたものであつた。

南米諸國が必要とするのは勿論ヨーロッパに塵を落し、新しい國土を求める文明猶太人ではない。これらの國は寧ろ、そこで鋤や鍬をとつて土地を耕作し、植民する土地勞働者を求めてゐるのだ。然るにこの仕事は正に猶太人の最も好まぬ仕事である。從つて猶太人は先づ始めに所謂勸誘狀といふ方法で忍び込まうとした。この勸誘狀には次のやうな事情がある。最初猶太人は何等躊躇せずにこの國へ入り込み、そこに何等の制限もなかつた。だが遂にブラジル政府は問題にし始めた。かくして次第に門が閉められるに至つた。ブラジル政府は打開策を立て、我々は何人をも入れるが、但し一定の勸誘狀を示し得るものに限

ると聲明したのである。從つて、今若し、或るブラジルの農業雇用主が一人の勞働者を求める場合には、所謂勸誘狀といふ一種のカードの發行を受けるのである。この勸誘狀によつて當該雇用主は移民許可を得るのである。かくしてこの「召狀」といふ方法によつて多くの猶太人が入國したが、勿論彼等はこゝで農業勞働者となる考は毛頭なかつたのである。その地の方法は、先づ三ヶ月間滯在の許可を得てこれに基いて入國するのであつたが、これも違反が多く、結局彼等はブラジルはどこでも潜入し得ると信じた程である。だがこれも今日では撤廢された。現行移民法は一切を取締ることゝなつて居るが、而もそれは農業移民はこれを促進奬勵し、一方都市への移入は閉鎖するといふのが最初の意義であつた。かくして結局は反セム主義を擡頭せしめたものは移民であつたといふ結論になる。猶太人の移入する諸國が覺醒し、不信となるとするならば、その責任は主として猶太人にあるのだ。

南阿に於ても同樣である。こゝの發展は全く啓發的なものがある。既に前に筆者は猶太人の一つの方向が南阿に向つてゐることを述べた。一九二六年猶太人は一萬一千八百あつて南阿白人中の四、八パーセントを占めてゐた。これに反して一九三六年にはその數字は信ずべき見積によれば既に十三萬に達し、從つて、白人々口中の七パーセントに增加してゐるのである。既にこれより先猶太人の努力はこゝでは頗る著しいものがあり、特にヨハネスブルグのダイアモンド產地、舊トランスバール等に於て著しい。こゝでは二人の猶太人の名を擧げるに止めて置かう。一人はハンブルグ生れのアルフレッド・ベイト、他はバルネイ・バルナトであるが、この兩名はセシル・ローヅと共にダイアモンド產地を開拓したものである。彼等は南アフリカのダイアモンド鑛山、ダイアモンド工業の資本主義的創立者の一人である。今日でも、尙ダイアモンド鑛業及びその取引は猶太人によつて支配されてゐる。同じことは南アフリカの金鑛業について言へるが、これまた殆んど全部猶太人の獨占となつてゐる。精神的生活を支配してゐるのは猶太人シュレシンガーのコンツェルンで

ある。即ち彼はこの國の劇場や映畫企業を統制支配し、報道機關に於てはその中樞的地位を占め、政府が若し最後の瞬間に適當な處置を講じなかつたならば殆んど全てのラジオを彼等の勢力下に入れてしまつたかも知れない。今やこの地の猶太人は彼等の政治上、輿論上更にまた經濟上の勢力を利用してヨーロッパからの避難猶太人に對して援助を與へるに至つてゐる。幾百となき猶太人がヨーロッパから南アフリカへ移民して來たが、その結果一九三七年一月南アフリカに於ても移民は同様に制限されるといふ法律が可決されることとなつた位である。プレトリヤ政府は最後の瞬間まで決斷を下すことが出來なかつた。それ程この國に於ける自由主義的親猶太分子の勢力は强かつたのである。前首相スムート將軍の名を想起するだけでよい。彼は全く際立つた親猶太主義者で、而もそれを公然と言明したゐた程である。現首相ヘルツォーグ將軍も決して反猶太主義者とは思はれない。それにも拘はらずこの移民禁止法が通過したのであるから事情推して知るべしである。今若し情報を信じてよいとするならば、最後の瞬間にもドイツよりの猶太人約五百名を載せた船

「ストットガルト」が到着したとのことである。この最後の追放は南アフリカの公衆をも驚かした。これが遂に最後の斷を政府に下さしめたのである。

これは正に猶太移民が目的國に於て反セム主義を促進したといふ歴史的例である。

かくして今や南アフリカでは猶太人をも含む凡ゆる移民は、先づ半年の間の試験を受けねばならぬことになつた。彼等は或る一定の證明期間を經なければならない。この期間の間に彼等は、彼等が南アフリカ民族中に入れられる資格があるかどうかを調べられるのである。この法律がどの程度にまで實施されるかは勿論豫想困難である。たゞその目的は異種族分子の移入を阻止しようといふのである。

移民して來るもの自體が反セム主義を促進したといふ他の非常に面白い實例は、ストックホルムのカッツ教授事件である。彼は猶太人が最後の危機的瞬間にも神に見捨てられた――これ以上の適切な言葉を筆者は知らない――人間であるといふ最もよき例である。カッツ教授はドイツ系の猶太人で英國へ渡りこゝで色々と職場を求めた。瑞典へ渡り、そこ

でストックホルム大學の國民倫理學の講座を受持つた。この講座自體は或る相當な瑞典人が設けたものである。この「カッツ事件」は一九三七年春起つた。その他にも色々の可能な講座例へば化學、醫學、冶金學その他何でもあつたのに拘はらず、事もあらうに瑞典人の設立した「國民倫理學」の講座が猶太移民カッツに委ねられたことは全く驚くべきことである。瑞典生れの學者がこの職を求めても與へられなかつたに拘はらず新參者の猶太人カッツにはそれが許されたのである。この背後に如何なる神秘的勢力がかくれてゐるかは筆者には全然分らない。何れにしてもこの事件は瑞典人には非常なセンセーションを惹起し、惡い影響を與へた。正に心理學的謎なりとされた。實際これこそは猶太人の波瀾に富む悲劇的歷史を解く一つの鍵である。猶太人の地位境遇がよければよい丈けに、彼等は傲慢となり不遜となるのである。猶太の歷史を見れば斯かる考方は益々強くなつてくるのである。この惡德はこの猶太民族の性質、歷史に於ける最も性格的な特徵である。

他の例は、それ程際立つたものではないがケルゼン教授事件である。ケルゼンはドイツ

の單科大學國法學の教師であつた。ドイツ法律學及び國家學の中で或る一定の種々問題とされた學派が彼の名に因んでケルゼン學派と稱せられた。ケルゼンも同様に外國へ移り、最後にプラーグに居を据え、特にプラーグのドイツ大學に職を奉じた。こゝで彼はチエコ政府から——といふより外仕方がない——在外ドイツ人を押し切つて講座を擔當せしめられた。この大學教授任命が——外に表現はない——同地在住のドイツ人に如何なる反響を與へたかは想像に難くない。こゝでも亦猶太人の盲目的な不遜の態度がはつきり現はれてゐる。而も彼等猶太人自身はかゝる示威や大學教授任命によつて自分自身に如何なる禍が齎らされるかは全然知らないでゐるのである。

以上がドイツ及びドイツ外の地に於て吾人が今日當面してゐる猶太人問題の現状である。

さて吾人は愈々猶太人自身がそれによつて切抜けることが出來ると信じ、また現にそれ

を行つてゐる逃げ道は如何なるものであるかとの問題に逢着する。つまりシオニズムといふ遁げ口がそれである。

そも／＼猶太人自身から出たシオニズムなるものは同化の時代に對する反應である。シオニズムは猶太人を或る一の民族的故郷に殊に彼等の所謂古い「聖地」パレスチナに集合せしめるをその目的としてゐる。シオニズムは今年を以て四十年の歴史を持つてゐる（註、原著一九三七年）その鼻祖は「猶太人國―Der Judenstaat」（一八九六年）を著はしたテオドール・ヘルツルである。その本質から見れば理想主義型の代表者とも言ふべきテオドール・ヘルツルは、ブカレストに生れ、後ウィーンのヂャーナリストとなり、ウィーンの「ノイエ・フライエン・プレッセ」誌のパリー特派員となつた。このパリー滯在中彼は一八九三年所謂ドレフュス事件なるものを體驗した。そして、この事件と、當時フランスで猛烈な勢で爆發し、炎上しつゝあつた反猶太主義の印象を強く受け、彼は猶太人國といふ考方とシオニズムへの信仰が彼の胸中に深まつたのである。かくして遂に猶太人國家に關す

る著作となり、一八九六年それを脱稿したのであつた。

そして翌一八九七年スイスのバーゼルで第一回シオンスト大會を開催した。こゝで始めて世界各國からのシオン ニト・グループの代表者が集つたのである。これは當時未聞の事件であつた。何故ならば、テオドール・ヘルツルが提案した綱要といふか標語は當時の時代精神とは全く相容れぬものであつたからである。ヘルツルは時代の流に逆つてゐた。今日に於てもさうであり、從つて、猶太人國の思想は到底實現し得べくもない。猶太人は世界大戰後一九一七年バルフォア宣言によつて、テオドール・ヘルツルが夢見た如く公の、法律的性格を持つた民族的故鄕を得た。而もそれは英國の統治を受けるパレスタイン保護領に於てゞあつた。

外面的に見るならば、こゝに猶太問題の一解決法が見られ、實際に何か斯ら猶太人の國家が出來上つたやうに見え、またそれが今後發展し行き得るやうに見える。だが今もしその根底を仔細に檢討して見るとこゝでも亦精々よく見積つてロマンチックなユートピアに

すぎず、一方惡く見れば猶太人が常にその方の大家たる「設立」といふ問題だけに過ぎぬと斷定せざるを得ない。今日確にヨーロッパでは幾百萬の猶太人がシオニズムの綱要を信じ切つてゐる。それにも拘はらずパレスタインの民族的故鄕といふこの建物は頗る怪しい氣な地盤の上に立つてゐる——と予は信じてゐる。

最初に檢討すべきこととは、パレスタインは勢力的に見た場合如何なる事情にあるかといふことである。この點に關してはパレスタイン猶太人の存在は擧げて英國人の恩惠と自由意志に依存してゐる。英國人がその一般的世界政策的理由からパレスタインから手を引かざるを得なくなつたやうな場合には、猶太人は全く宙に浮くこととゝなるのである。加之、猶太人はアラビヤ人と峻烈な對立をなしてゐる。今日パレスタインに住む猶太人は總計四十萬である。これに對するにパレスタインのアラビヤ人は九十萬、而もそのまはりの近東アジヤ、埃及には總計三千二百萬のアラビヤ人が猶太人を取圍んでゐるのである。從つて

彼等猶太人の運命は完全に英國の地中海政策の成行如何に懸つてゐるのである。

一九三六—三七年にかけての冬パレスタインには英國の委員會があつた。この委員會は數週間に亘つて訊問を行つた。今や英國新聞にはこの委員會の提案に對する最初の打診が現はれ始めた。最近の報道によれば、この提案は猶太人とアラビヤ人を分離する目的のものであつたとのことである。これまではパレスタインは單一的な保護領であつた。この單一的なパレスタイン保護領内で今や猶太人とアラビヤ人は相互に截然分れて對立闘爭したのである。そこで今この兩者を地域的に分離し、二つの地區を作り、猶太人とアラビヤ人を夫々別の地區に入れようとしたのである。これは今日猶太人の領有する土地の制限を意味するものであつた。これが實施されゝば猶太人は自己の敗北と感じたかも知れない。一方アラビヤ人は今後の人口を禁止しようとするに至つた。何故なれば、彼等は猶太人が彼等から土地を奪ひ、益々彼等よりも勢力を增し、最後にはこの保護領内で、現在アラビヤ人の享有する絶對性を奪はれるといふ事實に直面してゐたからである。

これが今日猶太人が獨自のシオニスト國家をパレスタインに作らうとの彼等の計畫を實現せんとしてゐる外面的な政治狀況である。然しそれでは問題はまだ決して盡されない。從つて吾人はこゝで猶太人といふ種族の本質について述べよう。

筆者は前にパレスタインのこの猶太人獨自の國家は精々よく見積つてロマンチックなユートピアに過ぎないと述べた。この猶太人國家が創立された方法そのものからして既に非常に教訓に富むものがある。つまり一九一七年のことなのである。この年には英國政府は經濟上非常な困窮の狀態にあつた。政府は彈藥補給の方法を再組織し、技術の最高限度を發揮せねばならなかつた。そしてその時政府が目をつけたのは當時まだ餘り世に知れてゐなかつた猶太人化學者ハイム・ワイズマンであつた。彼は早速或る地位につけられ、英國戰時經濟に於ける相當重要な、而も最高度の責任ある使命を受けたのである。この使命はワイズマンには一の浮力みたいなものであつた。彼は長年この方英國政府を（特にバルフオアとロイド・ジョージを）シオニズムの陣營に引入れ、戰爭が勝利に終つた場合には英國

の手によつて猶太人にパレスタインに公法的性格をもつ猶太人の民族國家を得しむとの約束を得ようとして運動して來た實際的シオニストであつたのである。かくして一九一七年には所謂バルフォア宣言なるものが發せられた。この約束は一九二〇年乃至一九二二年に英國の保護が猶太人に讓渡されたことによつて解決された。

同時に筆者は此處で、ハイム・ワイズマンの理想主義がたとひ如何程高く評價されようとも、それによつて國家が出來るものでないことを言つて置き度い。またパレスタインその後の發展が如何に完成されようとも國家は成立しないことを言つて置く。

若し他の諸民族が政治的自由、獨自の國家性を達成しようと眞劍の努力を拂つてゐる場合には、それは常に一民族が他の一切の反抗に對して熱情的に突進することによつてなし遂げられるものである。而もその一民族が一定の土地に縛りつけられ、幸不幸の歷史總てを通じてこの土地にいつまでも縛られ、外界に對してはこの國土を護り、而も危險の至つた場合には挺身以てこれを防がねばならぬ民族である。

然るに猶太人に於てはそれは全然違つてゐる。猶太人は或る一定の土地と苦樂を倶にし、またとの土地と深く結び合つてゐるやうな民族ではなく、彼等は何れも他人のあらゆる國土から他の國へ寄つて集つたものである。更に彼等の土地も危險を冒して獲得されたある一定の土地ではなく、この土地も先づアラビヤ人から買はねばならなかつたものである。筆者はこゝでは或る猶太人自身の言葉を引用して置くに止める。さらすれば予が不公平な立場をとつてゐるとの懸念もないだらうから。その言葉は非常に特徵的なものであるが、猶太人の悟性を實によくうがつた言葉である。卽ち曰く「パレスタイン猶太人國の錯覺」といふのがそれで、ウィーンの政治記者エリー・ルービン・ソチウスが書いたものである。

エリー・ルービン・ソチウスはこの書に於て、徹底的にテオドール・ヘルツルを攻擊し、ヘルツルを批判してゐる。それだけに止まらず、ヘルツルをロマンチックな熱情から

猶太人國家といふ幻像を作りあげた大學生だと揶喩し、ヘルツルの錯覺をすべて引剝いでしまつた。彼は「猶太人國」の像を最も性格的な表現方法で「蜃氣樓（フアタ・モルガナ）」なりと言つてゐるが、彼自身の民族の由來を諷刺してゐる。仔細に檢討すれば猶太人國家といふ全體像は「丁度沙漠に現はれる」蜃氣樓と同じだとルービン・ソチウス自身が書いてゐる。パレスタインに於けるヘルツルの「獨特な民族的自由運動」に對しては、彼は辛辣な而も肯綮に當る言葉を使つてゐる。即ち「先づ土地を現金で(per)買はねばならぬ。然る後民族は沓證の許可を得て後土地へ促進されねばならない。然る後この民族に共通の言葉を齎らし、最後にこの誤謬を完成するために英國人、アラビヤ人に叮重に願つてアングロ・アラビヤ支配を沒落せしめるために出來るだけ多くの猶太人をこの土地へ入れることを賴まねばならない」。

予はこゝではこれ以上のことを述べる必要はないと信ずる。何故なれば余が今擧げた點は何れも問題の要點を盡してゐるからである。それは些か議論的に見えるが、パレスタイ

ン猶太國家の「設立」經過である。先づ土地は世界各國の富裕な猶太人が莫大な金額を醵出することによつて買はれねばならない。このことについてもエリー・ルービン・ソチウスが述べてゐる。彼の見積りによれば、こゝに猶太人の植民が始まつて以來の約十年間にこの土地購入といふことに約六億シリングが注がれたとのことである。

これを要約すれば、先づ第一に民族といふものがないのである。何故なれば、こゝに出來上つた猶太民族なるものは、他の凡ての寄寓國から寄せ集つた集合的なものであるからである。第二に土地がない。土地を先づ「現金で」買はねばならない。第三に共通の言葉がない。勿論ヘブライ語は公の言葉ではある。だが多くのものはヘブライ語を知らず、僅かのものがドイツ語が出來、ポーランド、ウクライナから來た他の一部のものはイッディシュ語を語り、更に他のものはスペイン語を話すといふ事情である。然しヘブライ語の出來るものは最も少い。從つてこの民族には和解し合ふための單一的な言葉がないと言へるのである。最後に獨自の文化といふものを持つてゐないのである。今日の猶太人に於てもさ

うである。猶太人は我がドイツでは彼等の文化國體をもつてゐる。彼等は劇場を開き、講演を行ひ、音樂會を開いて文化的な獨自の生活を營んではゐるが、そのプログラムを見ると、文化的領域に關しては猶太人自身の作品の如何に少いかゞ直ちに分るのである。メンデルスゾーンとかオッフェンバッハ、或はグスタフ・マーラーの如きものも現はれるが、モーツァルトやベートホーヴェンやバッハの方が遙かに多く演奏されるのである。そして若しテル・アビヴでトスカニーニが猶太人オーケストラを指揮したからとて、それは決して特別なことではない。この國にどし〳〵注ぎ込まれる猶太資本によつて建設されてゐる新しい建築物の寫眞を見てもこれと全く同じことが言へる。全く雨後の筍のやうに續々と新しい建物が作られてゐる。だがそれは何れも我々が馴れ切つてゐるやうなありふれた型ばかりであつて獨創性は全然認められない。ベルリンの建築家メンデルスゾーンやフランクフルトのギンハイム丘に建物を作つたフランクフルト・アム・マインの都市建設者マイの模倣に過ぎない。前者は今ニュー・ヨークにあり、後者はモスコーにある。彼等の作る家

はニュー・ヨークにもモスコーにも立ち得る。それは數學的な形式で作られた典型的な猶太的立體派的建築樣式である。彼等の作つたものは、家にしても庭園にしても情緒や魂のない像物に過ぎない。これらを作つたものは決して建築家でなく、我々の使ふ意味での藝術家でもなく、誤れる對象物の中へ陷り込んだ數學者、技師に外ならないのだ。

從つて猶太人は獨自の文化、獨自の歷史、獨自の言語をもつた出來上つた民族ではないと言へる。その結果彼等には概してその上に一の國家が建てられ得る一切の基礎といふものが缺けてゐる。こゝで問題となるものは――予は歷史家としてこれ以上の表現を知らないが――何と言つても單なる理想主義であつて、多くの移住者はこれを以てその仕事にとりかゝらうとしてゐるのであり、言はゞ國家がそんなことでは到底成立しさうもない方法なのだ。

とのことを最もよく證明するものは猶太人自身の陣營內の分裂といふことである。これ

に關してジュネーブ、ウィーンその他に於けるシオニスト大會の報告を通覽するだけで充分である。さうすれば、タルムードの詭辯と理窟とによつて各種の派が夫々の立場を無理矢理にひねり出し、猶太的熱狂主義に墮してゐることが明瞭に分るのである。その諸派たるや右翼、日和見主義者、自由主義者から果ては共產主義の息のかゝつた勞働者黨にまで及ぶものである。一方純然たる正教派猶太人があるかと思ふと、他方には無神論的、ボルシェヴィーキ的無信仰的猶太人があるといつた調子である。これと全く同樣の諸傾向がパレスタインにもある。シオニスト運動はこれらの總ての派閥と鬪爭しなければならないのである。

かくてシオニスト會議の主眼は、これら各種の方向を一つに纒めるといふ點に置かれねばならなかつた。議長ハイム・ワイズマンはこれまで實に驚異に値する才能を以て絕えず各種の傾向の黨派を少くとも外面上は統轄して來たことを認めざるを得ない。然しながらその內幕では對立が絕えず現はれて來たのであつた。

こんな心理的、道德的基礎を基にしてはその上に單一的國家が成立するなどとは到底思ひもよらぬことである。

かくの如く問題を冷靜に虛心坦懷に而も客觀的に考察してくれば、幾十萬の猶太人が今日その祝福を期待してゐるところの猶太人國の將來の豫測が出來るのである。

最後にパレスタインの猶太人國の勢力關係を一瞥して置から。既に述べたやうに、全世界猶太人千六百萬の中パレスタインには僅かに四十萬が住んでゐるだけである。この四十萬は殆んど全部が所謂「植民した」ものでなく、この四十萬の中更に四分の三が三つの大都市に塊まつてゐるのである。即ち三十萬は近代的な大都會否「新エルサレム」と言つた方がよいかも知れないテル・アビブ、エルサレム、ハイファ及びヤッファに住んでゐる。植民者として地方に住むものは十萬に足らず、この十萬の中でも一部は農業勞働者、雇員、技術家としてロートシルド男その他の富豪達の大移民植民地に住んでゐるから植民や農夫

は非常に僅少と言はねばならない。

今や非猶太人國に於ても猶太人の世界に於ても均しく猶太問題が起つて來てゐる。これが上來余が考察し來つた結論である。そして闘爭は益々峻烈となりつゝある。

猶太陣營の潮流を見るに二つのグループがある。一は猶太人自身によつて作られ、今日でも尙時勢の重大なるを認識せず、或は認識しようとせざる一派である。これは主として西部ヨーロッパ及び新大陸の自由主義的民主々義的諸國の猶太人である。これらの諸國の數百萬の猶太人は今尙安全なりと思つてゐる。これらの國々では少くとも政治的に見れば全く賢明な處置とは言へない程猶太人の中の或る代表者は厚顔鐵面皮なことをやることが公然許されてゐる。こゝでは猶太人を今襲ひつゝある危險が如何に大きいものであるかなど夢想だにしないでゐる。それどころか彼等が手に入れた公的生活、經濟界、政治上の勢力を恣にしてゐるのである。外面的に見れば、多くの場合、國境外のことゝ猶太人の内部とは何等の聯關もないかの如く見える。だが、世界のどこかで猶太人の利益に非常に重大

な關係を持つ場合には、國際的連絡と團結が早速これに横車を入れるのである。ビスマルクの言を借れば、「一猶太人を捕へるがよい。然らば世界のあらゆる偶々より同時に叫聲が擧るであらう」と。

手近な例はドイツで猶太人をボイコットした時、世界各地からドイツに向けられた非難がそれであつた。國民社會主義が猶太問題の解決に乘出さんと宣言した時、世界猶太人にはこれが反響燎原の火の如く燃え上つたのであつた。また最近ポーランドで衝突があつて、そのため猶太人數名が生命を失つたとの報が傳へられた時も全くその通りであつた。それ程この猶太民族は文字通り國際性を持つてゐる。猶太人の格言は「Ubi bene, ibi patria 卽ち汝の故鄕は世界なり」である。

他方に於ては、今日猶太人界に現はれる凡ゆる動搖を深刻に痛感し、加工する一派である。彼等は絕えず「約束の國」、祖先の國への復歸といふ憧れを抱いてゐる。これに屬するものは主として「國で從順な」ものである。彼等は多くは非常に少數であつた。今日彼等

は猶太人が今正に異常の危險に曝されつつある折とてこれに與するものが非常に多くなつてゐる。この一派は特に中部、東部ヨーロッパに擴がつてゐる。

この二つのグループの間に介在する一つの層があつた。これは同化の時代に實際に精神的にも彼等の寄寓する民族と融合せんとして眞劍な努力を拂つたものであつた。然しこの一派は前記二つのグループに比較すれば全く取るに足らぬ寥々たるものであつた。

今日政治的に重要且つ指導的なのは、「國際的」猶太人、「民族的(ナチオナーレ)」猶太人と稱し得る二つの決定的潮流である。

この二つの傾向、潮流の間を今日猶太人は動搖してゐるのである。或る時は一方が勢力を得、また他の時になると他方に代られるといふ事情であつた。そして而も猶太民族は遂に決斷出來ないでゐるのである。一方で國際的植民地といふ凡ゆる長所と快適性、權力所有、幸福、贅澤、更に國際的連絡を享有する一方では彼等は生命上の危險な瞬間にも避難

場所の安全を得たいとしてゐるのだ。これが全歴史を通ずる猶太問題の今日の姿である。これこそは正に猶太人の歴史の法則と言つてもよいであらう。

猶太人全體として見ればこの二つの狀態を維持して行くことが最も好ましいことかも知れない。世界の大富豪は猶太人國家といふこの試驗に資金を出し、我と我が良心に滿足を與へてゐる、脅威を受けた他のものはこの猶太人國へ逃避する。そして若しこの危險を妊む暗雲が晴れ去つたならば、自己の故鄕を作らんとのこれらの總ての運動は靜になるだらう。テオドール・ヘルッルが特色づけた「民族的に保證された故鄕」といふ槪念は、全く私法や私經濟の範圍から取られたもののやうに聞える。全く故鄕の仲間の團體が作られたやうなものである。あらゆる國家建設の場合に擧がる熾烈な民族的熱情の火や、眞の征服者に充ち〳〵てゐる最も根本的な何物にも屈せざる權力への意志といふやうなものをこのシオニズムは少しも持つてゐないのである。

然しながらこゝにはたゞ二者擇一（Entweder-Oder）だけがある。「第三のことは存在

しないのだ――「Tertium non datur」。つまり、猶太人は自己の國家體系をたとひそれが失敗に終るやうな場合にも建設する意志を實際に所有してゐなければならぬといふことである。さうすれば猶太人はこれがためには、たとひ個人の生命をなげうつても構はぬといふ總ての努力を捧げねばならない。然らずんば、猶太人は彼等がこれまで二千年の間を閲した如き存在を依然として續けねばならない。換言すれば、彼等は全世界に四散した故郷なき民族であり、他人が既に巢を作つて構へてゐるところ到る處に寄食してゐるかの狀態を今後も續けねばならないのだ。斯うなれば勿論彼等はそれから自づと生ずる結果は自己の責任なのだ。

この結果が如何なるものであるかは猶太人の歷史を知るものには明瞭である。否それだけでなく猶太人自らがその結果をよく知つてゐるのだ。

然しながら國際的存在の快適と勢力を獨自の國家性の政治的安全性に結びつけようとすることは、史上未だ何れの民族にも許されなかつたところである。而も自分自身の國家を

作り上げようとの衝動を抱いたゐた總ての民族はその歴史に於てその持物、血の犧牲を拂つて幾多の献身的經路を辿つて來たのである。從つて何故に猶太人の歴史のみが熱情と犧牲なしに濟んでよい筈があらうか？　これこそは、歴史家が今日の世界に於ける猶太問題を觀察した場合に到達する結論なのである。

最後に今一度眺望して見よう。果して猶太問題が解決出來るかどうかは頗る判斷を下し難い。世界の他のどこかで猶太人に指示されてゐる纏まつた植民地といふ形式ならば解決出來ると筆者は信ずる。何れにしても、他の民族の樣式と同樣に自分の存在を續けるには全體としての猶太人の決心と正當な意志とが前提條件でなければならない。つまり、自己の生命を献げて獨自の國家を創立するといふ決心と意志がそれである。だが猶太人がこの道を擇ぶだらうとは疑はざるを得ない。これぞ全猶太民族の歴史を支配する宿命であり呪ひなのだ。

また世界が猶太人にその可能性を與へ、援助するかどうかは、若し猶太人が實際に眞劍であるならば、彼等の勢力を以てすれば見込のないわけではない。だが何れにせよ我々ドイツ人はそれに意を用ふる必要はない。これは猶太人に關する問題であつて、我々自身はこれに何等關係のしようがないからである。何故なれば我々は他人へやるやうな土地を持合せないからだ。ヴェルサイユ條約及びその結果によつて猶太人の事情が今日の如くなつたことは全く猶太人の責任である。

我々自身はたゞ一事を以て謙讓たらんとするものであり、またそれしか出來ない。即ち我々は我がドイツの猶太問題を解決したといふことを冷靜なる良心と誇らしき確實性を以て滿足するものである。

編　者　註

世界猶太人の數は各國に於ける猶太人口數と同樣に種々問題があつて一定しない。これに就いては二つの著作があるが、その研究の重要な部分は兩者一致してゐる。卽ち一はドクトル・フリードリッヒ・ツァンデルの「世界猶太の分布――Die Verbreitung der Juden in der Welt, Belrin-Charlottenburg, Robert Kämmerer Verlag, 1937」であり、他は猶太人ヤコブ・レスチンスキー（プラーグ、一九三四年）の書である。本書に引用した數字はこの兩書に據つたものである。而して其の場合レスチンスキー、ツァンデル兩者の數字が頗る過少の見積りをしてあることとは明瞭である。ツァンデル自身が猶太人總計千六百萬といふ見積りは大體信仰上の猶太人を主としたものであつて、種族上の猶太人々口數は「これより遙かに多きことと疑ふ餘地なし」と强調してゐるのである。何れにしてもとの點に關してはまだ一定した數字がない。

ドクトル・H・オーベルリースが最近ナチス醫師同盟の雜誌「目標と方向」（一九三七年第十卷）に種族上の猶太人をも統計的に總括した論文を發表した。その結果によると、信

仰統計（一九三七年度）に現はれた千七百萬の宗教猶太人は「世界猶太民族の中核部だけ」を示すものであつて、無信仰猶太人、洗禮を受けた猶太人、離婚した猶太人、猶太人にして國籍なきもの、誰にも氣付かれずに忍び込んだ東方猶太人等を含めて數ふれば、全世界各地の種族猶太人は三千八百萬乃至四千萬なりと見積つてゐる。オーベルリース博士の研究を更に深く探究して行くことは、それが世界猶太民族の全貌と地理的分布に關する明白な統計を提供する事情を可能ならしめる限りに於て科學的研究の使命である。この講演出版までにはオーベルリース博士の見積りはまだ發表されなかつた。

モハメッド・サブリ博士

回教・猶太民族・ボルシェヴィズム

回教――ボルシェヴィズム

各種の新聞其の他の發表によつて見るに、ボルシェヴィズムに對する回教國民の態度は屢々誤解されてゐる。從つて、モスコーの共產主義に對する態度を、こゝに鮮明して置かねばならない。さてそれには、先づ第一に、第三インターナショナルが回教諸國の土地をボルシェヴィキ的謬說の擴大の爲めの土地とせんが爲めに、採りつゝある方法をこゝに述べる必要がある。

モスコーの手先が回教諸民族中に宣傳を働きかける場合には、彼等はヨーロッパやアメリカに於て彼等が實に模範的に實施した方法とは全く異つた他の手段を用ひなければならない。周知の如くボルシェヴィズムは、その目的を所謂プロレタリアートの獨裁といふことの中にありとしてゐる。而もその場合先づ第一に工業勞働者大衆を最もその狙ひ所とし

てゐるのである。然しながら、多くの回教國では工業はまだ餘り發達せず、その爲め、これらの諸國には、「萬國の勞働者よ、結合せよ」といふ最も好んで用ひられる標語も最も原始的前提をすら見出し得ない狀態である。然もこれが爲には回教民族の精神に於て更に內的前提が缺けてゐるのである。何故なれば、ドイツ勞働者が、下級人間を指していふ「プロレタリアート」といふ集合概念の中に入れられることに賛成しないのと全く同樣に、最貧困なアラビヤ農夫の誇も、若し人が彼等を人類中權利を失ひたるものの中に數ふるが如きことを敢へてすれば、必ずや怒髮天を衝くであらうからである。從つてこゝにコミンテルンは、先づ彼等の東洋に於ける活動に當つて第一の困難に遭遇するわけである。何故なれば、これらの回教國には、マルクス主義の意味に於ける「プロレタリアート」なるものが存しないからである。

ボルシェヴィキ宣傳を他の手段によつて實施しなければならぬ第二の背景となるものは、回教諸民族が全く文字通り保守的であるといふ點である。こゝでいふ保守的とは政治

る基礎の上に打建てようとする。ボルシェヴィキ思想が恰好の培養地を見出し得ないとの堅實なる基礎は、回教諸民族をして、斯かる恰も世界を幸福ならしめる如き調子によつて誘惑する理論を以て自らを崩壞に導く様なことをしない。然しながら、この基礎の最も強力な支柱となるものは、回教徒の全生命を支配するその宗教である。從つてボルシェヴィキの狂說用の空地を作らんが爲め、人間の内的結合を破壞せんとするモスコーインターナショナルの最苛酷なる武器卽ち無神論宣傳は、東洋に於ては効力を有せざるのみか、自分で投げたものが自分の許へ歸つてその頭を打割るブーメランとも言ふべきである。

たとひ、人がこれを何と考へやうとも、ボルシェヴィズムをその本來の形式で宣傳することとは、東洋では不可能であるばかりでなく、抑もこの民族の個々の層と緊密なる提携をなさんとする方法は、共産インターナショナルの手先が、その他の諸國に於てよく用ふる

所の手段とは根本的に違つたものでなければならない。從つてソ聯には、東洋に對する專門家を全力をあげて養成する三つの施設がある。即ちスターリン大學、東洋諸民族大學（兩者モスコーにある）及びトルケスタンのタシュケントにある稍小規模の學校である。それらの講義目錄を一瞥すれば、大學と稱するには全く冒瀆とも言ふ可き伴の學校で、狼達が必要な羊の毛皮を縫つてゐるのである。こゝでは、語學教授や經濟政治講義の外に無神論運動の中心地モスコーで熱心にコーランが研究され、以て手先達が臨機應變何事にも融通の利くやうに訓練されるのである。教育課目中相當のスペースを占める市街戰戰術がどこに入れられ、又政治的、經濟的或は宗教的專門に分けられてゐるか否かは不明である。何れにしてもこれらの學校からは實に多方面の素養を受けた人物が養成されて來るのである。これらの「學生」中にあつて、特に素晴らしい融通性をもつてゐるのは多數のアメリカのネグロである。彼等の大部分は、ニューヨークのハーレム區出身であり、アフリカ黑人向けにこの學校から出されて行く。彼等が卒業試驗を終へアフリカ西海岸へ送られ

ると、彼等は敬虔なるキリスト教信者として活動するのであるが、これが東海岸に送られるとカモフラージュして回教徒となつて現はれるといふ調子である。

然しながら、これらはモスコーの手先が、身を包む色々の方法中の極く一例に過ぎない。既に述べた如く、彼等はその共產主義的知識を直接に傳播しては旨くないので、先づ彼等の活動は、現存の安定せる秩序を攪亂し、或は現在起りつゝある騷擾を彼等の目的の爲めに利用することに向けられる。この目的のために彼等は、宗教的と世俗的とを問はず、凡ゆる種類の組織團體中に忍びこみ、現在行はれてゐる指導的思想を表面援助促進するが如く見せかけつゝ自己の爲め有利な地位を得んとするのである。この思想に屬する最も模範的なものは、アラビヤ民族の民族主義である。同思想は、最近頓に活潑となり、その荒廢せる國土再建の爲めに起立つたパレスタインのアラビア人の鬪爭中に最も顯著に現はれ來つたものである。今もしこゝに、コミンテルンの手先がアラビアで全くアラビアの國粹的な態度を採つてゐると言へば、全くグロテスクに聞えるかも知れない。然しそれは

「マルクス主義と民族植民問題」なる著書の中に次の如く述べたレーニンのプログラムに從つてなされたものに外ならないのである。

「これらの諸國の解放は、赫々たる勝利を得た革命なくしては不可能である。植民諸國の最後的勝利は、ヨーロツパに於けるプロレタリア運動との緊密な結合なくしては不可能である。共産主義者の使命は、帝國主義に對する民族的戰線を樹立し、暴動の經過中に共產黨そのものを作り出すにある。斯かる兩頭の黨は、それが共產黨の活動を妨害せざる時には必要缺く可からざるものであり、又合目的々である。東洋諸民族の爲めの大學の使命は、これら諸國の發展の凡ゆる特殊性を追求し、革命的形成を準備するに在る」。

從つてこゝに、機會があればいち早くマスクをかなぐり捨て、ボルシェヴィズムの目的並にその意圖を遂行せんがため、民族的水路に乘出すといふ僞裝が明瞭に述べられてゐる。

アラビア人の世界に於ける共產主義の最も强力な牙城が、パレスタインであることは疑ひない。何故なれば、數年前からこの國に入つた數十萬のユダヤ移住者は、この大部がモ

スコー信奉者より成つてゐるからである。斯くてパレスタインには多くのシオニスト植民地があるが、それは全く共産主義的原則に從つて統治されてゐるのである。アラビア人にとつては、これらの共産主義者は何等の危險をも意味しないのだ。何故なれば、最良の意志をもつてゐるならば、コーンだとか、レウイとかいふ人間が民族的アラビヤ人として僞裝することは不可能であるからである。それにもかかはらず、勿論こゝにもボルシェヴィキの手先は、アラビヤ民族の民族的問題を、彼等獨自の問題なりと稱せんと試みたのである。

かくてモスコーのユダヤ操師は、彼等の同族にむけたビラをパレスタインにばら播かしめることをすら敢へて恐れなかつた。例へば、パレスタイン共産黨中央委員會のある檄に次のやうに述べてある。

「イギリス植民政策を打破せよ！　バルフオア宣言を打倒せよ！　シオニスト移民を打倒せよ！　植民政策、及びシオニズム反對鬪爭萬歲！」

何れにしてもモスコーの中樞部の働きかけは効を奏することが出來なかつたやらである。何故なれば、イザーク・ライブといふ美しい名前を持つた或る勤務員の署名したビラには、兄弟化が叫ばれてゐるからである。それには次の如き驚くべきことが書いてある。

「ユダヤ人及びアラビア人間の兄弟憎悪に掛り合ふな！　アラビア、ユダヤ勞働者の反ファシスト聯盟萬歳！」

この提携がシォニズムに對する闘爭後に達し得られるか或はその前に達し得られるかについてはイザーク・ライブ氏は何とも言つてゐない。一體これらのビラの貧弱な編者達は骨が折れた。彼等は、インターナショナルな運動を行ふモスコーと同樣アラビア人の民族運動を稱贊しなければならない。然しながら、彼等の破廉恥は、この危險をも敢へて冒して、次の樣にアッサリ片附けてゐるのだ。

「勞働者と農民の國ソヴィエト・ロシアを守れ！　聯合民族統一戰線萬歳！」

民族的思想をもつアラビア人が、何故に彼等とは異種のロシアを守らねばならぬかを了

解するためには、恐らく共産主義者とならねば解るまい。だが何れにしてもアラビア人にはそれは分らない。而して如何なる回教徒にもそれは解るまい。回教民族の自由の爲めの闘爭は、たゞモスコー・インターナショナルの仕事に過ぎないと信ずべからざる主張が提出されることより外回教徒を侮辱するものはない。成程ボルシェヴィキ策動家は斯る機會には、他の世界に於ての場合と同様に火事場泥棒をしようとするが、これらの計畫は何れも回教徒の世界觀が餘りにも緊密なため常に坐折してゐるのである。

然しながら、公の外交的分野に於てはモスコーは珍らしい方法を行つてゐる。即ちそれが爲めには次の一例を擧げる丈けで充分であらう。周知の如く非回教徒は、聖地メッカに足を踏み入れてはならない――イブン・サウード王の禁令に基き――。その結果外國諸列强の代表者はその住居を港市ヂィッダに持つてゐる。ソヴィエト政府の代表者は一九三五年暮までトゥルケスタン生れのナシール・トルヤクロスとか言ふ人物であつた。彼は回教徒であつたから、彼がその住居をメッカ近くに定めたことには何の障害も起らなかつた。

彼はこれによつてサウーヂ・アラビヤの官廳と密接な連繫を結ばうと希望してゐたのである。彼は非常に敬虔なことを以て譽高く、毎日モスクに參詣し、ラマダンの斷食を嚴格に行ひ、又屢々カーバや豫言者の墓を訪れて滯在したりした。要するに、彼は凡ゆる方法を以て、ソ聯は反宗教の國なりとの主張を彼自身の態度によつて反駁せんとしたのである。何故なれば、若しさうでないとするならば、モスコー政府は斯る敬虔な人物を公使に任命しなかつたであらうから。然るに一九三五年末この「敬虔なる回教徒」が實はトゥルケスタンの無神論者組織の議長であることが分つたのである。而も或るボルシェヴィキの雜誌は、彼が諸民族中に於ける反宗教工作に關してはその最初から甚大の援助を與へてゐたことを嘗つて賞讃したこともあつたのである。メッカに於ける彼の活動がいち早く終末を告げた事は、こゝに特に取立てゝ述べるにも及ぶまい。

種々雜多の狀態にあり獨立してゐない回教民族の信頼を得るために、コミンテルンによつて屢々「外國の壓迫からの解放」と「反帝國主義鬪爭」といふ標語が用ひられ、これら

は民族的カモフラージュの中にうまく挿入されてゐるのである。

然らば一體、例へば東トゥルケスタンに於てこれらの「反帝國主義者」を動かしてゐるものは何であるか？　一名新疆とも稱せられ世人に知られてゐるこの國は、三百萬の住民を持つてゐるが、その中九十パーセントは回教徒であり、政治的には支那に屬し、六萬の支那人によつて支配されてゐる。回教徒は幾度かこの支那の抑壓覊絆を脱せんと試み、殊に一九三三年には獨自の政府を樹立することさへ出來たのであつた。從來の幾度もの暴動の場合に於てと同樣に、この度も又支那はボルシェヴィキに援助を乞ふた。赤軍の兵士は共産主義煽動家達程には「外國抑壓からの解放」といふ標語の意味をよく了解してゐなかつた。何故なれば、彼等煽動家は民族的獨立を求めて凡ゆる努力を血醒き暴力によつて打破するのみならず、同國をも又完全にソ聯に從屬せしめるといふ兩方面に意を用ひてゐたからである。東トゥルケスタンは名目上は今日でも依然として支那に屬してはゐるが、この權力は只モスコーの援助によつてのみ維持されてゐるのである。

更に他の回教諸國—アフガニスタン、アルヂェリヤ、イラン、モロッコ、チュニス——に於てもモスコーよりの派遣員が、凡ゆる考へ得らるゝ限りの假面とカモフラージュの下には彼等の次の如き標語を叫び又さゝやいてゐるのである。卽ちインターナショナル・ボルシェヴィズムの手先は「民族解放萬歳」と叫び、帝國主義ソヴィエト國家の手先は「帝國主義打倒」と叫び、無神論運動の手先は「宗教的自由萬歳」と叫んでゐる。然しとこに面白いアラビアの古諺がある。曰く「キャャラバン進むところ犬吠ゆ」と。

然しエヂプトに於るボルシェヴィキの活動に就いては幸に何も述べられない。何故なれば、エヂプトはソ聯を承認せず、その結果ソ聯と何等の外交的關係を持たぬ國であるからである。國家の法律によれば、共產主義的意味に於て外國で活動してゐることが立證される凡てのエヂプト人は、その國籍を失ひ、エヂプトへ歸り得ずとある。加之、エヂプト人のソ聯への旅行は法律的に禁止されてゐるのである。これらの規定がフェトワ（裁決）卽ちボルシェヴィキ革命勃發直後有名なアリム・シャイフ・ラシードによつて發布された宗

教上の命令の影響たることは言ふ迄もない。少し前ベルリン駐在エヂプト公使ナハート・パシャ教授が、或るドイツ新聞にソヴィエト國に對する彼の政府の態度を述べ、それと共に凡てのエヂプト人に對して心から叫びかけた。この意見に對する指示は官廳側から——事エヂプトに關する限り——滿足されたものであつた。

以下ソヴィエト勢力下にある回教諸民族の狀勢に關し概觀して見よう。一九一七年十二月七日ロシヤの人民委員會議は、次の如き「ロシヤ及び東洋の回教徒に對する檄」を公布した。

「我等の同志、兄弟、ロシヤの回教徒、ヴオルガ沿岸及びクリミヤ、キルギスのタタール人、シベリヤ、トウルケスタン及びトルコのサルト人、トランス・カウカサスのタタール人、カウカスの住民——モスクと神殿を破壞され、信仰と風習をロシアの暴君に蹂躙された凡ての人を見よ！

今日限り諸君の信仰、風習、民族的文化的諸施設は解放され、冒し得ざるものとなつ

たことを宣言する。諸君の民族的生活を自由に何人にも妨げられずに定めよ！　諸君はその權利を持つてゐるのだ。更に諸君の權利たるや、ロシアの凡ゆる諸民族同樣革命の全ての力とその組織によつて援助されてゐることを銘記せよ！」

ロシヤ領土内の二千萬の回教徒には、斯くの如く、ボルシェヴィキによつて最も廣範な約束が與へられたにも拘はらず、回教徒は自由に信仰し得ず、從つて回教圏はツアー帝國の瓦解を利用して彼等の民族的獨立を得んと努めた。表面上如何にも民族的宗教的自由を約束するモスコーの擁護者達が、如何に暴虐な血腥き手段を以て特にこれらの獨立運動を彈壓したかを述べることは、恐らく予のテーマの圈外に置かるべきではあらう。が然しアゼルバイジャン、イデル・ウラル、クリミヤ半島、北カウカス、西トゥルケスタンの回教徒が、疑惑を抱いてゐたことが正しかつたことは、その後の發展がこれを明に證明してゐるのである。

回教徒が餘りに深い宗教性を持つてゐることは、ボルシェヴィキをすら可成り恐怖せし

めたのであり、先づ彼等は、精神的施設に手をかけるといふ様なことを敢へてせず、主として激烈な宣傳によつて信者の精神に毒を吹きかけんとした。然しモスコー當局が、マルクス主義狂説も回教徒の堅固な信仰の前には粉碎されることを見た時、モスコーは遂に暴力手段をとつた。旣に一九三三年には全モスク及びメドレッセの約八割が閉鎖された。然し斯る神殿の閉鎖といふ丈けで滿足せず、それらを劇場、映畫館、舞踏場となすことによつて回教徒を侮辱したのである。回教文化の中心なるブハラに於ては、三百六十の令名あるモスクの中、旣に一九二八年三百以上も閉鎖された。多くの藝術的に叉歷史的にその價値評價が出來る程立派なモスクも多數あつたのであるが、これらの中の大多數は、その石材が橋梁建築其他に必要であるからとの理由の下に破壞されたのである。ソヴィエトが彼等の回教徒臣下を如何なる僞瞞を以て操るかを最もよく說明する一例がある。それは一九一七年十二月、ソヴィエトの武力がまだ安定しなかつた折、彼等は回教徒に對して回教への親誼を證明せんとして、カリフ・オスマンの遺物と稱せられる古い貴重なコーランをペ

テルスブルグから、世界に名だたるサマルカンドの回教徒高等學校ウルゥ・ベグに移さうとしたのである。今日ではこのメドレッセは無神論博物館となつてゐる。宗教的活動は暴力によつて妨害され、學童達は暴力で學校へ追ひやられるが、それは祝祭日の神聖を妨害する爲めである。レーニンの命日を祝日として祭ることが大事な場合には、回教は暴力によつて公道に膝まづかしめられるのである。數千のイマーム（導師）がシベリヤへ放逐され、無數の死刑の宣告が回教徒に下された。その犯罪は彼等が無神的たるを欲せずといふ丈けの理由だつたのである。

然しながら、ソヴィエト支配下に生存する回教徒の信仰を動かすには、如何なる苛酷な彈壓も、暴虐なテロを以てしても充分でなかつた。アゼルバイジャンからは、農民暴動、バクー石油産地の回教勞働者の叛亂、赤色權力所有者の凡ゆる處置に對抗する消極的な反抗等々の報道が絶えず傳はつて來た。イディル・ウラルでは總てのモスクが閉鎖された。それでもこれによつて信者の集團的祈禱を根絶せしめることは出來なかつた。而も暴力によつ

て共産黨組織へ無理强ひに押し込まれた若い者さへも回教に固執してゐた。これらの表面上無神主義の共産黨員の大部分が、實はラマダンの斷食を忠實に而も信心を以て行つてゐることをソヴィエトが知つた時には實に驚愕した。ウズヴェクスタン黨記は、彼の受持區域の凡ての村の共産黨細胞が、唯一の人物、即ちモスコーから直接任命された書記だけであつたことに就て苦情を述べてゐる。一七年には全トゥルケスタンを通じて自國でモスコーの利害を守らうとする回教徒は一人もなかつた。從つて、黨のより上位の椅子は常にロシヤ人かユダヤ人かアルメニヤ人を以てこれに充てねばならなかつた。

　ボルシェヴィキ達は彼等の最嚴格な慘酷な處置にも拘らず、マルクス主義の原理は回教徒の世界觀があまりに一致團結してゐるために失敗したことを表面非常に遺憾なりとし、又ソ聯の回教徒とその他の回教徒圏のそれとの間に些かの連繋も生ぜざる樣全力を以てこれを防止せんとしたかに見えた。何故なれば、ボルシェヴィキ官廳から嚴重なる禁令が發せられ、それによれば如何なる外人と雖も回教圏に入足するを禁ずとなつてゐたからで

ある。然しながら、ソ聯は、彼等が回教徒に對しては如何に多大の好意を寄せ、又回教徒を凡ゆる場合に援助促進しつゝあるかを何時でも證明出來るやうにしてゐる。卽ち凡ゆる旅行者はインツーリストの役員の案内で、ボルシェヴィキの本山たるモスコーの眞中には二つの回教寺院があつて、その塔からムアッジィン（祈禱先唱者）は信者に呼びかけることが出來ることを確信せしめられるが、之に反して共產主義を容れざるトゥルケスタンではモスクは無神論博物館に變へられたのである。

然らば一體ボルシェヴィズムが回教國を說くに或は天使の口を以てし或はテロを以て改宗を强制せんとし、又は民族的獨立、宗教的自由、生活水準の昂揚、巨大なるソヴィエト軍備による政治的保護を約束したにも拘らず、何故にボルシェヴィズムはソ聯領土内外の回教諸國に於て、これと言つて取上ぐるに足るべき成果を得なかつたのであらうか？この否定的結果は、單に回教徒が共產黨宣言の虛僞性を次第に洞察したといふ點に存せず、寧ろ、ボルシェヴィズムの所謂イデーなるものが回教徒の世界觀と融合し得ざるものであ

るといふ點に存する。

ユダヤ人の心狀はボルシェヴィズムを創作した。そしてボルシェヴィズムはユダヤ人心狀の支柱である。ユダヤ人によつて作られ、ユダヤ人によつて指導されてゐる――この故にボルシェヴィズムは回教徒にとつては天性の仇敵である。

ユダヤ民族に對するドイツ民族の處置に對しては、總ての回教民族は他の何れの世界の民族よりも多大の認識と同意を寄せたのであつた。何故なれば、旣に豫言者の日以來凡ゆる回教徒はユダヤ人の最大の敵であり、この敵性は凡ゆる回教徒の血の主に續いて存してゐるからである。然し回教ユダヤ人は純粹のユダヤ的樣式では回教徒に對して公ぴらに鬪爭せず、ドイツに於ても、又充分知られてゐる所の彼等のやり口を利用し、回教徒をその內部から破壞せんと試みたのである。かくて例へば、數百年の中に多數のユダヤ人が外面的に回教徒を裝ひ、以て回教徒と接觸し又彼の有害な活動を働き及ぼさうとしたのである。これが結果、彼等の或るものは、「敬虔なる學術」といふ美名の下に匿れて、コーランに

關する註釋書を書き、これによつてコーランの眞の精神を誤らしめんとするまでに至つた。この種の註釋中最も悪評高きものはユダヤ人カーブ・エル・アハバールのそれである。而して、コーランにユダヤ特性とユダヤ陰謀が明瞭に暴露されてゐるよりも、ユダヤ人にとつては僞瞞、揑造等への必然性は大であつた。これら凡てのユダヤ人の特性は、コーランに實に適切に述べられ、最後に次の如く總括されてゐる。

「信仰あるものに對する最後の敵は、人類中ユダヤ人と偶像崇拜者を保護するものなることを汝は確に知るならむ」（第五章八十五句）

而してコーランは回教徒の見解によれば、神によつて啓示されたものであり、從つてこれを感知することは神の意志である。

そして若しボルシェヴィキの手先がユダヤの祝福使命を持つて來る時は、凡ゆる回教徒は、マホメットの次の言葉を想起する。即ち、

「ユダヤ人が回教徒を破滅せしめんとする秘密の意圖を有せずして回教國とユダヤ人が同

席するを見ることは不可能である」

然しながら、これによつてユダヤ人に對するこの態度は單なる理論でないことが明瞭となる。こゝには全く自由を有し、獨立し、從つて、其の獨自の事件を自ら整理して行くとの出來る純粹の回敎國を二つ例として擧げて置く。そしてそれらの國に於てユダヤ人に對し如何なる地位が指定されてゐるかを示し度い。

先づアフガニスタンに於ては、ユダヤ人は北部國境の三地にのみその住居を定め得ることになつてゐる。如何なるユダヤ人も公職を帶び得ず、議會に選擧され得ず、新聞を發行し得ず、軍人たり得ずといふのはこの國の不文律である。

イエーメンの首都サナでは六千のユダヤ人は成程商業は營み得るが、市内には住み得ず、郊外のゲットー内に住まねばならない。彼等は乘用動物としては只驢馬丈けを使用し得、馬、駱駝は使用出來ないことになつてゐる。また武器の携帶は許されず、軍務に服することも出來ない。戰時にはイエーメン軍によつて保護を受けるといふ無條件保證の代償

として、彼等は特殊の支拂をしなければならない。それと共に彼等が戰爭中過つて殺されぬ樣に、彼等は特殊の耳環を目印としてつけて置かねばならない。又サナの或るアラビア人が或るドイツ人研究家に語つた所によると、彼等ユダヤ人が、その血統を忘れず、豫言者の忍耐を絶えず忘れざらむとせば、彼等は貢物を納めなければならないとのことである。更にまた、サナのユダヤ人にはパレスタインのシオニズム運動と何等かの連繋を保つことは一切禁止されてゐるのである。

從つてボルシェヴィズムなるものは、回教諸民族の場合では完全に對立する所の全くユダヤ的な問題であるといふ事實は旣にそれ自體贅言を要しない所である。然しながら、非回教世界に回教徒とボルシェヴィキの人世觀との根本的相違を明示し、これによつて兩者が全體的に對立してゐることを證明することが必要となつてくる。

こゝでは先づ第一に、ボルシェヴィキ教義とは絶對的に對立する所の私有財産の回教徒による無條件の承認及びその保護が特に取上げられねばならない。私有物の法的地位は回

教徒の法律では、特別法中に入れてある。豫言者は、その最後の巡禮に於て信徒に對して次の如く言つてゐる。

「汝等の生命と汝等の所有物は聖なるものであり、それは凡ゆる回教徒にとつては冒されてはならないものである。或る人の持つものは法律的にも他人のものとはなり得ない。たとひそれが好意的に他人に贈られたものであつても」

嘗つて、ボルシェヴィキがトゥルケスタンに共産主義を實際植えつけんとした時、恐らく同地の貧農達はこの事を想起したことであらう。回教徒は大地主の土地は沒收され、貧農に分配されることになつてゐた。そしてこれによつて貧農は未聞の財産を所有するに至るといふのであつた。然るに彼等は回教の原則を忠實に守り、それを法的所有者に返還したのであるが、この芝居は實に屢々繰り返され遂に貧農を投獄する結果となつた。

ボルシェヴィズムは階級憎惡を、全人類平等化といふ標語で說いてゐる。然しながら、それは只表面上の平等だけを考へてゐたのである。卽ち各種の勞働に對しては平等の賃金

を拂ふといふ、要するに凡ゆる人間に對して平等の外的生活條件を作り出すといふ位の程であつたのである。これに反して、回教徒は只神と法律の前には精神的に平等であると考へるのであるが、一方外的運命は各人に定められた人生軌道に沿つて走つてゐるのだ。世界の財寶はコーランの次の言葉の通り神によつて各種に分けられてゐる。

「神が汝等の中の或人及び他の人に與へて賞したものを懇望する勿れ。」

從つて富裕と赤貧とは本質的なことでなく、攝理であり、運命なりとするのである。かくて宗教的義務を果すところの施與者に乞者は感謝せず、施與者の手を導く神に感謝するのである。回教徒に於ける經濟的不均衡は、富者に義務が加へられ、貧者に權利が與へられることによつて自然の均衡が保たれてゐるのである。卽ちザカート(喜捨)である。それは回教徒では單に望ましき行動でなく、各回教徒の五つの根本義務の一つなのである。收入及び財產よりのこの租稅は、殘りなく困窮者に惠まれるのであるが、その場合、受ける者は卑屈な感を起すことはない。何故ならば、旣に述べた樣に、それは與へるものにとつ

ては宗教的義務であり、これを受ける者にとつては宗教的權利であるからである。然しながら喜捨は、同時に又、回教徒が、物質材が不平等に人間に分配されてゐるのは神の意欲せる秩序なりと考へてゐる證據でもある。これは凡ゆる人間の物質的平等地位を唱へるマルクス主義理想とは嚴に對立する思想である。從つて回教徒に於ては赤貧といふことは、單に運命の攝理に過ぎないものであつて、或る人間の價値評價に當つてはそれらは何等の役をなさぬものであり、その故に回教徒は階級憎惡といふものを全くその人の知識、賢明、道徳的品位に應じて測定されるのであり、人間の目的は、貧者にも富者にも同樣に許されてあるのだ。

平等化の思想は、ボルシェヴイキ權力所有者として全く盲目たらしめ、果ては男女に同等に人生の使命を分けんとして男女間の自然的區別をも揚棄せんとせしめたのである。その爲めボルシェヴイズムは國家の細胞としての家庭をも認めず單に無形式の雜然たる大衆のみを認めたのである。即ちこの大衆は自己の特性及び子孫の維持に對しては彼等の大衆と

いふ性格の爲めには何等の責任をも持たない所の大衆である。之に反し回教諸民族に於ては家庭は大國の場合に於けると同様最小の國に於ても又その基礎を成してゐる。ボルシェヴィズムが婦人をも男子同樣勞働中に引入れ、これによつて彼等の力を機械に浪費するに反して、回教徒は婦人の活動分野を妻女、母としての彼女達の活動分野丈けに制限してゐる。一方男子には、家族の維持を保證する役が課せられるが、その場合家族といふことは最も廣範な意味で解されてゐる。然しながら、又養育者の死後家族が何等の生計の道なき場合をも考慮されてある。何故なれば、回教徒の律法によれば家族財產は如何なる事情にようらうとも法律的承繼を保證されてゐるからである。

回教徒はその家族に對してと同樣にその國家に對しても責任を自覺してゐる。豫言者マホメットは嘗つて次の樣に言つた。

「國民に有益なものは國民の殊寶である。」

從つて回教國の歷史には、富者たると貧者たるとを問はず凡ゆる信徒は、若し彼がその

國民に役立つ時には最高の職に達し得ることも出來るといふことが分るのである。而もそれは獨自の特性と個性を以て彼の同朋に盡すのであつて、ボルシェヴィズムの生産物たる無差別の故郷なき大衆のそれではないのである。

こゝには回教とボルシェヴィズムよりもつと大なる對立は恐らく他にはなからうといふ二、三の注目すべき例を――他にも例はあらうが――擧げて見よう。若しモスコーの無知な操師が、ボルシェヴィズムは回教に最も適當し、否或種の原回教(ウルイスラム)なりとの主張を說へんとするが如き場合には、回教徒の激昂が愈々嵩ずることは自明の理である。而してフランスの共産黨員であり、後に逮捕されたジャン・バルテル（Jean Barthel）は次の如き極端な意見をすら述べてゐる。

「若し今日マホメットが生きてゐたならば彼は共産主義者であつたらう」と。

斯る標語によつては、元來ボルシェヴィズムが何を意味するかを知らない極く少數のお人良ししか獲得出來ぬ。然しながら回教には斯る無智な人間でも常に彼等の宗教を遵奉し

て居り、その故に、若し彼等に何か不明のことでも起つた場合には、彼等のイマームに問ふといふボルシェヴイキ誘惑者にとつては甚だ面白からざる習慣をもつてゐるのである。然しながらイマームは、如何に最遠隔の地に於てもコーランの言に從ひ以てボルシェヴィキの空想を破つてゐるのである。

最後に回教とボルシェヴィズムの最重要な根本原則を對比して置から。回教は神によつて啓示されたものである。ボルシェヴィズムは人間から出たもの、もつと適切に言へばユダヤ人から出たものである。回教は私有財産を認め又これを保護する。ボルシェヴィズムはそれを破壞する。回教は物質的差別を自然的世界秩序と觀じてゐる。ボルシェヴィズムは階級憎惡を說く。回教は貧者に對する救助を要求する。ボルシェヴィズムはすべてのもの丶赤貧化を要求する。回教は家族を保護する。ボルシェヴィズムはそれを破壞する。回教は自覺せる國民を教育する。ボルシェヴィズムは意志なき群衆のみを認める。回教は宗教であり宗教心あるものである。ボルシェヴィズムは無神論支持者である。

回教徒が彼等の宗教と深い連繋をなしてゐることは、ボルシェヴィズムが回教諸國に堅固なる基礎を遂に把み得ざることに對する最良の武器である。而して若しソ聯に於て奴隷化され、毎日赤色テロに曝されてゐる回教を、ボルシェヴィキ達が今日迄暴力或は説によつてもモスコーの爲めに獲得出來なかつたとすれば、單にボルシェヴィキの標語だけを呼びかけられ、然も何等の脅威を受けない回教徒の獲得が尙更困難であつたことは理の當然であらう。

四億の回教徒は日に五度その顏をメッカへ向け、四億の彼等は毎日神によつて啓示されたコーランを讀んでゐる。而して又彼等がその信仰に從つて自己に忠實である限り、如何なる狡猾なるプロパガンダも回教徒の世界觀といふ機構には破口を穿つことは出來ないのだ。これこそ單に回教諸民族にとつての祝福であるのみならず、又以て全人類にとつて祝福なのである。

回教とユダヤ民族

――一九三七年世界回教圏に對する大ムフティの檄――

ユダヤ人は彼等の歴史の當初以來常に壓迫された國民であつたが、それには確かな理由がなければならない筈である。すでに埃及諸王(ファラオン)によつてユダヤ人に對する徹底的な彈壓手段が採られねばならなかつた。何故なれば、ユダヤ人はエヂプト國民を搾取し、暴利と他の罪惡によつて一般道德を破壞せしめたからである。そして、遂にユダヤ人の外國追放となり、ユダヤ人はモーゼ指揮の下に紅海を渡つて逃亡するより他はなかつた。有名なアラビヤ人神學者クバリが述べてゐる如く、モーゼがシナイ山から歸つて來た時、ユダヤ人はモーゼを殺すつもりであつた。しかしながらこの犯罪と神よりの背叛に對する罰として

而は彼等を四十日間沙漠に彷はしめたのである。この淨化によつて、この期間に生れた新しい世代は父祖の罪業を振捨て、神の道に立還へる能力を得た。この新しいチェネレーションはメッカ、メディナ、シリア、イラーク等所謂牛乳と蜂密の流れる諸國に擴がつた。しかしながら、これらの世代はその祖先より遙かに惡かつた。卽ちアラビアの諺に「一匹の犬が子供を持つてゐたが、子供はその親より畜生だつた」といふのがあるがこの諺の通りだ。

シリア、パレスタインへ來た一部のユダヤ人は、今やローマの支配下にあつた。ローマ人は間もなくユダヤ人がこの國を脅す所の危險を知り、ユダヤ人に對するる嚴格な手段をとつた。加ふるに、この頃には重病なるペストが流行したが、これは一般の見解によればユダヤ人によつて運び込まれたものであつた。醫者がユダヤ人は病氣の中心地なりと宣言した時は、――これは正しかつたのであるが、――更にまた國民は激昂し、遂に多數のユダヤ人が叩擲されたりしたのであつた。この事件はユダヤ人が今日まで「ミクローベン」

の徹底(黴菌)とせられてゐる所以である。從つてアラビヤ人は、ドイツのユダヤ人が同樣の徹底的彈壓を受け、疥癬犬の如く叩き出されるのに對しては理解をもつてゐるのである。何れにしても不幸に見舞はれたのは、アラビア人自身であつた。何故なればドイツからの大部分のユダヤ人がパレスタインへ來たからである。こゝにはユダヤ賤民が凡ゆる諸國から集つてアラビア人の國土を奪ひ去つたのである。彼等は貧乏者中の富者から或は良心なき土地所有者から土地を買ひ集め、貧しい寡婦の口から一切のパンをも奪ひ、子供の乳を奪つて懷を肥した。もしアラビヤ人がユダヤ移民に對して反抗する場合、彼等は血醒き殺人も敢へて恐れず、多くの家庭から教育者を奪ひ、これを不幸に陷れた。「神はこれらの犯罪の爲めに彼等を罰するであらう!」。

アラビア人のこの事實は決して新しいものではない。たゞ時と共にその舞臺が次第に變つて來たといふだけのことである。ユダヤ人はマホメット、回教徒更に自己の民族を促進し、ユダヤ人の貪慾と腐敗に對して戰はんとする凡ゆる人を嫌惡する。ユダヤ人と回教徒

の間の闘爭は、マホメットがメッカからメディナへ逃亡し、こゝで回教發展の基礎を作つた時始つた。當時ユダヤ人は大商業家であり、マホメットの勢力が精神的分野に於て、更にまた商業的分野に於ても、彼等にとつて危險なものとなるであらうことを見てとつたのである。從つて彼等は回教徒に對して深い憎惡の念を抱き、この憎惡は回教の力が益々強固增大するにつれて激化したのである。彼等はマホメットと結んだ條約を破棄した。コーランが彼等の秘密の精神的活動と彼等の不德義、更に良心なきことを曝露し、これを公にした時、最高頂に達した。しかも當時から既にユダヤの方法は今日のそれとほゞ同樣の遣り口であつた。彼等の武器は絶えず誹謗することであり、マホメットをその歸依者の眼前で貶さんとした。彼等はマホメットは山師であり、妖術師であり、噓つきであると述べた。そしてこれでもまだ目的を達しなかつたので、マホメットの妻アイーシァが姦通してゐるとの噂を擴め、もつてマホメットの名譽を中傷しようとした。この噂と主張が擴まれば、回教信者間に疑惑の念を植えつけ得ると彼等は考へたのである。

しかしてこれら凡ても何等効を奏しなかつたので、ユダヤ人は回教の教義を不信用ならしめようとした。二、三のユダヤ人はこの目的のために回教に改宗するが、しかし彼等は改宗の翌日再びユダヤ教を認容するのである。そこで若しこの突然の思考變化はどうしたものかと不審がられる場合には、ユダヤ人は誠意を以て回教に入らうとしたのであるが、回教の凡ては詐なることを確信しなければならなかつたからであると狡猾なることをいふのである。これにつきコーランにいふ。

「經典の民の幾多のものは、汝等が信ぜし後にも汝等をしてそれを再び不信ならしめ得んと希望する。然るに彼等に眞理が明瞭となれば、彼等の精神の嫉妬がそれを希望する」（第二章、一〇五句）

ユダヤ人は從來とつて來た樣な方法では到底目的を達し得ずと判つたので新しい手段を求め、かくしてマホメットに無意味な不可能な問題を提起し始めた。即ち彼等はこれによつて、マホメットが知識と賢明さの點において貧弱であることを他の人に示さうとしたの

である。しかしながら、前にも述べた如くこの方法をもつてしても彼等は何等効を奏しなかつた。そこで彼等は、回教が回教徒の胸中深くしつかりこびりついてゐるといふことを確信し始め、從つて回教徒を滅亡せしめようと努力した。ユダヤ人は二、三の非回教徒で、アラビア系の者に金を與へ、これによつて彼等をしてマホメットに反抗せしめんとの卑怯な犯罪をなし始めた。しかしながら當時の全能の神はさうさせなかつた。卽ちマホメットは鐵拳をもつて謀反人共を打破り町を占領した。ユダヤ人はこの敗北を忍び得ず、いかにもしてマホメットを破壞せしめようと決心し、この目的のために殺人者を買收した。

メディナにおいてはユダヤ人はベニ・ナディール區に住んでゐたが、マホメットは彼がメディナへ歸つた後ユダヤ人と協定を結んだ。ある日彼はユダヤ人と語り合ひ彼等を回教へ改宗させるために僅か十人許りの從者をつれてこの區を訪れた。マホメットはユダヤ人に改教の根本原則を提示し、ユダヤ人はこれに對して非常に興味と關心をよせたのであつた。そしてマホメットが一部のユダヤ人と打解けて話し合つてゐる最中に、他の一部のユ

ダヤ人は彼の生命を狙ふ準備をしてゐた。彼等はある男を說き伏せ、マホメットの頭の上に重い岩石を落すやうにと企んだ。マホメットが若し神託を受けなかつたならば、この陰謀のために生命を失つたことであらう。即ち彼にはこの場所を去れとの心の中の聲が聞えたので、その爲、陰謀ユダヤ人達はその計畫を遂行出來なかつた。マホメットはその信者をユダヤ人の許へ派し、ユダヤ人はこの町を十日以內に立去るべきことをいひ渡した。即ち彼等がマホメットの生命を狙つたことは彼との間に締結した協定を破つたものである。十日過ぎても尙町內に止まつてゐるものは死刑に處すると述べしめたのである。しかしながら表面上回敎を奉じながら依然としてユダヤ人であつた所の一部のユダヤ人は、他のユダヤ人にも說いてこの町を去らぬ樣にしたのである。從つて十日の期間が過ぎた時には、マホメットはユダヤ人を武力をもつて町から驅逐せざるを得なかつた。そのユダヤ人の一部はハイバーに、他の一部はシリアに逃亡した。このことはコーランに次の如く述べられてある。

「經典の民を信じない者を最初の追放の彼等の居住地から驅逐したのは彼である。汝等は、彼等が他國へ流浪しようとは考へなかつた。そして彼等自らはその居城を神の前に保護すると考へた。しかし神は彼等の考へてゐない所から來た。そして彼等の心の中に彼等が自己の家を自分の手で破壞し信者の手で破壞したとの恐怖を投げつけた。汝等目を持つものこの例を見よ！」（第五十九章第二句）

ハイバーへ逃亡したユダヤ人は、未だ敗北したと言はず、マホメットに復讐せんと決心した。彼等はハイバー更にタイマ、ワディル・エル・クーラのユダヤ人に呼びかけ、これらと陰謀を企てた。又多額の金をもつて非回教アラブ系のものをしてメディナ攻撃を計畫。マホメットがこの計畫を知つた時、彼は直ちにその部下に武裝せしめ、革命計畫の中心地たるハイバーに向つて前進した。回教徒はハイバーを征服し、ユダヤ人の大部を追放した。一方マホメットは殘つたユダヤ人と條約を締結し、これによつて平和を確證した。この徹底的打擊後始て回教國は平和に發展し得た。しかし乍ら、ユダヤ人の性格をも

つてすれば、ユダヤ人は條約を締結したにもかゝはらず彼等の秘密の計畫を放棄せず、マホメットを破壞せしめんとの凡ゆる手段を試みたことは決して不思議ではない。彼等はマホメットを食事に招待したが、この宴會は別に疑惑を持たれずに開かれた。こゝに、彼に美味しく料理された燒小羊が出された。これはサラム・イブン・マシュケムの妻ユダヤ人ツァイナブが差出したものである。條約や現在の善き親善狀態が話題に上り、マホメットは何等かの裏切が行はれ樣などとは思ひもよらなかつた。マホメットとその忠實な信者なるベシォル・イブン・アル・バラーはそれぞれ小羊の一片をとつた。しかしマホメットはそれを嚥下しなかつた。何故といふに彼はどうも副味がおかしいと思つたからである。そして言つた「骨の具合によるとこの小羊には毒が入つてゐる」。マホメットはユダヤ婦人ツァイブナを呼んで、本當にその肉には毒が入つてゐるか否かを訊ねた。

「貴下は私がユダヤ人の間では非常に尊敬される地位にあることを知つてゐる。私は私がこの小羊に毒を入れたことを白狀する。しかしその場合貴下がもう王であつたならば一

人の國王を殺すのだと考へた。しかしもし貴下が本當の豫言者ならば貴下は小羊に毒が盛られてあることを自分で知つてゐる筈だ」と。

マホメットの從者は毒のために死んだ。しかもマホメットが一寸舌の上に乘せた少しの毒は次第にその効を現はし、彼の死がこの毒の結果であると述べてゐる歴史家が多數ある位である。彼等はその場合、アブー・フライラによつて傳へれたハディースに關係ありとし、マホメットもその死の直前次の樣に言つてゐる。即ち「ハイバーの食事は、予の死ぬ迄益々その効を現はした」と。

回教徒は絶えず、ハイバーの食事を思出さねばならない。ユダヤ人はかくの如くマホメットを裏切ることが出來たと同樣彼等は今日も回教徒を裏切ることが出來るだらう。

今やユダヤ人はマホメットの人格が凡ゆる攻撃に對して保護されてあることを確信したので、回教の力を破る爲めに各種族間に抗爭の種を播からと決心した。マホメットがメディナに歸つた時、彼は百二十年來互に抗爭を續けてゐたカウス及びハスラシュ兩族を和解

せしめ、それによつて回教の地位を異常に强固ならしめることが出來たのであつた。この相對立してゐた兩種族は、回教といふ旗印の下に眞の兄弟となり、平和は町に漂つた。これはユダヤ人が回教徒を覆す爲めの狙ひ所でもあつた。卽ち復讐心に燃えたユダヤ老人シャス・イブン・カイスなるものが或日その友人と共に、この兩種族の會合のある所を通りかゝつた。彼は今迄あれ程幾度も互に抗爭を續けた兩種類族がかくも親密に平和的になり得るとは考へられなかつた。そこで惡魔的な計畫を立てた。卽ち、過去の戰爭文學の識者たるその友人をそこへやつて、この會合で昔の憎惡歌を一席語る樣に依賴した。すばらしい雄辯家たるこのユダヤ人はその席上にあらはれ、この兩種族間の昔の軍歌を朗讀し始めた。それによつて彼は兩種族中の一人づゝをして昔の憎惡の念を惹起せしめることに成功した。兩者はつかみ合を始め、同族に對して武器を取るやうにと絕叫した。しかしながら、この騷擾の報知を聞いてマホメットが直ちにその場へ驅けつけなかつたならば取返しのつかぬ大不幸が起つたことであらう。マホメットは次の樣に叫んだ。

「おゝ神よ、予がまだ汝等の中に生きつゝある時に再び昔の時代が來てもいゝのであらうか？　汝等回教徒に宗教を與へて以來古い種族爭闘は消滅し、汝等は心からの友となつた筈である。汝等は今や又不信に陷らんとするのか？」と。

今や兩種族は、ユダヤ人によつて不和が彼等の間に播かれたことを知り、武器を投げ捨て、神に祈り、謝罪を乞ひ、互に相抱擁し、新しい友好關係を結んだのであつた。

これに關してコーランはユダヤ人シヤス・イブン・カイスに就て次のやうに述べてゐる。

「おゝ經典の民よ、何故に汝は信ずるものを汝自身がその證人たる神の道を進むことより妨げるのか？　されど神は汝等の爲す所を看過せじ」。

そしてカウス及びハズラシュ兩種族については次の如くいふ。

「おゝ汝等信者達よ、汝等がもし聖教を受けた輩の中の一部の者に從ふならば、彼等は汝等が、その信仰に歸依したる後汝等をして再び不信者たらしむるであらう。しかるに神の句が汝等に誦讀され、汝等の中に神の使者あるときに、汝等はいかにして不信者とな

り得るや。「神に固く縋る者は旣に正しき道に導かれてゐるものなり」。（第三章、九十四、九十五、九十六句）

しかしながらユダヤ人が色々と手を盡したにも拘らず、彼等はマホメットの教義歸依者の間に抗爭の種を播き、彼等を再び不信に至らしめることは出來なかつた。元來ユダヤ人は彼等の努力の無益なことを熟知しなければならなかつた筈であるが、彼等は益々その惡魔的計畫を貫徹しようと努めた。しかも彼等はこの度はマホメット自身を奸策によつて陷れんとしたのである。

この兩ユダヤ種族の間には抗爭が續けられ、正しくない一派は會合を行ひ、その指導者をマホメットの許へ遂つたのである。ユダヤ指導者はマホメットに次の如くいつた。「汝は我々が非常に勢力を持つてゐることを知つてゐる。若し汝が他の黨派との吾人の鬪爭を正當なりとするならば、吾人は全ユダヤ人を回敎に改宗せしめることに吾人の力を貸すであらう」と。

マホメットは勿論この無理な要求を拒絶した。これに關してコーランには次の如く述べてある。

「汝は神の啓示するところに從ひて彼等に對する態度を定むべきであり、彼等の希望通りになつてはならない。神が汝に啓示せることより彼等が汝を遠去けしめざる様用心せよ、彼等を遠ざけ、而て神は確に彼等をその罪の爲めに罰するに違なきことを知れ。確に多くの人間は犯罪者である。」

ユダヤ人の煽動工作の他の例をイブン・アッバスが傳へてゐる。マホメットがメッカからメディナに歸つた頃祈禱はエルサレムをむいてなされてゐた。しかしそれは僅か十七ケ月續いた。その後マホメットには將來永久に祈禱方向をメッカへ變へる様にその神の御告げがあつた。そしてこの時以來祈禱は常に顏をメッカへ向けてなされる様になつた。コーランには次の様に述べてある。

「吾人は汝が汝の顏を空に向けてゐるのを見た。今や吾人は汝の氣に入る方に顏を向けた

い。汝の顏を聖なる祈禱地へ向くべし！　又汝の居る所の如何を問はず、汝の顏をこの方向へ向けよ！　見よ、經典を授かりしものも又とは彼等の天主の說ける眞理なることを知り居れり。神は彼等のなす所を看過せず。」

ユダヤ人がコーランのこの句を聽いて餘りに激怒したので、マホメツトはエルサレムに向つて祈る本來の祈禱方向を認めねばならぬと考へた。さうなれば、凡ゆるユダヤ人は回教に歸依するであらうとの約束に從つた。しかしマホメットはこの申込を承諾することによつて、神の命令に反抗するやうなことをしなかつた。これについてコーランに次の如くいつてゐる。

「しかし汝が向く所の祈禱の方向は、吾人は只何人が使徒に從ひ、何人がこれに反ふかを知り得んが爲めに變更する。この轉換は確かに困難なことではあつたが、神に導れたる人にとりては困難でなかつた。しかも神は汝等の信仰を破壞し給はぬであらう。何故なれば見よ、神は人間に對して慈悲深く恩惠厚いからである。」（第二章一三八句）

更にユダヤ人自身が最大の危險を冒してもマホメットを陷れることには敢へて恐れないといふ例を今一つ擧げよう。即ちマホメットがバドルの戰において戰勝を收めた時、彼は最も足の早い自分の馬で使者をメディナに遣り戰勝を報告せしめた。しかしユダヤ人は回敎徒の間に混亂を惹起し、マホメットの敵を鼓舞せんとした。即ち彼等はマホメットは戰に破れたとの虛僞の報道を傳播したのである。それが證據には、マホメットの駱駝には見知らぬものが乘つて町へ歸つたからといふのであつた。

所がこの計畫も失敗したので一部のユダヤ人は、メッカへ働きかけ、マホメットの敵をして彼に反抗するやう煽動した。加ふるに彼等はメッカ人がマホメットと戰ふならば、これに援軍を送る準備ありと宣言した。異敎徒のメッカ人がユダヤ人に、マホメットの宗敎は果して善きか否かを尋ねた時——何故なればユダヤ人は旣にマホメット以前に聖書を授つてゐたからである——ユダヤ人は次の樣に答へたのである。

「汝等は、吾人が學問の人間なることをよく知つてゐる筈である。從つて吾々が汝等に、

汝等の宗教が遙かによきものであるといふ時は吾人の言を信じてよい。」
これについてコーランには次の如く述べられてゐる。
「汝は聖書の一部を感受するものを見ざるや？ 彼等はギープト、タグートを信ずれども、不信者につきては彼等が信仰あるものよりも正しき道を導かれ行くといふ。彼等は神に呪はれたるものなり。神に呪はれたるものには汝は何等の救助者をも見出さず。」
この呪がいかに眞なるかを見やう。即ち、ユダヤ人は世界に分散して故郷を持たず、又何處にも其の援助を見出してゐないのである。
更にコーランには、ユダヤ人に對する回教徒の地位を何等誤解を起し得ざる程度に明瞭に述べた句がある。即ち「汝は確かに信ずるものに對する最高の敵はユダヤ人及び偶像崇拜者であることを見るであらう」（第五章八五句）。
更にマホメットの或る言葉の中にはこの思想がもつと強く述べられてゐる。
「ユダヤ人が回教徒を破滅せしめんとの秘密の意圖を持たずにユダヤ人と一緒に同席して

ゐるのを見ることは不可能である」。

イブン・フライラは、次の如きハディースを傳へてゐる。

「回教徒がユダヤ人を徹底的に打破り、ユダヤ人がその背後に匿れてゐる凡ての一木一草が、回教徒に對して『私の後にユダヤ人が隱れてゐる。彼を殺せ』と告げる裁の日がやがて來るであらう。只エルサレム地方にある鋭い刺の生えてゐる小さい雜草なるファルカードと言ふ木丈けはそれには頓着しないであらう。何故なれば、この木はユダヤの木であるから」（ブハリ・ムスリム、八卷、一八八頁）。

凡ゆる回教徒凡ゆるキリスト教徒にとつて聖なる聖地へユダヤ人がその魔手を伸ばす準備を怠なくやつてゐるといふのが上述の敍述の理由である。果してユダヤ人の最も本質的な要素がいかなるものであるかを凡ての回教界及び回教徒の友の眼前に示さねばならぬ。一般にユダヤ人は文明といふ外觀だけでもつて見られてゐるが、アラビヤ人はユダヤ人が事實に於て如何なるものであるかを最もよく經驗した。そしてもしある人がアラビア人司

様に、即ちコーランや聖書中にユダヤ人が述べられてある如きユダヤ人を知つたならば、現在尙パレスタインのアラビヤ人が曝されてゐる苦惱の程度も了解されるであらう。しかして又ユダヤ人が、若し一度び完全にパレスタインを支配したならば、この苦惱はいかに益々深刻となるであらうかを想像出來るだらう。

全世界の回教徒同朋に對して予はユダヤ人の否定し得ざる歴史と眞の出來事を提示するのだ。コーラン或はハディー中の句は、ユダヤ人が回教徒にとつて最も分の惡い相手であり、又回教徒を破滅することを將來愈々試みる所の敵なることを示してゐる。彼等はたゞ阿諛と奸策のみを知つてゐるものと信じてはならない。

一致團結せよ、回教徒の思想の爲めに鬪爭せよ！　汝等の宗教の存在の爲めに鬪爭せよ！　汝の國がユダヤ人より解放さるゝまでは休止するな！

分割案に與してはならない。何故なれば、パレスタインは數百年來アラビアの國であり將來永遠にアラビア人のものたらねばならないからである。

ミュンヘン大學
ハンス・アルフレート・グルンスキー

哲學への猶太禍

ヘルマン・コヘン

一九〇七年マールブルク大學哲學教授ヘルマン・コヘンは、彼と同じ人種である一ユダヤ教教義學者に宛てた書翰で「貴下もご存じのやうに、私は身心を擧げて全く私達の宗教の內部生命と結ばれてゐます。」と書いた。外ならぬこの人間が當時の獨逸で――遠く獨逸外にすら――哲學の領域で、絕對支配的な權威者だつたのである。いはゆる新カント學派の創始者兼指導者として、彼はカント的思惟の更新者であり發展的繼承者たらんとする要求を掲げた。同時に彼はベルリンのユダヤ神學校の敎師だつた。彼は一八八〇年以來自ら「暴風神」(Baal Teschuwa)と稱したが、當時三十八歲だつた彼はこの年始めてユダヤ敎に歸依する文書を發表したのである。バール・テシューヴとは卽ち贖罪者を意味するのであつて、その價値は正しき者の價値より大きいのである。一八九〇年代の初め以來――

これはユダヤ人哲學史家グットマンの記述による――コヘンは更らに、「幾多の講演と論文に於てユダヤ教の道德的內容を叙べた、しかも、客觀的な冷靜さではなく、信仰告白者の燃えるやうな感激の裡に叙べた。」次いで彼は年齡を重ねると共にいよいよユダヤ的になつたのであるが、これも同じくユダヤ人の文献の證するところである。この過程は大いに進み、遂に彼は一九一〇年には彼の偉大な同人種たるスピノーザに對してすらいたく忿懣を感ずるに到つた。それはスピノーザが「ユダヤ教がスピノーザを捨てる前に、ユダヤ教を捨てた」からだと、彼はある文書に述べてゐる。

自己の人種にかやうに歸依することは、それ自身としては誰も滑稽とも惡いとも思はないであらう。注目すべきことは、無論、その人が當時一般に獨逸哲學の權威ある代表者と認められてゐた、といふ事實である。しかしこれより遙かに注目に値するのは、もつと別の事柄である。コヘンの上記の最後の信仰告白から更らに五年下つてみよう。その時、獨逸國民はあらゆる戰爭中の最も怖るべき戰爭によつて、危急存亡の時期に再會してゐるの

である。この重大な經驗に搖り動かされて、當時の代表的哲學團體たるカント協會の幹部の仕事をしてゐた一獨逸人哲學教授が國民といふ概念に關して一文を草してゐる。同論文でこの教授は種々叙べてゐるが、上記の概念は血統協同體とも幾分關聯してゐる、といふ結論に達してゐる。彼は言ふのだ「外國で、私が一言も言はなくとも、新聞配達人が獨逸新聞を渡してくれる。もしさうでないなら、私はひどく慘めに感じ、大自然から繼子扱ひされてゐるやうに感ずることだらう。」次にこの論文の二箇所でユダヤ教のことも簡單に述べてある。その一つの箇所では、シオニズムとなつて現はれてゐる。國民的な「ユダヤ民族の憧れ」に論及し、その憧れは、「注目だけでなく、尊敬にも」値すると言つてゐる。今一つの箇所では「ユダヤ民族に屬する者に對して我々の祖先が獨逸の土地を與へることを拒んだのは、」土地に對する愛から考へて「心理的にも歷史的にも全く當然である。」と言つてゐる。これと同時にこの同じ獨逸人教授の別の一文が發表されたが、彼はその文書で勇敢に獨逸的思想家カントとユダヤ的思想家コヘンとを區別して論じてゐる。但し彼は、

全然自由主義的な態度から――彼はあるユダヤ人の同僚と親交があつた――コヘンを「近代ユダヤ人の最も尊敬に値する人物の一人」と稱んで、上記の勇敢な行爲の力を急いで弱めようとしてゐる。

しかし彼はあまりやり過ぎたのだつた。但し私ははつきり附言して置きたいのだが、この獨逸人教授の犯した罪は以上で全部數へ盡したのであつて、彼はそれ以前には一度も何の罪も犯したことはないのである。が、それにも拘らず、その罪は罰せられねばならなかつた。憤激、激昂、忿怒の暴風(あらし)がカント協會に荒れ廻つた。同協會はユダヤ人が非常に多くの率を占め、固よりやはりユダヤ人のアルトゥーア・リーベルトがその幹事長をしてゐた。「ヘルマン・コヘンは前代未聞の侮辱を受けた!」――といふ風に、抗議文や脱退聲明書が雨霰と降つた。幹事長リーベルトは、親しく罪人の許に出かけて、正氣に戻らせようとした。この罪人は自分の主宰する雜誌に反駁文を掲載する用意あることを聲明し、その反駁文が客觀的な調子を失はないことをその條件とした。新カント學派のカシーラー(一

九三三年までハンブルク大學哲學教授、現在はオツクスフオード大學の亡命教授）がこの役を引き受けた。ところが彼の反駁文はひどく憎々しげで非客觀的だつたので、この暴風を呼び起した前記の獨逸人教授はその掲載を拒んだ。すると激昂したユダヤ人團は彼に以下の三つの途を示した。卽ちコヘンに對する謝罪文を公表するか、もうずつと以前に受けた手術を理由に一年間の休暇を取るか、默つて退き下つてカント協會の役員の列から姿を消すか、何れかである。「コヘンに對する謝罪文を公表することは」と、自分の演じた不始末の結果に呆然自失したおとなしい教授が言つた、「私には出來ない。私はコヘンの名譽を毀損しようとは夢にも考へてゐなかつたからだ。」手術云々の第二の提案も、事實に違ふといふので拒絕した。かくて彼はカント協會の役員の職をあつさり退いてしまつた。

これが、一九三三年に終熄したあの學問の自由だつたのだ。一人のユダヤ人が名譽を傷づけられたと思ふか思はないかの如何によつて、學問の道理の標準を定めようとずる自由だつたのだ。ここで最も特異な點は、何が侮辱と解釋されるかといふことである。この奇

妙な出來事をはつきりさせて見ようではないか。——今こそ精神の武器を軍隊の武器と合して統一ある力と爲さねばならぬ國家非常の時に當つて、一ユダヤ人を「ユダヤ人の尊敬に値する代表者」と評することが獨逸人哲學教授に許されなかつたのだ。而もこのユダヤ人は數十年來於慾ユダヤ教に對し燃ゆるやうな信仰告白をしてゐたのである。この現象は何を意味するのか。我々の受ける感じから言へば、自由主義的獨逸人教授がユダヤ人の同僚を侮辱しようと思はなかつたことは無論のこと、反對に、彼はその同僚に尊敬と畏敬の念を以て接した。しかしかやうな尊敬も、もしその尊敬に——これが幽靈の正體なんだが——カントも結局ユダヤ的思想家である、言はば小コヘンである、といふ認容が同時に含まれてゐないなら、何の役にも立たないのだ。

「人間は」——私はまたユダヤ人グットマンの言を故意に用ひよう——コヘンの倫理學によれば「自然的及び社會的存在の偶然の中にある個體ではない。」寧ろ人間の概念に適するものは人間總體の思想である。「人間なる理念」は「人類といふ協同體の中で實現される。」

のである。「道徳といふ點を考慮すれば、」とコヘンはその純粋意志の倫理學で言つてゐる、「人間の道徳的力に相違があるといふことは考へられない。超人といふ思想は、それが下級人といふ思想と不可分的に結びついてゐるといふ理由だけで、反道徳的である。」或はもつと腹立たしげに、「超人道徳は悪魔の所業に他ならぬ。」

この人類倫理學では血液に基くあらゆる結合は否定され排除されるのであるが、コヘンはこの倫理學の共犯者兼證人としてカントの學説を引合ひに出す。このカントの學説には無論一の重要な補遺と敷衍が、即ち人類の最高の道徳的諸目的はユダヤ教の理念と一致するといふ證明が、必要であつた。これがコヘン倫理學の要點である。我が獨逸の偉大な思想家は、自己の哲學に對するこのやうな解釋をどう考へるだらうか。固よりカントは無遠慮な言辭を用ひたのだから、彼がもしもコヘンの同時代人だつたなら、國民のことや獨逸的思惟のことや「ユダヤ人の最も尊敬に値する代表者」のことをおづおづと語つたあの獨逸人教授とは全く異つて、もつと手嚴しく、カント協會から閉出しを喰つたことだらう。

しかしカントは幸にもコヘンの同時代人ではなくて、哲學界に於て最高の敬意を表されてゐるのだから、コヘンのいはゆる「言語同斷な命題」を立てて、ユダヤ教は本來宗教ではなく、單に規約的に過ぎない法規の綜合概念である、と言つても尊敬されるのである。それは無論カントの脫線だつた、といふのだ。それは、コヘンの見解によれば純粹人道思想の倫理學をその本質とする、カント哲學の本來の內容を損ふものではない。――但しカントは無論、「人類に課せられた道德的要求」を實現することがユダヤ的救世主（メシア）觀念と一致する、と叙べたことはまだなかつた。

　コヘンによれば謙遜の德は勇氣に勝るのだから、彼は人類と道德とメシア主義の間に存する關係を叙べるに當つて純ユダヤ的な謙遜な態度を取る。彼は言ふ、「政治界で民族と人類のために戰つてゐる者は悉くユダヤ豫言者の使徒である。」彼等は眞の「英雄」である。そして無論英雄の勇氣を決して軍人の特性と混同してはいけない。「精神の英雄は」とこのユダヤ人は機智を弄するのだ、「決して親衛兵なんかではない」。「寧ろ、勇氣の眞の戰場は

——文化である。」「文化のための精勵が勇氣の本來の意義であり價値である。」そして「豫言者はその永遠の模範である。彼等の愛國心は最も高尙、最も高貴だつたが、彼等は人類を民族の上に置いた。彼等の政治は、我々が今日社會主義と稱するものに他ならなかつた。」此處で結論が生れる。コヘンがマルクス主義者で共濟秘密結社會員(フリーメースン)だつたと附言するのは餘計なことだと、私は考へる。とにかく、マルクス主義とユダヤ人のメシア主義との關係を剩す所なく明瞭に强調したことだけには、我々はコヘンに感謝する。彼の學說は、ユダヤ人歷史家ハインリツヒ・グレーツが九十年以前に書いた次のやうな言葉の言はば鍵であり註釋である。——「ユダヤ敎の窮極目的は人類の精神的及び物質的完成と醇化に他ならぬ。」

カントとプラトンの歪曲

勿論コヘンのことはやや明かになり過ぎたので、人々は少しばかりコヘンに背を向け

る。人々はコヘンに最大の敬意を表するが、彼が過つてゐたことを認めるのだ。「暗黒の現代に」――卽ち一九三五年に――ユダヤ人がコヘン（一九一七年歿）のため挽歌を奏して言ふ、「彼の救世主（メシア）は贋物（にせもの）だつたが、彼のメシア主義は眞物（ほんもの）だつた。」との筆者の言はんとするところは、コヘンが獨逸國民に敬意を表して、カントをユダヤ人の救世主か少くとも救世主の先驅者に祭り上げたのに、獨逸國民はコヘンのその恩を仇で返した、といふことである。偉大な獨逸の哲學者を歪曲してユダヤ人の計劃を速めようとする試みは完全に失敗したのである。

しかし人もあらうにカントが、どうしてユダヤ人のメシア主義の先驅者と宣せられたのだらうか。今や我々は、この名譽が人類のあらゆる偉大な精神に與へられたことを知るのだ。我々は、かやうな歪曲の種類や方法や目的をもつと詳しく觀察しなければならないだらう。

カントに關して言へば、もし我々がユダヤ人による曲解に對する嫌惡のためにこの獨逸

の思想家カントその人に對し嫌忌の情を抱くやうになれば、ユダヤ人の獲るところは大なるものがあるであらう。愷かに、かやうな曲解の加へられる所は、最も弱い箇所であつた。カントの場合もさうで、彼の倫理學の弱點は、徹の如くにゲルマン的思惟の發展を被ふてゐるある種の傳統を脱することが出來ないといふ事實に存する。例へば、カントのストア主義道德概念の有する依存關係を擧げることが出來やう。この依存關係はカント獨りの特殊な弱點ではなくて、文藝復興期から始まり啓蒙主義に於て頂點に達し、恰も一筋の赤い糸の如くに數百年を貫いてゐる、もつと遙かに一般的な作用である。ストア主義は古代に於て始めて廣汎な道德哲學を打建てたのであるが、この道德哲學は人類を、換言すればあらゆる民族的制約から解放された個人を考察の中心に置くものである。禁欲主義の賢者ゼノンが純粹な人類道德の理念をその旗幟とした頃は、血族紐帶の崩壞の時期、民族混淆の開始の時期であつた。この問題で最も教訓的なのは、人種的に見ればこの運動が多くの點に於て既に希臘精神の外にゐて、典型的な近東的=セム族的特質を取り入れ、次いでこ

の特質が、政治生活の崩壞に絶望して已れ自身の中に退いて言はば對象なき義務感情のやうに空廻りしてゐた北歐人の意志力と混合した、といふ事實である。ストア學派の創始者ゼノンもセム族の血をもつてゐた。そして希臘人は、彼等のいはゆる小フェニキア人たるゼノンの異人種なことを充分感じてゐた。だから、このフェニキア人のカントに對する遠い影響があつたので、カント以後百年を經てユダヤ人コヘンがこの獨逸の思想家に襲ひかかることが出來たのだ、と我々が言つても大膽に失することはないのである（これは、その他幾多のユダヤ人がそれ以前も行つた。早くもカントの生存中にザロモン・マイモンとマルクス・ヘルツとラザルス・ベンダギート、下つて十九世紀には例へばオットー・リープマン等）。

他方これと關聯して看過してならないのは、ストア主義のカントに對する消極的な影響も、プロシヤ的＝フリードリッヒ大王的變形とも名づくべき、ストア主義的立場の獨逸的變形によつて、實に根本的に弱められてゐるといふ事實である。そして本來のストア主義

を考察してみても、このストア主義もユダヤ人のメシア主義とは勿論何の關係もないのである。たとへストア主義の人類理念が賢者ゼノンの高慢な理想に貫かれてゐやうとも、それは平等と同胞愛との思想が蒙つてゐるあの變形に比べると遙かに無害である。卽ちその思想は、例へば今日ロシアに於て、メシア主義的意志と結合して、ユダヤ人の專橫をもたらしてゐる。かくてゼノン――コヘンの線はカントの巨大なる姿とただ一點に於て交錯してゐるが、それもカントが我々獨逸人に語る事柄から見れば、決して本質的な一點ではない。しかるにコヘンは彼の詭辯の魔術によつてこの線を圓形に振り廻すので、それは今やコヘンから發する光の圓錐形のやうになつて、偉大な獨逸の思想家カントの姿の周圍に閃き、遂にカントを老ユダヤ人の戲畫として壁上に投影するのである。

ただ一つの例だけを示さう。カントの學說の一主要點は、直觀と概念は不可分的に合して或る全體を成し、相互に他を缺くことは出來ない、といふ彼の見解である。「內容なき思想は空虛であり、概念なき直觀は盲目である。」――この有名な定式は彼の中心認識の一つ

であつて、それは彼の哲學體系の時間的制約を超えて將來も我々の道を照らすであらう。この認識は、緊張を孕む統一を求めるゲルマン的獨逸的努力から發してゐる。ユダヤ人は何よりもこの統一を破壞することを急務と考へるのだ。コヘンは思惟と直觀の必然的相互緊張から直觀といふ要素を除外し、かくてカントの認識論を倒立ちにする。同樣に彼は形而上學者カントについて何も理解してゐない。

カントに劣らず酷ひ目に遭つてゐるのは、最大の希臘の哲學者プラトンである。彼もコヘンや新カント派學者にユダヤ的方面に引き歪められてゐる。例へば――前述の事柄と關聯のある一例を擧げれば――コヘンはプラトンが勇氣といふ概念を彼の（コヘンの）考へてゐる意味に於て理解した、と言つて人を瞞着しようとする。コヘンは書いてゐる、――プラトンは「元來勇氣を最も高貴な德と考へた國民道德に依據することを避けない。しかし彼は、この道德を取り上げてそれを解釋し直ほすことによつて、この道德をそれ自身の武器で擊破する。」――「取り上げてそれを解釋し直ほすことによつて、それをそれ自身の

武器で撃破する。」——とれは單にコヘンの方法ばかりでなく、ユダヤ的方法一般の、ユダヤ哲學と稱ばれてをり且つ過去に於てさう稱ばれた一切のものの方法の、即ち己れ自身の方法の、無意識的告白の如き觀がある。

　哲學へのユダヤ教の侵入は、西歴紀元少し以前にユダヤ人アリストブロスが希臘の原典を意識的且つ組織的に歪曲して、それと舊約聖書との合致を證明しようとしたことに華々しく端を發した、といふ事實を諸君は知つてゐるに違ひない。次いで最初のユダヤ哲學者アレキサンドリアのユダヤ人フィロンは、プラトンはその哲學をモーゼの書から取つたと、謙遜な態度で叙べた。カントにヘンが附いてゐるやうに、プラトンにはフィロンが附いてゐるではないか。此處で我々は、あのヘレニズム時代の極めて一般的な特徴は、ありとあらゆる體系や宗教が相接觸し、際限なく相互に混淆したことである、と言ひ得るであらう。だからアレキサンドリアのユダヤ人フィロンもプラトン主義とユダヤ主義とを混同するに到つたのだ。しかしフィロンがプラトンをモーゼの弟子にしたといふ事實は、あ

る特殊な事情を示唆するものである。我々の同時代人、ユダヤ人アドラーだつたら、この事實を次のやうに說明するかも知れない、——憐れにもアレキサンドリアのユダヤ人フィロンは、希臘學術の優越を目擊して卑下觀念群に捉へられたので、代償作用の法則に從つて、モーゼ云々の誇大妄想的寓話を揑造したのだ、と。しかしからいふことは何うでも構はない。我々は此處で精神分析の實驗をしようとは思はない。我々は眞の本質的關係を探さねばならない。

最初に我々を不思議に思はせるのは、フィロンとコヘンの二人が、全然時代を異にしながら、偉大なアリアン族の思想家をユダヤ人の神託思想と結びつける點で一致してゐる、といふことである。そして、紀元十二世紀に生きてゐた中世期の最も著名なユダヤ人哲學者、スペイン生れのユダヤ人マイモニデスも彼等と同じ道を步いてゐるのを見るに及んで、我々の驚嘆は增大する。實際、プラトンと神託思想との關係は、我々に取つてではないが、ユダヤ哲學とその揑造行爲とを識る上に、決定的に重要である。

指導と支配の天職を有する人は、プラトンによれば哲學者と政治家を一身に兼ね具へてゐるのであるが、永遠の現實の世界即ち觀念の世界に登つて、其處から、今や地上に完全な國家を建設しようとする自己の計劃の前提を取つて來る。ユダヤの豫言者は神の前に進んで、人間に神の宣託を傳へる。來るべき政治活動の前提として神聖なものへ登つて行くといふこの形式が等しいために、上記二つの場合が全然異つたもの、相互に一致すべからざるものであるといふことを看過してはならない。豫言者は命令されてその命令を受け取るが、これに反してプラトンの言ふ觀念(イデー)への歸依は人間精神の自由な內的行爲である、といふ點に根本的相違が存する。しかしこの命令と自由の對立の背後には、もつと遙かに深刻な對立が潜んでゐる。政治家の本質に關し同名の對話篇の中でプラトンが叙べてゐるのを讀みさへすれば、プラトンが今日我々の國民社會主義が考へてゐる政治の觀念に如何に近づいてゐるかを知るに充分である。固定せる法律や規則によつてゞはなく、天才的政治家の生ける創造的力によつてこそ、國家は正しく建設される。プラトンは說く、——無論

法律は必要であるが、支配者は法律の奴隷となる必要はなく、自分自身の作つた法律の奴隷となるにも及ばない、と。彼は述べてゐる、――醫者が旅に出る前などに患者に處方を書き殘して置いたが、歸つてみると患者の容態が變つてゐるので、もうその處方を顧みないと等しく、立法者も、自分の作つたものであれ先人のものであれ、規則がもう早や自分の目的に添はなくなつた場合、それを直ちに破棄して構はない、と。この箇所を讀んだだけでも、觀念說を正しく把握することによつて次の事實が確認されることが明かになる。即ちそれは、プラトンの哲學的政治家が永遠の觀念界から取つて來るものは既に出來上つた法律ではない、といふ事である。寧ろこの觀念界に登り、其處から降るといふ行爲は一つの創造的思惟過程であつて、プラトンによれば、かくてこの過程から政治家の自由な活動が生れるのである。プラトンの觀念は永遠に存在する原象として示されてゐるのであるが、以上の事はこの原象の靜止的な性格に反するものではない。この永遠の存在が靜止してゐるからこそ、人間は自由な創造的活動をすることが出來るのであるが、これに反して、人

間から切離された神の極度に高い能動性は人間に無爲な受動性を宣する。
憾かにプラトンの觀念說には弱點がある。そして、この偉大な思想家は多くの點に於て我々現代の獨逸人の考へに近い所があるけれども、全體としては我々は彼に從ふことは出來ない。民族的哲學はプラトンの觀念說を超克しなければならぬと、私は信ずる。しかしこれは別問題である。
此處では、プラトンの學說とユダヤ人の神託思想との間に存する不可抗的對立を諸君に暗示することだけを、私は念頭に置いてゐた。ユダヤ哲學が、プラトンをユダヤ的神託思想の意味に於て曲解したり、或は補遺すると稱したりするのを觀れば、諸君は今ではこの歪曲が如何に大きいかを知るだらう。プラトンは政治家と哲學者との同一を說く。彼はその場合ユダヤ的神託思想を取り入れるのを忘れたのだ――と、コヘンはから考へ、マイモニデスもから考へ、フィロンはプラトンをモーゼの弟子となし、ユダヤ人レオ・シュトラウスは一九三五年に公けにした彼のマイモニデス敎本とも言ふべき「哲學と法律」の中で

次のやうに言つてゐる。「哲學はその上にある高級法廷の下に、國家の下に、法律の下に、立つべきであるといふプラトンの要求は、啓示宗教の時代に實現された。」プラトンの歪曲をこれよりも簡潔に定式化することは恐らく出來ないであらう。而もシュトラウスは、豫言者の概念はプラトン的概念ではなく、實にこの概念はプラトンとは全く無縁の啓示の觀念を前提してゐる、といふことを充分意識してゐたのである。プラトンがこれを要求した、從つて言はゞこれを準備したやうなもので、それが後にユダヤの法律となつて實現された、と說くが如き主張はいよいよ大膽である。

律法書(トーラ)と猶太法典(タルムード)

ユダヤ人に全然無縁であり對立してゐる現實聯關に屬する非ユダヤ的精神財をユダヤ的法律觀念の中に取り入れてこの觀念に從屬させるといふの方法は、ユダヤ哲學及びユダ

ヤ敎一般の基本的方法である。この方法を用ひた人が紀元前後頃のアレキサンドリア人フィロンであれ、中世期のマイモニデスであれ、二十世紀のコヘンであれ、等しく同じ方法である。

この方法を徹底的に闡明することは、ユダヤ哲學のみならず、ユダヤ人問題全般を理解する鍵を握ることを意味する。

この目的のために、我々はユダヤ人の法律觀念の概念をもつと詳しく觀察しなければならない。ユダヤ人の法律は聖書の形で律法書（トーラ）（Thora・モーゼ五書）として神に與へられたものであつて、剰す所なく實行されなければならぬ。このトーラは一語一語、一字一字、すべて先在的なもの、卽ち世界創造以前に存在してゐるものである。その中の僅かな部分でも取除いたり附加へたりすれば、必ず神の意志がそのために蔑ろにされるのである。神自身が天に在つてトーラを營んでゐる。この法律に違反する者は、神の前で罪を犯すことになる。從つて全社會生活は、法律違反が出來得る限り生じないやうに規定されな

ければならぬ。

これは散在宗徒（ディアスポラ）として生活してゐるユダヤ人に取つては特に困難である。蓋し、彼等は外國の生活條件の下に在るからである。なほ、離散といふことは既に古代に於てユダヤ人の根本特徴となつた。そして強力だつたのは、最初にはバビロニアの散在ユダヤ人位のもので、エジプト（アレキサンドリア）のユダヤ人も小亞細亞＝シリアのユダヤ人も強力ではなかつた。しかもこのバビロニア捕囚の場合にすら、驚くべきことには、故郷イエルサレムに歸つてもよいといふ許可に從つたのはユダヤ人中の極小部分に過ぎなかつた。

さて、何が法律違反であるかを知るためには、法律教師（ラビ）（Rabbi）が必要であつて、このラビが個々の場合に於てトーラを如何に解釋すべきかを教へるのである。これらのトーラの解釋は最初口で爲されたが、後に紀元後五世紀間にいはゆる法典（タルムード）（Talmud. ユダヤ法典）として最後的に固定された。從つてタルムードは、學者のなすトーラの決定的解釋なのである。

其處には例へば、ユダヤ人は安息日には住居から二千歩以上離れてゐてはいけないといふ法律がある。かういふ規定を守ることは多くの場合全く不可能であるが、それにも拘らずそれは守らなくてはならぬ。これは次のやうにして實行されるのだ。——住居とは即ち人が食事をする場所のことである。だから或人が安息日に何處かへ行かうと思ふなら、その前日に、その行かうと思ふ方角へ二千歩毎に若干の食物を置いておけば、その各點に一つの割で新しい住居を建てることになるから、かうすれば勝手な所へ行けるのである。だがこれは廻りくどい方法だから、ユダヤ人は次のやうにして單純化してゐる。即ち食物の一ぱい入つた大きな壺を汽車に持ち込んで腰掛の下に置く。かうすれば住居を車室に建てたことになるので、何粁旅行しやうが、法律に觸れることはないのである。

また他の例を言へば、安息日には個人の場所、例へば住居などから品物を例へば道路などのやうな公共の場所に持ち出すことは、勞働だからといふので、禁ぜられてゐた。ところがこれについては、タルムードに次のやうに書いてある。「右手か左手か、懐か、肩かで

品物を持ち出す者は有罪である。……　しかしその品物を手の甲（卽ち上側）か、足か、口か、肘か、耳か、髮の毛か、口を下に向けた財布か、財布と襯衣の間か、襯衣の緣(へり)の外部又は內部か、靴の中か、サンダルかで持ち出す者は、普通の持ち出し方と異ふのであるから、制裁を受けない。」法律違反の可能性が、旣に法律そのものの中に豫想されてゐるのを諸君は見るであらう。法網を潛らうとする傾向はあらゆる國民の反社會的な個人にはよく見受けられる。しかし、法律に事實上違反してゐながら、あらゆる手段を以て、無論我々には理解出來さうもない聰明さで、法律は遵守されたのだと證明しようとする努力はただユダヤ人だけのもので、タルムードの世界の顯著な特徵の一つである。

タルムードの今一つの特徵は、上記の目的を達するための思考の特殊な形式である。諸君は私が最後に敍べた例を觀るがよい。——此處では勞働の概念が全然形式的な意味に解釋されてゐる。この形式的な意味に合はないものは、勞働の概念に入らず、從つて、法律を犯しながら而も法律を守る可能性を含むこととなる。然るに我々の感じとしては、旣に

一定の行爲が禁ぜらるべきである場合には、ある壺を手の中で持ち出さうが手の平で持ち出さうが、内容的に見て何の相違も見出せないのである。しかしタルムードに取つては――近代のユダヤ人らしいユダヤ物理學者アインシュタインとライヘンバッハの得意の表現を用ひれば――勞働の概念を「適切に定義すること」が重要なのである。

この「適切な定義」は、タルムード的思惟の基く方法の端初であるに過ぎない。我々の感じとして理解することの出來ないのは、我々が學問的態度と解するものをユダヤ人は顚倒することである。卽ち我々は一定の方法を用ひて、最初に公然と提出される問題に答へようとする。例へば我々は先づ、モーゼがプラトンに何等かの影響を與へたか否かといふ問題を出し、次いで文獻學的方法や歴史的方法を用ひて、かかる關聯が存在した筈はないといふことも、結果として確定することが出來るのである。タルムード的思惟に取つては、これに反して、結果は最初から確定してゐるのであつて、今ではこの結果に到達することの出來るために用ふる適當な方法が重要なのである。例へばアリストブロスに取つて

はプラトンがモーゼの弟子だつたといふことは既定の事實であつて、これを證明するための方法として、幾分無器用ではあるが、彼は原典歪曲の手段を遠慮なく用ふるのである。

タルムードはこのためにもつと洗錬された方法を用ふる。ある主張を證明しようとする一定の目的のためには、例へば、内容的に全然無關係な律法書(トーラ)中の二つの箇所を相互に結びつける必要がある。ところでヘブライ語の子音は同時に數をも現してゐるので、各語はその中にある字母によつて夫々言はば一定の數字の和を有する。そこで上述のトーラの二箇所を希望通りに結びつけるためには、場合によつては、それ自身としては何の相互關係もないこの二つの箇所の或る語が、同一の數値を有することを證明するだけで充分なことがある。

或は、また他の例をタルムードから取れば――ある場所に屍體があれば、その場所は不淨である。しかしそれと區切られてゐる隣接の場所は清淨である。屍體といふやうな重大な不淨物に妥當することは、例へば爬蟲類のやうな輕微な不淨物にも妥當する。これが輕

微なものから重大なものへの推論だといふことは、論理學の法則によつて明かである。ある法律學者も複雑な神學上の議論に於て上記の爬蟲類と屍體に關する事柄をこの意味で引用して、「神聖なものが神聖なものによつて瀆されるならば、不淨なものによつて瀆されるのは更らに甚しい。」といふ命題を證明しようとする。否、それば正しくない、と言つて相手の法律學者は前者にその間違ひであることを證明する。卽ち彼は、「イスラエル人が神に献げる貢物を瀆すべからず。」といふ律法書中の箇所から、我々には理解出來ないやうな方法で、「神聖なものは神聖なものを瀆すことは出來るが、不淨なものは神聖なものを瀆すことは出來ない。」といふ命題を推論するのである。從つてあのトーラの言葉は輕微なものから重大なものへの推論を否定するものだ。從つて……といふ具合に、トーラの句の正しい解釋の仕方に關して、際涯なく紛糾錯綜した議論が續く。

解釋の根本原理は次の通りである。——卽ちトーラ中の各語には夫々一定の意味があり、神が同じ事を二度言つてゐる筈はないのだから、種々の文句が一語も違はないでか、

或はさうでなくとも一見同じ意味で、二度現れてゐるとしても、神の述べる意味はその都度異つた事柄である。神の言つた意味を明かにすることが、法律學者の仕事である。例へばトーラ中には、特別の聖化を受ける方法たるある修業のことが敍べてあるが、その修業の要點は、長い間頭髮を刈らないといふことである。トーラにはその生彩ある描寫がしてある。そして聖化とか散髮といふ言葉がいろいろな句の中に何度も繰返されてゐるので、種々の句中に一見同じ事柄が敍べてあるやうに思はれる。しかし神がさういふ事をするとは考へられない。といふのは、トーラに餘計な言葉はないからである。法律學者達はこれを次のやうに解釋する。――ある場合には、神は普通の手續のことを指してゐるが、別の箇所では、聰明な神は直ちに、全く頭髮のない人のことを念頭に置いたのだ。そのためにその人は懺悔の祝福を失つてよいだらうか？　否、そのやうな人も神聖なのだと、神はその句を繰返すことによつて言はうと思つたのだ。またそれが三度繰返してあるのは、髮を伸ばしてゐる者が規定の期間中盜賊に捕へられてゐて、その盜賊がその者の頭髮を無理に

刈るといふ場合が考慮されてあるのだ。かやうな不幸に遭遇した者も約束された聖化を受けるといふことを、神は類似の言葉を三度繰返すことによつて言はうとしたのだ。——ざつとこんな具合だ。或は、ある句に「そして（ウント）」といふ言葉があつたり無かつたりするのは何故か、といふことに關して際涯（はて）ない議論が繰展げられる。何故なら、トーラに餘計な言葉はないので、この言葉にも理由がなくてはならないからだ、といふのである。

有機的形象か、藝術作品か、有機體又は藝術作品と考へる場合の世界全體かについて、これらのものが完全であると我々が言ふのは、これらのものには何の餘計なものもなく、すべては當然あるべき場所にあるからであつて、かくて我々は、何物も孤立することを許さない一般的聯關の原理を言ひ現してゐるのである。トーラの語句が單一性を有するといふタルムード的原理にはこれと正反對の意義がある。これは言はば絶對的無聯關の原理なのである。各個々の句、各個々の語を孤立させてそれに特殊の、即ち獨斷的な意味を賦與する可能性の緒となる原理である。

私が此處に引用した二三の例に諸君の中の多くの人々は愕いたことだらうが、これとても法典的思惟の不合理をほんの僅かに理解せしめるに過ぎない。この不合理は實際には、如何に努力してもアリアン人の頭には呑み込めさうにもないものである。この思惟の本質を一つの概念に要約しようと思ふなら、これは、あらゆる具體的意味・あらゆる所與の現實を、無視する絶對的に不合理な形式主義であると言ふことが出來るだらう。換言すれば、それは具體的なものからいよいよ稀薄となる概念に上昇する單なる抽象ではない――否、此處では現實と何の接觸もなく、ただトーラと稱せられるあの魔法を用ひて、形式主義的觀察方法といふ繩が綯はれ、これで投繩が作られ、人はこの投繩で擅に現實の斷片を背後から捕へてその首を締め、生ける聯關から引き摺り出すのである。

勿論、タルムードに用ひられてゐる如何に粗野な方法といへども、ユダヤ人が他民族の文化財と緊密に接觸するやうになれば、幾分緩和され、非ユダヤ的慣習に同化しなければならない。それにも拘らず、具體的意味・現實のある獨特な無視をその本質とするタルムード的思惟の核心は、ユダヤ人がアリアン人種の完成した論理的・數學的・科學的方法を巧みに利用する場合にすら依然として變らないのである。

新カント學派の明星としての光を失ひかけたコヘンの遺産を獨逸に於て繼承し、新たな標語を獨逸哲學に投じたユダヤ人、現象學の創始者エトムント・フッセルは、この好適例である。此處に言ふ新たな標語とは、事物そのものへ！　といふのである。これは拙い考へではない——殊に、この哲學好きの男がコヘンの新カント學派的認識論の際涯なき饒舌を受け繼いでゐるのを考ふるとき、然りである。しかしユダヤ人フッセルはこの、事物そのものへの突進を何う考へてゐるのだらうか。諸君は聞いて驚くがよい——彼の言ふ所によれば、彼はこの目的のために現實を括弧に入れる、即ち現實を無視するのである。これ

は明かにタルムード的傾向である。フッセルによれば、現實を顧慮しない場合に、人は眞の本質直觀に到達するのである。

全フッセルもプラトンの甚しい歪曲をその本質とする。プラトンは、すべての哲學者と同様に、即ちすべてのアリアン人種的哲學者と等しく、現實の把握に全努力を傾け、かくて彼が觀念（イデー）と名づけるものにこの現實を深き形而上學的意味に於て發見すると信ずる。我々は觀念（イデー）の現實を今日も早やプラトンの言ふ意味に於て承認することは出來ないとしても、この事實はプラトンがフッセルに對して今日もなほ千倍も正しいといふこととの妨げとなるものではない。フッセルはプラトンの觀念説を純然たる形式主義に解體してゐる。彼はこの觀念説を形而上學から脱せしめ、ユダヤ的意味に於て「科學的」にし、固よりさうすることに誇りを感じてゐる。フッセルが思惟を向ける思惟對象の世界には、それが現實的なもの、抽象的なもの、數學的なものの何れに關してゐやうとも、常に何か怪奇な所があるが、その理由は實に彼が現實を無視し、非プラトン的に實的存在と觀念的存在との間

の區別を純形式的に解釋する點に存する。これらの思惟對象は固定せる所與として現れ、思惟はこの所與をそのまま承認してそれに從ひ、プラトン的意味に於て形而上學の太陽に照らされることがないのであるが、この思惟對象の存在、即ち我々の人種の感性には把握出來ない存在は、ただ先在的律法書の姿に於てのみ明かになるのみである。かくて、前述せる如くコヘンはプラトンの哲學的政治家をユダヤ的豫言者に改變したのであるが、フッセルはプラトンの觀念世界に、言はばトーラを置き代へたのである。

ユダヤ的新カント學派とユダヤ的現象學者が互に如何に激しく戰はうとも、彼等はそのユダヤ的性格に於ては一致してゐる。兩者ともプラトンの學說を歪曲する。兩者とも、私が先に述べたカントの根本認識を無視するといふ點で、カントに對して同樣な關係に在る。直觀と能動的形式賦與的思惟は、カントによれば、不可分的に合して或る全體をなす。コヘンは前述の如く直觀といふ要因を抹殺するので、殘るのは思惟のタルムード的形式である。フッセルはこれと正反對のやり方をする。即ち彼は思惟の能動性を排除し、か

くすることによつて直觀を歪めて、對象のトーラ的固定的世界の消極的認識となすのである。

タルムード主義とスピノーザ

この固定對象說は本質的にはカトリック的思想家ボルツァーノとそのいはゆる「命題自體」說の影響を受けてゐることは爭はれない、少くともそれと密接な關係がある。然るにボルツァーノはユダヤ人ではなかつたではないか、と言つて諸君は此處で反駁するかも知れない。これによつて我々は重要な精神史的聯關に觸れるのであつて、これは此處で徹底的に闡明されねばならない。フッセルの現象學とカトリック的新スコラ學の或種の方向との間の密接な關係は甚だ注目すべき事實であつて、差當り說明困難のやうに見える。兩者の連鎖をなすものは就中半ユダヤ人マックス・シェーラーである。ユダヤ的精神態度とス

コラ學的精神態度とのとの關係は、一瞥して考へられるよりは無論もつと深刻である。それはスコラ學そのものの本質に關する。詳しく言へば、アラビア人がキリスト教的スコラ學に新たに古代の遺產を傳へた頃の中世期に、これと同時にはいつて來たユダヤ人の影響はもつと小さかつた。寧ろ我々は、スコラ學には最初から或種のタルムード的特徵が附着してゐたことを承認しなければならないだらう。事實、これを看過出來るのは、ただ偏狹な人間だけだらう! この特徵とは、哲學的研究と與へられた啓示の原典とを結びつけることとに存する。更にそれは、權威者や聖書の章節の解釋に依據して哲學上の主張を支持するのに用ひられた方法に存する。實際ユダヤ人フィロンも、キリスト教の教義の作製に大きな影響を與へたのみでなく、キリスト教神學にいはゆる寓意的聖書解釋の方法をもたらしたのであつて、これは彼に取つてはヘレニズムの思想財を自己のユダヤ的世界の中に取り入れる手段だつたのである。

此處で多くの人々は、これと同樣にヘレニズムの方でもユダヤ人フィロンに影響を與へ

て變化したのであつて、且つかやうな意味での二つの相異つた文化圏の接觸といふものは、奇怪なことでもなければ、況んや惡いことでもないではないかと言ふかも知れない。しかしこの考へ方はユダヤ人の本質の特徴を全く看過してゐるもので、その結果更に次のやうな誤謬が生ずる。即ちユダヤ教の良い部分が言はばタルムード的迷誤を脱して、ユダヤ教の發展の行詰りとも思へるやうなタルムードとは最早や何の關係もない或る存在へ發展するかのやうに考へる誤謬である。

かうした論爭問題を解決するには、ユダヤ人自身を引き合ひに出すのが常に最も良い策である。そこで、丁度最近新たに或るユダヤ人書肆から「ユダヤ史の構造」といふ著書を出版したばかりの、あの屢々私が述べた歴史家ハインリッヒ・グレーツがこの主題について言つてゐることを聽くがよい。

「タルムード主義は」――と、このユダヤ人第一流の權威者は言ふ――「異質的なもの・ユダヤ人に强制的に押しつけられたもの・ユダヤ人の史的生活の贅物・ユダヤ精神の溷濁と

見做すべきではなくて、ユダヤ教の根本理念の前提に基く必然的歸結である。タルムード主義は自然性の非道德的制約に對する・自由なる道德的精神といふ對立物を形作る。從つてタルムード主義は、必然的なものとなつたユダヤ人の世界生活に對する最も有効な對重である。前者は創造的原理、後者は保持的原理である。」

これはユダヤ人の最も有力な自證の一つである。世界生活、——換言すれば散在(ディアスポラ)——との世界生活が一方にあり、タルムード主義が他方にあつて、との兩者が、合して或る全體をなすユダヤ教の二つの根本原理であるといふこと——ユダヤ的本質を認識するには、これよりも正しい手掛りは殆んど考へられない。タルムード主義が保持的原理であるといふことも、全く首肯出來ることである。グレーツが「タルムードで圍ひを廻らせば、世界中の家はすべて截然と區劃された聖地(パレスティナ)となる。」と言つてゐるのは正しい。グレーツが今一つの原理、世界生活を、創造的原理と稱ぶのは、極めて特色ある表現である。非ユダヤ的術語では、異質的なものへの同化を求むる努力は創造的とは稱ばれない。しかし恐らく

グレーツは、創造といふことを異質的なものを攝取することゝ考へたのだらう。

事態を詳しく觀察するに、グレーツが述べる互に條件づけ合ふあの二つの原理の交互作用は、萠芽としては、我々が檢討したタルムードの方法そのものの中に既に含まれてゐる。事實上の法律違反は、一方に於ては既に他人種の風俗への同化であり、他方に於ては――明らさまに言へば――他人種を攝取し思ふ存分本能を滿足させるための槓杆である。しかしこの擴充に續いて直ぐにあの保持的原理への後退が生じ、この原理が、法律は形式的には守られてゐるのだといふことを證明することによつて、違反を無効にする。(但し「形式的」といふ言葉も往々アリアン的な副詞であつて、純ユダヤ的には、「法律はそのままで實行されてゐるのだから、それで解決濟みだ！」といふやうに言はれるだらう。)

明瞭にタルムード的意味に於けるこの法に對する忠實は、グレーツに取つては、我々の聞いたところによれば、自然性の非道德的制約性に抗する自由な道德的精神である。自然性の非道德的制約に對立する精神！　このユダヤ人の自證は、ユダヤ人には精神の最奥の

本質も血液の最奥の本質も把握する能力は永久にない、といふことを物語つてゐる。我々に取つては、精神と血液は互に不可分的に合して全體をなす。この結合が解體すれば如何なる結果になるか、實にユダヤ教こそ、これを知るための最も凄まじい實物教育である。血液なき精神、これはグレーツが讃美する自由な精神、即ち全然現實を離れて己れ自身の中に凝固したトーラやタルムードの精神である。そして逆に、精神なき血液は、放縱な、法律に制御されない。ユダヤ的本能性であつて、これは遂には搾取行爲や犯罪をもたらすものである。

この二つの要因が、今日のロシアに於けるユダヤ的ボルシェヴィズムに見られるほど明瞭に並存してゐるのは何處にもない。一面に於ては犯罪、他面に於ては、ユダヤ的＝タルムード的法律曲解と紙一重の精神的態度。テオドール・ザイベルトはユダヤ教とボルシェヴィズムの因果關係を全然否定するのであるが、この慥かに信頼するに足るザイベルトはその著「赤露」中に次のやうに書いてゐる。「汗牛充棟もたゞならぬ種々の會議や中央委員會の

報告書をめくると、地球上最大の國の一つの支配的な黨の歴史を讀んでゐるといふ印象などさらになくて、ユダヤ神學者の會議の記錄・パリサイ人の會議の記錄、を讀んでゐるやうな印象を受ける。其處には、レーニン全集第五、第十一、第二十七卷、第五章、第三節からの引用文がうようよしてゐるばかりだ。其處には、このやうな節に、第十五回黨大會決議四十三條に述べられたことゝ異る解釋を施さうと敢てした罪人に對する呪逐が轟いてゐる、等々。」

無論、國民社會主義が我々に再び與へたあの精神と血液の生ける統一が崩壞するからといつて、それが直ちにユダヤ教と關係があるといふのではない。このやうな崩壞は、例へばユダヤ人がまだ入り込む以前の古代社會にも既に見受けられる。其處では、血液なき精神及び精神なき血液といふ二つの正反對の崩壞の方向が獨立的に、且つ差當つて無關係に並行してゐる。ユダヤ的本質は、崩壞のこの兩極を互に關係づけることに存するのである。血液なき精神が、精神によつて形式を與へられた血液の世界にはもう屬してゐない本能を

言はば組織化するとき、タルムードの雰圍氣を成すところのものが生ずる。本能は、血液と結合せる眞の精神によつて統御されなくなつてゐるので、此處では已れの思ふままに振舞ふことが出來るが、しかし同時に、似而非精神的・純形式的法律に結びついてゐる。このために、法律は犯されても、しかも同時に常に守られる、といふ二重の狀態が生ずる。もしも本能がこの血液なき精神の法律によつて極めて獨特なやり方で制御されないなら、その結果滅亡が生ずるだらう。反對に、もしも本能が存しないならば、法律の・卽ち血液なき精神の・救ひ難い硬直がすべての生命を窒息せしめるであらう。グレーツが散在（ディアスポラ）の中にあるといふ創造的原理とは、恐らく、移住民の數に比例してその力を發揮するとの本能の活力なのだらう。かくて、單獨では不可避的に滅亡をもたらす二つの變質が綜合せられ、その綜合の永續性が史上稀に見るものであるといふことはユダヤ教の秘密である。それは同時にタルムード的心的態様の秘密、彷徨へる永遠のユダヤ人の秘密である。

北方のアリアン人種も、ゲルマン人も、世界を移動し、遠くへ行き、驚きの眼を見張つ

て異國の風物を眺め、そして、永久に已れ自身に忠實であらうか、已れの本質に不忠實にならうか、といふことが彼に取つて死活的問題である。彼が渝らず已れ自身に忠實であれば、自分の取り入れたものを已れの本質の中心から新しいものに變形し、已れの種族の烙印を異邦に壓しつけ、國家を作り、强力な帝國を建てる。彼は屢々優勢な力に屈するが、全然滅亡してしまふのは、たゞ已れ自身に不忠實になる時だけだ。だから彼に取つてはシェークスピアの次の言葉が至上の法則となる。「最も大切な訓(をしへ)…已れに對して忠實なれ。」我々は、渝らず已れ自身に忠實であれば、强力である。我々は、已れ自身に不忠實になれば、滅亡する。しかるにユダヤ人は、渝らず已れ自身に忠實であれば、已れ自身に不忠實となり、已れ自身に不忠實になれば、渝らず已れ自身に忠實である。彼は、法律を守れば、法律を犯し、法律を犯せば法律を守る——まことに、我々には永久に理解出來ない本質樣相である。

今や始めて我々は、タルムードが如何に奇怪な選擇原理を有するかを理解する。タルム

ードに積極的に反應する者は、ユダヤ人であるか、救ひ難いまでにユダヤ人化してゐるのである。そして同時に、信徒ユダヤ人と自由ユダヤ人との關係も此處に一擧に明かとなる。信徒であるタルムード・ユダヤ人が絶えず法律に不忠實でありながら結局それに渝らず忠實な如く、ユダヤ人はタルムード全體に不忠實になることがあつても、結局最も內心に於てはそれに渝らず忠實であり得るのである。かやうな自由ユダヤ人の態度は本來の意味に於てタルムード的である。この態度を止めさせるためには、フィヒテの言葉を用ふれば、そのユダヤ人の首を斬つてユダヤ人に非ざる首を置き代へなければならないだらう。哲學的にあのやうに解放的であつたユダヤ人コヘンを振返つて見よ。彼は自由ユダヤ人と豫言者とを一身に兼ねてゐる。そして我々には、逆說と思へるこの結合に於てこそ、コヘンの眞のタルムード・ユダヤ人としての本體が明かとなる。何故ならば、狹義のタルムード・ユダヤ人といへども、例へば相手の國民の風俗に順應して役立つために法律を犯せば、それのみでも直ちに自由ユダヤ人となるからである。しかし彼はそれと同時に法律に

忠實なのである。何故ならば、彼は上述にも拘らず結局タルムード的方法に基いて法律を守つたからである。法に對する忠實と自由精神とのこの根本關係を洞察し了せれば、我々は、如何に自由なユダヤ人といへども――ユダヤ教に叛いたユダヤ人、否、それに敵對してゐるユダヤ人すら――全くこの關係に支配されてゐることを疑はなくなるであらう。

このための世界史的例は、哲學の領域ではユダヤ人バルフ・デ・スピノーザである。彼はユダヤ教會から閉め出された。すると彼は――彼がある有名なユダヤ法典學者の門弟だつたことを忘れてはいけない――以後ユダヤ教と絶緣し、それを酷評した。しかし、ユダヤ的性質は十七世紀には最早やアムステルダムの律法學者のやうな滑稽な身振りでは實現することが出來ないといふことをスピノーザは本能的に認識したのであるが、正にこの點に彼の天才的ユダヤ人たる面目が現れてゐる。かくて彼はヨーロッパ思想界に、禍の種となる贈物をし、實際この贈物は、歷史的發展をするうちに、あの律法學者達が如何に大膽なメシア主義的空想によつても想像することが出來なかつたほど、ヨーロッパの原住民族

に取つて危險となつた。ラビ達が洞察しなかつたこと、あの執拗なコヘンすら理解しようとしなかつたこと――そのことを、今日では全ユダヤ人が彼に感謝してゐる。

一九三三年に一獨逸書肆からスピノーザ祝賀記念文が出版された。スピノーザ主義のユダヤ的性格にまだ何かの疑ひを持つてゐる者は誰でも、この本を手に取つて見るがよい。二十二名の寄稿者中、非ユダヤ人は多く見積つても四名か五名に過ぎず、その中には名譽ボルシェヸストのロマン・ローランがゐる。

「キリストによつて結ばれた同胞がキリストの模倣を認めるやうに、我々スピノーザによつて結ばれた同胞も君の（スピノーザの）認識と愛に從はう！」と、記念文の編輯者ユダヤ人ジークフリート・ヘッシングはその怪奇沒趣味なスピノーザ禮讃の辭に叙べてゐる。

惡評高いユダヤ人ヤーコプ・クラッツキンは、愚かにもキリスト教徒がスピノーザの生活を節制と禁欲の模範と考へるのを揶揄してゐる。彼はこれに對して、スピノーザが例へば終日バタを添へた牛乳入りスープだけを攝つた等といふやうなことは、スピノーザが育

つたユダヤ敎の風習に根據を有することで、何の不思議でもないと言つてゐる。實際は何の變哲もないやうなからうした例を非ユダヤ人がスピノーザの生活を讃美する（キリスト敎的意味に於て、と筆者は嘲笑する）ために利用するのは、だから全く當を得てゐない。

しかしこの本が我々に與へる最大の啓示は、スピノーザの學說のユダヤ的性格に關するユダヤ人ヨーゼフ・クラウスナーの論文であることは疑ふ餘地がない。同論文には、スピノーザはデカルトやジョルダーノ・ブルーノーよりも中世期のユダヤ人哲學者に遙かに强い影響を受けたといふことが强調指摘されてゐるが、それと並んで、中心思想として次のやうな論證がある。――

スピノーザの學說の根本要素として、左の要因が擧げられる。「神か自然か。」――これは元來「反神論」であるとクラウスナーは言つて、更らに論を進める。「人間の靈（ゼーレ）は肉體の觀念（イデー）に過ぎない。」――これは「唯物論」であるとクラウスナーは言ふ。「自然には目的なく人間にあつても目的はない。」――これは「機械論」である。「自由意志はない。」――これは「決

定論」である。「善惡はない。」――これは「功利主義」である。「法は力に他ならぬ。」――これは「マキアヹリ主義」である。

今度は、今しがた述べたユダヤ精神の啓示が爲されるのだが、我々にはそれは殆んど信ぜられないほどだ。卽ちクラウスナーは、上述のやうにしてスピノーザの學說の礎石を規定した後で、全く有頂天になつて次のやうに言葉を續けるのである。――「而も實に不思議なことには、すべてこれ等の缺陷ある要素が發展して最後にはそれと正反對のもの、卽ち世界に比類なき觀念的にして實證的な世界觀を生ぜしめる。」

この言葉を聞くと、小さなユダヤ人が壺を手の甲に載せて扉から持出すのが見えるやうではないか。そのユダヤ人は我々を滿足げに嘲笑するのだ。氣をつけて見てゐない者は、その男が罪を犯したと考へるかも知れない。しかしその男はうまく壺を運び出してゐながら、而も法律に違反しなかつたのだ。スピノーザは無神論者で、唯物論者で、機械論者で、決定論者で、功利主義者で、マキアヹリ主義であるが、それにも拘らず法を守り、我

我にこの世で最も高貴な宗教的世界觀を贈つたのだ。

この世界觀が何であるかも、上記の記念文集に各方面から詳しく示されてゐる。「自由、平等及び同胞愛は、スピノーザの言ふ意味に於て實現しようとしない限りは、永久に到達出來ない理想である。」とユダヤ人の編輯者は書いてゐるし、前名は東ユダヤ人ハルペルン、ワルシャウのイグナチー・ミスリッキーはこれを補つて「スピノーザの全學説は人間性の雛型としての人間の觀念(イデー)を作ることに存した。」と斷定してゐる。人間の觀念(イデー)、それはユダヤ人コヘンの目的でもあつたではないか。かくて、コヘンとスピノーザとの間の意見の相違は、タルムードの到る所に見られる、同種類の二人の律法學者(ラビ)の爭ひに他ならぬことが露呈せられるのである。結局に於ては、彼等は一致してゐる。中世期のユダヤ人哲學者マイモニデスの言を聞いてみよう。彼は言ふ。「如何なる人間も、我々の師モッシェのやうに正しい者であらうと、イスラエルの王エローバムのやうな瀆神者であらうと、何れでも構はぬ。賢明であらうと偏狹であらうと、慈悲深からうと殘忍だらうと、吝嗇だらう

と高貴だらうと、何れでも構はぬ。その他の性質も皆この通りだ。」これも「人間の觀念」しかも、タルムードに相應しい人間の觀念である、タルムード化された人間――ユダヤ人は移住民族をからいふ形式に當嵌めて觀たのである。この形式によつて、ユダヤ人は自己のメシア主義的希望に現實性を與へようとするのである。

實際、マイモニデスに初めて純粹な理性宗教の思想が現れてゐる。しかしそれは彼が同時に律法書の熱烈な信奉者である妨げとはならない、といふことを今ではもう我々は不思議と思はない。トーラ研究は、マイモニデスに取つてはこの世で最高のものだつた。先づ年少のトーラ生徒に榛の實や無花果をやつて勉強するやうな氣持にし、次には立派な靴を呉れるぞと言ひ、その次には一デナール（古代羅馬の貨幣、邦貨約三十錢譯者註）か「または二デナール」を當てがひ、その後では、自分は堂々たる律法學者になれると思ひ込ませて勉強する氣持にする。しかし最後にはその生徒は最高の生活目標に、即ちトーラをトーラそのもののために研究するといふ目標に到達する。タルムードに就て私が言つたことを思

ひ出すならば、諸君はこれが何ういふ意味なのか恐らく或る程度想像出來るであらう。とにかく、かうしてユダヤ賢者が生れるのであつて、マイモニデスはその特質を物々しく次のやうに記してゐる。「賢者はその智慧やその性格を見ればわかり、それによつて他の民衆と區別されるやうに、その行爲、飮食、結婚生活、用便、言語、步行、衣服等によつても識別されなくてはならぬ。」

だが我々は狹量であることを止めよう。ユダヤ哲學には、實際高貴な所もありはしないのか。ユダヤ的神秘主義といふものはないのか。スピノーザは結局かうした神秘主義者ではないのか。

これ等の問題を詳しく論ずることは、此處では餘計なことであらう。私はある一つの專實に諸君の注意を促して、これを全般の象徵たらしめようと思ふ。スピノーザに取つては、喜びとはより大きな完成へ移り行くこと、從つて神に近づくことである。悲しみとは原則としてその反對物である。そして彼が感情を如何に知性化してゐるかは、次のやうな

學說から明かとなる。即ちそれは、人がある事物を理解するのは、その事物を己れ自身の否認し、己れ自身の欲したものと考へて、それに對して自由とならんがために他ならぬ、といふ學說である。實にこの點にこそ、典型的なユダヤ的心的態度が現れてゐる。即ち、情緒から切離された冷靜な知性の助けを借りて己れの惱みを遠ざける態度である。

　惱みは完成に到らしめる最も速い駿馬である、と言つた眞の神秘主義者マイスター・エックハルトの言葉から輝いてゐるものは、これとは全く趣を異にしてゐる世界である。また、貧と惱みと憂ひとを三人の友と言つたヒットラー總統の言葉も、まことに異る響きを持つてゐる。だから、このやうな意味で喜びといふ言葉が高唱せられるのと、それをスピノーザが口にするのとでは、別個の事柄なのである。

　それ故、ユダヤ主義の神秘的性質を有する一支流たるいはゆる敬虔主義（カッシディスムス）がその教義の中心にこの喜びといふ概念を置いてゐると言はれてゐても、我々は直ちに我々が喜びと名づけるものを想起してはいけない。そして、イザーク・ルリヤと十七世紀に敬虔主義（カッシディスムス）を創始

したバール・シェムとが彼等の最奥の秘密を、敬虔主義的ユダヤ教で必讀の書となつてゐる「光耀篇（ゾーハル）」に負ふと稱してゐても、我々はいよいよ警戒するのである。全くタルムード化した新プラトン主義的神秘主義の現れであるいはゆる、「猶太傳說（カバラ）」中の主要篇は右の「光耀篇（ゾーハル）」である。かくて猶太傳說（カバラ）から敬虔主義（カッシディスムス）が生ずるのであるが、この敬虔主義はまた、ユダヤ人の證言するところによると、フランスのユダヤ人ベルグソンの人世哲學の基礎となつてゐる心的態度を形成する。

結論

しかし神秘主義的猶太傳說（カバラ）にしろ敬虔主義（カッシディスムス）にしろ、タルムードにしろ、トーラを信ずるにしろ、自由にしろ、フィロンにしろ、マイモニデスにしろ、スピノーザにしろ、コヘンにしろ、フッセルにしろ、ベルグソンにしろ、マルクスにしろ、ジークムント・フロイト

にしろ、アルベルト・アインシュタインにしろ、何れにしろ、たゞ一つのユダヤ哲學があるだけだ。

偉大な作曲家フランツ・リストはそのファウスト・シンフォニーに於て天才的な考へを凝らし、ファウストの本質を幾つかの立體的なテーマで現したが、メフィストフェレスの本質を現すには、メフィストフェレスは獨自のテーマを有する能力がなくて、ただファウストのテーマをある一定の方向に歪めて不協和音にすることしか出來ない、といふ方法を用ひた。そのやうにユダヤ哲學も一つとしてテーマを有せず、偉大なアリアン人種の哲學のあらゆるテーマをタルムード化したのであつて、この點にこそこの哲學の實體なき存在の特質が存する。

グレーツが、絹織商店の手代でありながら哲學を「人間の住居に導き入れ、動的なものとし、樂しいものとした」人と言つて讃辭を呈してゐるモーゼス・メンデルスゾーン——このメンデルスゾーンの時に、獨逸的思惟の力強いシンフォニーに不協和音が増え始め

た。それは生長に生長を續けて、遂に十九世紀の末には不協和音がすべてのものの上に氾濫し、ファウスト命題は變じてメフィストフェレス命題となつた。今ではユダヤ人は數の上で殆んど信じられない位夥しく獨逸哲學に侵入したのみでなく、——私は諸君に二百人の名を擧げることは出來るが、それを數へ立てることは此處では容赦を願ひたい——否それのみでなく、彼等はありとあらゆるテーマを決定的に掌握した。彼等は如何なる流派にも、如何なる部門にも重要な位置を占めた。そして不協和音が今では耳を聾せんばかりなので、大概の獨逸系の者もその音に和し始めた。

今日我々はユダヤ人の手から樂器を奪ひ取つた。しかし不協和音はまだ空中に漂つてゐるし、この旋律に和し續ける者も依然として見受けられる。我々は彼等に假借なき戰ひを宣する。何故なら我々は、本來の美しいテーマ、即ちタルムードを脫した我々の哲學のテーマを再び開きたいからである。

しかし我々の望みはこれだけに止まらない。我々は古いテーマを一つの新しいテーマに

昇華させたい。このテーマは非常に高貴であるから、メフィストフェレスもそれから手を退かねばならないだらう。

プブトンにはフィロンが、アリストテレスにはマイモニデスが、デカルトとジョルダーノ・ブルーノーにはスピノーザが、ニュートンにはアインシュタインが、カントにはコヘンが、ヘーゲルにはマルクスが、ニーチェにはジークムント・フロイトが附隨してゐたが、我々の國民社會主義の哲學は我々の人種の本質の明瞭な濁らない姿を反映するので、ユダヤ人はこの哲學に手を觸れることは出來なくなるだらう。

ナチス黨
人種政策局長　ヴルター・グロース博士

人種政策教育

教育の仲介者的役割

精神史の發展に於て、何かの新しい思想が現れ、しかもこの思想が純然たる抽象的・理論的思想ではなくて、何かの實踐的歸結を齎し得るものである場合には、常に三つの異つた發展段階が觀察されるであらう。

第一には、一定の認識へと導く研究である。第二は、この新たに獲得された精神財から實踐的歸結を引出し、かくてこの新たな科學的認識に從つて、例へば立法とか公的生活に於ける何かの施設とかに新たな形式を與へたり、或はそれを新たに創出したりする仕事に取りかかる世界である。そして、その內的本質を甚しく異にするとの二つの大きな任務圈の間に、兩者を仲介する第三の任務圈が在る。即ちこれは新たな認識の教授と學習の分野であつて、研究の場所とその場所の外にある實踐界に於ける實施の場所とを仲介し、同時

にこの教育の學校を修了した多くの人が夫々仕事を爲すに當つて、新たに發見され、且つ差當つては純粹に理論的である上記の認識を實際に應用することを可能ならしめるために、種々の便宜を與へる。かく仲介を爲すこの中間分野を、我々は先づ差當つて——後にもつと精しく定義しなくてはならないだらうが——簡單に「教育」といふ言葉で包括したい。

從つて我々は、この特殊の意味に於ける教育は、一の中間物であつて、認識乃至研究と他方その應用との間の仲介的役割を爲すに過ぎないことを知るのである。それは丁度、我々が何處かの學校や大學で受けた我々に最も密接な教育が、後日學校外の實生活に於て、他の側から見出され・研究され・認識された事柄を我々に近づけ、我々が實際生活に於て應用を構ずることの出來る如き形式で、それを我々に與へることに役立つのと同樣である。

今日一般的意味に於ける人種政策教育を論ずる場合、それも上述のやうな仲介的役割のことである。即ち、研究の場所と、その場所の外にある實踐界に於ける應用との間の中間物のことである。何故なら、新たな人種問題といふ全複合體のこの二つの部門は、無論こ

の人種政策教育といふ領域に於ても區別さるべきものだからである。何處かの靜かな研究室とか、實驗室とか、研究所とかで遺傳（例へば病氣其他種々の遺傳）といふ生物學的現象の原理が認識されねばならなかつた。最初其處で發見・研究・理論的研討・實驗が爲されねばならなかつた。かくてこの純粹認識及び純粹科學の分野が生じたのである。しかしこの領域に於ても、問題となつてゐるのは、抽象的な、人生から分離された事柄ではなくて、實に人間及び民族の生ける生活そのものと直接關係のある事柄なのである。であるから、次には何時かこの認識の世界から一の實踐が、民族と個人の日常生活に於ける歸結が、生じるに違ひない。かやうな實際的方策への轉換は、例へば、以前に研究された生物學的認識から實際上の歸結を引出す立法の如きものである。

一例を擧げよう。――一方に於て我々は研究を爲し、人間の有用性と能力とを阻害する・遺傳的性質を有する疾病と素質とのあることを確定する。これは研究の理論的・科學的確定である。次いで他方に於ては、例へば今日遺傳的疾病ある子孫の防止に關する法律

とその諸規定及び適用に現れてゐるやうに、かやうな理論的判斷の實踐的歸結や實施がある。さて、我々が如上に於て一般的に主張した通りに、この領域に於ても教育は仲介的役割を演じ從つてこの意味に於て從屬的な、單に交換する役割だけを演じたと見做すことは當然である。また、次のやうに言ふのも當然である、――人種政策教育の任務について、今日繰返し殊更に語つたり書いたりする必要はあるまい、專らこのことだけを取扱ふ特別な部署は必要あるまい、要するに、諸君が既に得た研究財や思想財を手つ取り早く教育といふ大きな仲介過程に投込めばたくさんだ。植物學とか、動物學とか、史學とかの成果や認識が各種のあらゆる層の教育機關に開放されると全く同樣に、此處でも生物學者とか優生學者とかの研究し認識したものは、早速學校の教師に開放されなければならない。するとその教師はそれを仲介し、教育といふ中間分野を經過させるのである。するとまた他方に於ては、それは實際的方策又は實行可能性として實際に働きかける。かくて結局、特にこの問題を取扱ふ官廳や部署は抑々無用のものである。――

民族を滅ぼす三要因

上記に於て差當り總括的に「教育」と稱ばれたものは、新ドイツの人種政策の領域に於ては、我が國の國家生活や經濟生活や精神生活のやうな、その他の場所に於ける教育問題ゞ訓育問題の有する位置と全然異る位置を占めることを我々は知るのである。しかしとれを論ずる前に、我々は出發點となる材料に、卽ち我々の教育事業が緒につく時に先づその基礎となるべき研究の認識と確定事項とに、極めて速かに一瞥を與へねばならない。この場合何も眼新しい事を言ふことが私には出來ないのを、私は知つてゐる。ただ、問題となる決定的な確定事項を、全然表面的に、且つ全然實踐的方面から把握して、この場合今一度記憶に呼戻すことゝだけが必要である。

この領域に於ける我々の科學と研究との確定事項を觀るに、ドイツ民族の存立、從つて

その國家と經濟との存立も、今日危殆に瀕してゐる、と言はざるを得ない。その存立が危殆に瀕してゐる唯一の理由は、一般に史上に於て國家や民族を重大危險に曝すことのあるものである。卽ち、この理由は、ドイツ民族の生物的實體は、簡單にその「人種」と稱ばれてゐるものが、涸渴に向つて進まうとしてゐることとである。この地上で、嘗つて强力だつたことがあるが、その後、滅亡してしまつた昔日の民族は決して經濟的、又は政治的破綻によつて死滅したのではない、といふことを我々は知つてゐる。戰爭に負けたり、凶作だつたり、或はその他の經濟的又は國家的破局に遭遇したりしたために滅亡した民族はこの地上には一つもない。しかし、民族生活・史的生活・國家生活・經濟生活の實體が、卽ち血液と人種、或は人間そのものが凋落に向ふ時には常に、そしてただその時にのみ、民族は滅亡したのである。過去に於て、印度とか、波斯とか、希臘とか、羅馬のやうな互に無關係な多くの場所で强大な文化民族の滅亡を招來したのと同じ現象――この同じ現象と同じ發展とを、我々は我がドイツ民族とその他の西歐諸民族の中に、多少の差こそあれ、數

十年來經驗してゐる。

私は、かやうな民族の滅亡を齎す三つの過程を直ぐに記憶に呼戻さう。第一には純粹に數的減少、卽ち數の減退であつて、これは先づ最初に成長度の强い隣接民族に比して民族力の弱化を招き、かくて兩民族の自然的な力の關係を移動させて、數的に弱くなる民族が、恐らく內面的優越はあるかも知れぬが、それにも拘らず、數的に强い隣接民族に遂に必然的に壓倒されるに至るのである。第二の過程は數的强さや增加とか減少に關はりないもの、卽ちこの民族の內部に於ける遺傳的價値の移動である。それは單に平均的に過ぎないか、或は平均以下ですらある才能や、性格素質や、肉體的及び精神的能力の膨脹と、それに比較して、平均以上の價値を有する者の層の減少である。但し「價値を有する」とか「價値僅少」といふ言葉は決して知的尺度によつて測られるやうなものではなくて、此處では我々すべての者が日常生活に於て解釋してゐるものと解さるべきものである。高度の才能があり知的ではあるが、その他の點では性格的に無賴の徒で、肉體的には虛弱者であ

る等々の人間を、我々は斷じて價値高いとは言はないで、却つてその逆の側にあると見做す。そして、單に普通の平均悟性を有するだけの者でも、肉體的・精神的＝性格的素質の如何によつては、全體として見れば、國民に取つて遙か平均以上の價値を有することがある。しかし原子價は何處に於ても同じではないのであつて、今ある民族に於て、遺傳的理由から全體として僅少な價値が置かれてゐる部分が他の部分に比較して數的に增加し強くなるとき、この後者の部分だけでは價値多いとしても、結局全民族の價値は低下し、從つて內外に對するその強さ、國家的及び經濟的仕事の可能性ばかりでなく、精神的及び宗教的仕事の可能性も低下する。遂にその結果かやうな民族は、その數は不變であるか、或は恐らく增殖すらしても、その國土の內部に於て全く異つた民族となる、卽ち衰亡に向ふのである。——史上に於て民族を滅ぼして來たし、またそれが何時何處に現れてもその都度民族を滅ぼすに違ひない第三の過程は、他の人種成分との混淆である。古代の偉大な民族が滅亡した原因の中で尤なるものは、彼等が人類の絕對平等を信じて、彼等の國境のみで

なく、彼等の家や彼等の家庭の門戸をすら、血液を異にし人種を異にする人間に開放し、かくてこれによつて生じた雜人種には、何れかと言へば純人種的で混血せざる民族協同體に常に價値と强さとを永きに亘つて與へる唯一のものが、缺除してゐたことであるが、これは周知の事實である。これ卽ち各人に於ける肉と靈・精神と性格の調和である。

ある民族の個々の成員の價値は、その民族自身から生じて專ら人種と結びついてゐる尺度によつてしか評價され得ないが、それと同樣に、他方に於ては、人種的な單一的素質が最早や優越も現存もしなくなつた民族は、一般に價値を創出したり價値を表したりすることは出來ないのである。また、リビア人とか、羅馬人、波斯人、希臘人、埃及人、更に恐らく地中海岸に達した印度人——我々は地中海岸に於ける民族混亂の時代を念頭に置いてゐるのだが——のやうな個々の雜種は、恐らくそれ自身だけでは、またそれ自身の中では、一つの價値を現してゐたので、甲の民族は乙の民族より價値が大きい、と云ふことは出來ないのであるが、他方に於て、これらの民族がすべて雜然と接觸し合つて無に歸する

と、も早やかやうな諸要素の並存や上下存はなくなつて、個々人に於けるその混淆が生ずるといふことも同様に確かである。しかしその場合には、混入されたすべての價値は結局に於ては相互の對立によつて內面的に止揚され、遂には精神の領域に於ても混沌が生じ、民族の破滅が生ずる。過去の諸民族は、數十年又は數百年間の彼等の衰微の間に、人種的素質と民族の內面的價値との間のこの關係を大いに意識するやうにはなつた。「顏が醜くなると、風儀も紊れる。」といふ羅馬の格言があるが、結局これと同じやうな意味になる諺が、舊世界のありとあらゆる場所から相次いで現れた。この言葉は民族の旣成の道德や慣習一般の衰滅と肉體的な從つてまた精神的な狀態の崩壞との間には深い內的聯關があるといふ認識を表現したものに他ならぬ。

以上三つの過程——數の量的減少、民族の遺傳的價値の質的惡化、特に、混淆する兩人種の有用にして價値ある素質がその都度交錯し破壞される樣な事態を結局に於て齎す他人種との混淆——この三つの過程が過去に於て民族を破壞したものであり、我々はこれが今

日三つとも我がドイツ民族の中に數十年來、部分的には數百年來、經過しつゝあるのを見るのである。我々は次の事實を知つてゐる。卽ちドイツ民族の數的發展は、從來常に明かに出生超過であつたし今日もなほ出生超過なのであるが、それにも拘らず旣に最大の憂慮を抱かせるといふことゝ。出生數は一八七六年以來殆んど不斷に減少しつゝあること。この減少は一九〇〇年以來極めて急激なものとなつてゐること。第一次世界大戰時に出生減退が頂點に達した後の出生曲線は、一九一三年に停止したと略同じ點に一九一九年に再び歸つて、今日ではなほ一層急激に下降しつゝあるといふこと。そして我々は今年（一九三四年――譯者註）民族のかやうな發展に大きな轉換が生ずる點に到達してゐるといふことである。この點とは、從來の過程が繼續するか――その場合には零の線以下に達することとなり、出生超過の終熄と人間の數の減少の開始とが生じ、從つて實に人口の減退が生ずることとなる――、或は從來の發展に轉換が起り、かくて數を維持し、從つて未來を維持する可能性が我々に與へられるか、その何れかになる岐路である。

我々の出生減退の發展の理由と性質を知らうと努めた者はすべて事態を重大視して決して樂觀しないといふことと、またその人々が愁はしげな眼眸で未來を概觀したのは道理のあることだといふことを、諸君は知つてゐる。かく未來を概觀すれば、抑々次の事を明かにすることとなるのである。卽ち、我々青年がまだ經驗するであらうと思へる時期に、つまり四十年乃至五十年を經て、ドイツは數的に今日の額の約三分の一に減退してゐるであらう。從つて恐らく今日のポーランドの人口數位になつてゐるであらう。しかるに例へばこのポーランドは、略今日位の出生指數を維持してゐるだけでも、上記と同じ期間に今日のドイツの人口數にまで增加するであらう、といふことである。かくてこれの意味する所は、この兩國家は、純粹に數のみについて見れば、簡單にその役割を交換してしまつて、强國ドイツは存在することを止め、ヨーロッパの中心にあるのは一の小屬國に過ぎないといふことになり、その屬國は、甚しく膨脹してその國土の中には最早や住むべき餘地のなくなつたポーランド民族によつて否應なしに壓倒されるに違ひない、といふことである。

ドイツの東部國境や人口稀薄な東部諸地方に加へられるかやうな壓迫が今日既に大きいことは、周知の事實である。この發展の意義も明かであるが、此處では目的意識的な政治がその據るべき規準を探さねばならず、我々はこの發展を防止するためにはこの規準を先づ科學的に研究しなければならぬ、といふことも同樣に明かである。

これは、我々が取扱つてゐる問題に關する科學の第一の認識である。第二の認識は、民族が死滅する原因となるあのもう一つの過程に關するものである。卽ち、平均的能力と價値とを凌駕する者が數的に後退するに對して、單に平均的な——否、平均以下の價値すら有する遺傳系統の增加である。この背後には如何なる理由が潛んでゐるかといふこと、自然淘汰の偉大な法則を人間の世界に適用しなくとも罰せられずに濟むし、あの慘酷で假借しないが非常に正しい・敢て言へば神聖な・自然に於ける事物の秩序を破壞しても差支へないと考へたのは人道主義的で自由主義な精神の當然の結果であつたといふこと、かういふことをこの團體で立入つて論ずることも私には出來ぬし、またその必要もない。

上記の秩序といふのは、少くともある程よい平均に達してゐないものは事毎に驅除されるといふことと、平均を凌駕するものだけが自然・動物界・植物界・原始的な人間界の生活に於て、特に自己の存在を貫徹するといふことに、その本質を有するものである。我々がこの秩序を平等説によつて思想的に破壊したことを、諸君は知つてゐる。この平等説は最早や何の差別といふことも知らず、また知ることを許されもせず種々の人間の間に存する價値の相違を周圍世界の・環境の・外的要素に還元し、かくてこの相違を瑣事と見做すのである。このために、實際に民族生活を指導するに當つて、自然が妨げられることとなしに自ら事物を形成する場合に創り出すのと正反對の過程が生じた、といふことをも諸君は知つてゐる。つまり我々は數百年數千年を通じて、事毎に最上にして最高の價値ある若き人間材を滅ぼし、その反面に於ては、恐らく維持される價値がないばかりか自己自身を維持する能力すらないものをして、この數百年の間にいよいよ人爲的に生命を保たしめ、そ

れのみでなく人爲的にそれを傳播させたのである。
私は例へば數百年以來の、特に近代の、戰爭の有する未曾有の淘汰の意義を指摘しよう。卽ち戰爭は、生物學的に見れば、一つの無限の淘汰過程に他ならず、この過程では、民族の男性の部分の內部に於て最も價値あるものとして選ばれた者は早期の滅亡に陷ること最も少いのである。しかし近代の戰爭のかやうな一回的な・偉大な・震憾せしめるやうな經驗の他に、日常生活の數百數千の他の過程もかやうな淘汰の意義を有することを、私は指摘したい。私は、七千萬のドイツ國民に比べると數的には僅かな役割を演ずるに過ぎないけれども、例へば危險な職業について考へてみよう。何處かで一年の間に若い・價値高い飛行家やスポーツマンや漁師が不慮の死に遭ふのが僅か百人に過ぎぬとしても、これは簡單に七千萬人中の百人といふわけではなくて、國民中で肉體的にも精神的にも、そして通常性格的にも特に優れた部分の中の百人である、といふことを考ふべきである。そしてこれが一年に一回でその後再び決して無いといふのではなくて、毎年數十年數百年を通

じて絶えず繰返され、加ふるに何處かで戰爭とか、我々が十四年の間といふもの經驗して來たやうな血醒い騷擾を伴ふ政治的鬪爭がこの過程を支持するのであるから、早晩否應なしに、國民中の最良の部分が絶えず數的に、しかも通常まだ子孫を儲けるに到らない年齡で減少する、即ち永久に人生から去り、國民の遺産から去ることゝなる。しかるに他方に於てはドイツ民族には甚だ價値低い素質が最近數十年間に威嚇的に增加しつゝある。健全なドイツ人の家庭には平均して實に可笑なほど僅かな子供の數があるのに反して、惡質遺傳のある家庭や白痴の家庭は平均三人、四人、五人にも達する數の子供を有する。これは無論、價値の僅少な兩親の素質が繁殖することを物語るに他ならぬ。かくて次の世代に於てはこれら兩群の間の關係は更に甚しく移動する。

現在一定の數の平均的な・健康な・有用な人間がゐて、比較的少數の不幸な惡質遺傳者があるとするならば、次の世代、次の次の世代、そのまた次の世代に於ては、この關係は異つたものになつてゐるであらう。然り、これが最近數十年間に我々の經驗したやうな速

度で百年間も續かうものなら、そのときは、純理論的に言へば、かやうな民族は――可笑く聞えるかも知れぬが――全くもう白痴や飲んだくれや懲役人の子孫だけから成つてゐるといふやうな時が實際やつて來るかも知れない。これもまた、――多くの本や、集會や、講演や講習會や、講義で明かになつてゐるやうに――個々の素質や住民層について一々精しく證明することとの出來る認識である。この認識は、最初は純粹に抽象的=理論的な性質のものだつたが、實際方面では、例へば遺傳疾患子孫防止法となつて今日運用されてゐるやうな處置を要求するに到つた。

先に述べた第三の過程は、全然疎遠な人種成分の人間との混淆である。昨年の經驗によつて、我が民族に於けるかやうな異人種との血液混淆が既に如何に強くなつてゐるか知られてゐる。それは元來七千萬同胞に取つては、僅か一少部分を成すに過ぎないとはいへ、非政黨官吏制度復活に關する法律と事務所に於けるアリアン人種對ユダヤ人關係法規とを實施するに當つて、我が民族への異人種的血液要素の侵入が我々の夢想だも及ばないやう

に進展してゐたことが確認され、我々を震憾させた。これの意味するところは、他ならぬ我が民族の調和や全體構造も肉體的・精神的・靈的・性格的にその內部に於て腐敗し初めてゐるといふことに他ならぬ。蓋し人間や家族、個人或は全集團に於て二つの靈が胸中で常に互に相闘はざるを得ない場合には、その結果生ずるものはたゞ不安と分裂のみであつて、民族に力を、國家に未來を與へるやうなものではない。次いでこの認識から生ずる歸結は、旣に述べた立法の仕事であつて、これがあらゆる法律規定によつて將來に於て異人種的血液が續けて浸潤することを不可能にするように試みるのである。

廣い意味の敎育・宣傳

かく我々が以上の事を急いで想起しなければならなかつたのは、一方に於て如何なる認識が問題になつてゐるか、他方に於ては如何なる實踐的結論が生ずるか、といふことを明

かにするためであつた。今や我々は、かやうに我々すべての者と今日の國家とに對して存することの課題全體に取つて、我々が前に「教育」と名づけたあの中間領域は如何なる意味を有するか、といふ最初の問題に立還らう。先づ、此處で今日上述との聯關に於て我々は何を教育と解してゐるか、これを明かにしなければならない。此處で問題となつてゐるのは、教育學に關する諸問題ではなくて、全然新たな・一回的な・初めて我々の生活に入つて來た領域である。

人種問題は從來まだ何處にも存在したことはなかつたし、まだ何處でも取扱はれたことがなかつたのである。私がこれに關聯して、此處での我々の間だけでの自家用として、教育といふものを、例へば教育學の用語で普通に用ひられてゐるやうなものよりもつと、遙かに大きいものと、幾分獨斷的で簡單ではあるが、解釋することを諸君は許さなければならない。我々は、今夕のこの講義に於ては、我々が此處で出發點とした思想の意味に於て人間に現に影響を有するすべてのもの、人間を精神的に把へ襲ふすべてのものを直ちに教

育と解する。これと關聯して、我々は教育といふ言葉を非常に廣く解釋する。性格價値を成長させようと試みたり、知識や認識を授けたりする場合に學校で爲されることを教育と解するばかりではない。更に我々はこの教育といふ言葉のもとに、今此處では、その他に最近十年間に大部分他ならぬ我々自身の實際活動によつて我々に極めて馴染深いものとなつた事柄をも包括する。それは卽ち宣傳と宣傳的處置との廣汎な全領域であつて、これは固より個人や全體に影響し、結局に於ては個人や全體を教育するものなのである。我々が次のやうに言ふのは自ら明かである、——我々が述べて來たやうに、かやうな新たに發見された人種政策的及び人種生物學的な諸問題は專門家のする仕事や閑暇な時にする仕事ではなくて、實際に民族生活の基礎に觸れるものであり、國家に强さと偉大さとを與へたかと思へばまた國家に死と滅亡をも與へたものを取扱ふものであるとするならば、これらの問題は、無論何處かの靜かな研究室とか實驗室とか大學附屬病院とかで見出されたとしても、我々すべての者に關はつてゐるといふことは明かである。

何故なら我々すべての者は民族であつて、この民族に取つては國家は世界に對する外套の役割を務めてゐるからである。それで、この教育といふ領域には、科學的事象や實踐的歸結の作製やに極めて疎遠な立場にあつても、獨逸民族同胞の最後の一人までも何等かの仕方で關與しなければならないのである。それ故我々は教育といふ言葉を今は全く廣い意味に把握し、昔から今日まで幾らか冷遇を受けてゐたもの、即ちあの宣傳的要素、あの煽動的要素をもこれに包含させる。市民社會が從來宣傳家に爲して來たし、なほ今日も爲しつつある非難の言葉を諸君は知つてゐるであらう。それによれば、宣傳家は元來眞摯重大な事柄を瑣事と見做し、歪曲し、皮相なものと成す、といふのである。また他方に於ては、宣傳家は民衆を便嗾し、結局は抑々無價値で惡質な大衆暗示を行ふに過ぎない、といふのである。無論これは誤りである。かやうな煽動行爲や宣傳行爲の價値は斷じてそれ自身の中に在るのではない。何かの目標のためや、ある目的を達するために、大仕掛けな暗示的方法すらも意識的に使用されるといふ事實は、事實そのものとしては善くも惡くもあ

ろものでない。善悪のあるのはその場合問題となつてゐる目的であり、我々がこの宣傳の仕事に從ふときの個人の意志であり、心情であり、思想であり、純眞な心からか、それとも利己的な惡い考へからか、といふことである。——ある宣傳自體の價値無價値、善惡、を決定するのはその宣傳の本質だけではない。

民族衰亡の對策

かくて學校や大學に於ける、また官吏・將校等々の試驗課程や補修課程に於ける、特殊訓練とか遺傳生物學や優生學の敎授ばかりでなく、宣傳をも包括するとの敎育の全領域は抑々研究と實際的應用といふ大きな他の二つの領域の間に如何なる地位を占むるか、と考へるとき、——自らとの領域に於て宣傳または訓育に從事してゐるか從事しようと思ふ極めて多數の者が全然氣づかなかつたある注目すべき事實が生ずる。卽ち、普通一般に研究

と實際的應用との間に一の仲介者的役割を演ずるこの領域が、此處では忽ち全く特殊な積極的意義を持ち、事物の實踐的形成そのものへと成長する。我々が過ぐる十年間に爲して來た政治に於ける宣傳・訓練・教育・教化といつたやうなものは、目的のための手段であつた。卽ちある目標に到達するための道具に他ならなかつた。その目標といふのは、政治權力の掌握によつて國家と經濟とを形成する可能性であつた。政治權力の掌握といふこの目標に到達するために、强引に宣傳・煽動・訓練・教育の時期が先づ設けられた。この時期は、この力强い裝置を作り出して運用する者に、それが實際に効果を發揮する可能性を與へるのに役立たねばならぬとされた。——しかし、人種政策の領域に於て教育・宣傳・訓練を爲すと我々が今日言ふ時には、これは最早や目的のための手段ではなくて、目的の一部である、恐らく最も重要な一部ですらある。

このことは、上述した人種政策に關する根本的認識に基く實際的仕事の達成すべきもの、また達成することの出來るものは抑々何であるかを熟考すれば、直ちに明かになる。

民族は何が原因で死滅したか、――と我々は以前に訊ねた。民族は産兒皆無のために死滅する。價値があるか、或は少くとも健康な層が、他のもつと好ましからぬ部分の産兒數が多いのに比して、一定の差を有して、比較的・相對的に産兒僅少であるか或は産兒皆無であるために死滅することもある。最後に、第三の原因としては、比較的純人種の人間の數が雜婚によつて生じた雜種の數に比して益々減少してゆくためにも死滅することがある。

しかし要するに、以上に共通な形式は次の通りである。――以上三つの過程に於て、民族の生物學的死滅は突如ある世代に、破局といふ姿を取つて一擧にして起るものではなくて、常に數十年か、數百年か、恐らく數千年かを要し、その都度世代の繁殖及び交代といふこの大きな、強力な機構(メカニズム)を通過するのである。かくて諸世代の接合點が、民族の生物學的運命の岐るゝ所であり、其處が、民族の内的力の消長の岐路である。かくて、家族中の幼兒を通過する道は、結局に於て、我々を向上せしめもすれば下降せしめもする決定的な道である。そして、前に簡單に述べた危險を見て、差迫る國民の滅亡を抑止するに適する

と思へるし、我々を滅亡へではなくて再び未來へ向上せしめる豫防方法を探すならば、我我は常に同じ點に到達する。

我々の一切の方策は、如何なるものであらうとも、また如何なる方面から出やうとも、ただこの一つの點に於て、即ち世代の接合點たる、繁殖と次代の子供の世代の開始との點に於て効果を發揮すれば充分だし、且つそれ以外であつてはならない。しかもそれは特殊な意味、即ち畢竟數的な意味に於ての効果であるが、等しく數的と言つても、民族の有益な・價値ある・向上的な部分が、好ましからぬだけでなく、恐らく、一般に芟除されねばならぬほど有害で、例へば遺傳的疾患ある子孫防止に關する法律の適用を受ける等々の如き他の部分に比し出來得る限り多く繁殖するのを我々は欲する、といふことを條件とする。斷種法を發布するか、俸給制度改革を宣傳したり採用したりして、子供の無い者に多く課税し、子澤山の者には租税に關して特權を與へるか、或はアリアン人種對ユダヤ人關係法規等をかかる場合の一つ一つに適用するか、或は經濟によつて見出され提議せられる

その他のあらゆる可能性を適用するか、その何れであつても、――それ等のものの作用するのは結局同じ點である。即ち健康な・價値ある部分の繁殖と、好ましからざる異人種的もしくは價値僅少な部分の繁殖の阻止である。事實、これが實際の全人種政策一般のアルファでありオメガである。そしてすべてのものは、それぞれ此處其處の一隅に在つても、結局その歸する所はこの一つの點である。これ等の方策の一つ一つがこの點に於て作用すべきであり、もしこの點に於て作用しなければその目的を逸したことになるのである！

消極的方策と積極的方策

しかしこれと共に忽ち他の考へを檢討しなければならない。即ち次の考へである。――家族は尙更らのこと、個々の人間の生活のこの私的な點に有効に干渉することが、一般に國家や社會や經濟に、また誰彼といふことなしに、出來るだらうか？　生命を惠んだり生

命を護つたりすることが必要なとの點に、一般に國家の方策とか、經濟が提議するその他のあらゆる方策によつて干渉し、必要な事を達成することが各人に出來るだらうか？――答へは明瞭である。曰く否、それは國家には出來ない。國家はそれを積極的な側から爲すことは出來ない。國家はそれを專ら消極的な側から爲し得るに過ぎない。卽ち國家は遺傳系統や血液の流れにある好ましからぬものを芟除し、斷種するか隔離されねばならぬものを斷種したり隔離したりし、或はまた、雜種の家族から生ずるものを大いに抑壓してこの家族が繁殖の決意をすることを抑止する。しかし、我々のあらゆる未來の唯一の基礎であるところのもう一つの事、我々が達成しようと思ひ、そして――上記の消極的な方策は幾ら成功しても――一般により善きものへ向上發展せしめ得る唯一のものたるもう一つの事、――卽ちこの問題の積極的な方面は、國家も、經濟も、學者も、組織も、その機械的な手段によつては斷じて達成することが出來ない！　何故ならこの任務といふのは、實際に人間を、卽ち男女を、そして家族を、強要して、國家の意志通りに子供を產ませるために

用ふる手段を發見す、といふこととなるからである。それは成功しない。何故なら、かやうな强制を行ひ、何かの法律的處置によつてこれを規定したり規則に定めたりしようとする試みは、悉く實際に當つて挫折するばかりでなく、精神的にも涯しない反抗を惹起するからである。我々が此處でただ道德的な强制を行はうとするだけですらも、忽ち各人の（婦人は男子より激しい）健全な本能の如きものが反抗し、かくて我々は、眼先にちらついてゐるものを獲得するどころか、自分で作つた人工の壁にぶつかるのである。

それ故、我々が此處で我々の國家による人口政策と人種政策の限界を自覺することが重要である。人種政策に關係のある立法の巨大な機構は、固より今日徐々に建設され運用されつつあるけれども、常にただ次の一事を爲し得るに過ぎないのである。即ちこの機構は、子供を持ちたいといふ意志が健康で、價値高く、且つ將來性ある家族に於て實現されるに必要な外的な組織的經濟的前提を作り出すことが出來る。しかし我々の人種政策關係立法の巨大な全機構は、子供を持ちたいといふこの意志が最早や無いやうになれば、忽ち

無意義且つ無價値なものとなる。

かくて次の問ひは國民に向けられた最後の決定的問ひであつて、國民の未來を直ちにトするものである。曰く――この國民は健康で自然的であるか？ この國民の中で民族の未來が依據してゐる部分は大いに土地に親しく、生命豐かであつて、健全な生活の本能に從ひつつ偉大にして幸福な未來を打建てるのか？ それとも、さうではないのか？ もしさうでなければ、すべては無益である。單に國防政策的＝經濟的なもののみでなく、我々が今日人口政策に於て立法によつて行ふこともまた無益である。

人種政策教育の任務

以上によつて我々のあらゆる人種政策的處置の決定的な箇所が示されてゐるのであつて、今や次の問ひが生ずるのである、――例へば人種政策家とか政治家等として國民に對

ト責任を有する我々は、私が上記に於て提出した問題に好ましい答へを與へるやうにするには、如何なる手段を所有するか？　これに對する答へは次の通りである、――我々が前に「教育」といふ總稱を以て示したもの以外の如何なる方法でもない。（我々は今これに、「國民に對する靈的＝精神的影響」といふ別稱を附したい。）國民の生活肯定的本能が土砂に埋められてゐるのを再び掘起し、過去がその上に振りかけた土砂を悉く除き去るといふ試み以外に、我々の生物學的死をいよいよ近いものとなす今日の狀態を結局に於て超剋せしめる手段はない。それ故我々は上記の答へをして、良心に恥ぢる所はない。蓋し冷靜な科學的觀察が我々に次の事實を教へたからである。卽ち、私が前に述べた一切の破滅的現象の原因は固より何等かの生理的疾病そのものには存せずして、畢竟、敢て言へば一の靈的病患に、卽ち人と自然との間の・人と生命との間の・人と存在（己れの內と外なる宇宙(コスモス)）の大法則との間の・結合を喪失することに存するといふとと、――我々の全然具體的で物質的な人種的衰亡の原因も、個人と民族がその存在と生成の大きな根柢からかくの如く遊

離することに畢竟求むべきである、といふことである。

これが數多の個々の問題に於て發現して來たこと、人爲的に作つた氣分とか反對意見の大がかりな宣傳とかが數十年を通じて常に この國民とその生活との 弱點を衝いて 來たこと、生ける人間のあらゆる原始的な健全な本能が幾多の手段や馬鹿げた方法によつて蔑視すべきものとされ、泥土に委ねられ、その結果、國民中の健康な部分が、かやうな原始的な・從つて結局本然的な・否實に敢て言へば神聖な本能や價値づけに無關心であつた他の部分の者に對して、次第に己れの健康と清淨とを耻ぢ初めたといふこと——以上のことを我々は知つてゐる。

これが出生減退の原因だつたのであつて、この出生減退は略今世紀の初め頃急速度を以ていよいよ國民中の知識階級を襲ひ、固より遂に今日に於ては既に勞働者の最後の家庭へまでも、また農村では農夫の最後のあばら家へまでも侵入して來た。ここに於て次の問ひがあるのみである、——これ等の誤れる價値を、病的で迷妄に導く精神的表象の網と體系

の總てを、紛碎することに我々は成功するだらうか。それとも成功しないだらうか？　そしてその表象下に、生命を保持せしめ得る唯一のものたる人間本然の思惟方法と感情方法とを再發見することに成功するだらうか、或はしないだらうか？――擊破しなければならない一つ一つの思想に悉く觸れるのは、恐らく極端に過ぎるであらう。事態が如何に甚しくなつてゐるかを示すには、二三の思想だけで充分である。

最近二、三十年の間世界を惱ました最も怖るべき思想の一つは、人間と民族の運命は常に所有物に・經濟に結びついてゐる、そしてその當然の結論として、全體の所有物に與へる民族中の人間が少ければ少いほど、個人がその所有物から取つて自己の財布に入れ得るものはそれだけ多くなるのであるから、民族はその數を少數に止めるべきだ、といふ思想である。或は家族といふ小さな圈内では次の通りである。――私に一萬マルクの貯金があつて、三人の子供にそれを分けてやれば一人の子供が夫々三千マルクを貰ふことになるが、もし私に子供が一人しかないならば、その子供が一萬マルク全部を貰ふ。かくて、私

が次の世代に贈る子供に幸福な大いなる未來を與へることとなる。——かうした純然たる物質的な考へはすべて結局常に歸する所は一つで、計算尺が決定力を有し、數學と論理學のために高慢になつた人間悟性が生活の自然的過程の機構に干渉するのである。

かうした考へはすべて、最後には自己撞着をした。その結果が次の通りだつたことを、忘れないようにしよう、——我々を家族や民族中の少數者として未來に贈つた世代は、我々を富裕にし幸福にするものと思ひ込んでゐたのだが、我々の生活の最後に於ては、小さな弱體化した民族としてヨーロッパの敵意ある世界の只中に於て決戰をしなければならぬ破目に、我々を立到らせたのである。平和と安寧の代りに、人間の頭で考へられるところでは、最後には恐らく我が民族に不利を齎す結果となるかも知れないやうな、全く重大な決定の見透しがあるのだ。お前達僅かの少數者が次代に贈られると、家族・氏族・種族・民族の全所有物を少數の者で分配することが出來るので、お前達は富裕になるだらう、——と考へたあの人々、その人々は間違つてゐたのだ！　我々の兩親が仕事を離れて、その

後養老基金、癈疾保險等々から來るもので養はれねばならなくなると忽ち、國民中の少數となつてしまつた下層の上に、勞働能力のない大きな廣い老人の世代の扶養のための社會的給付といふ尨大な負擔の重荷が加へられることを、彼等は忘れたのだ。かくてまた、經濟的負擔輕減の代りにその反對の、我々に背負はされた大きな負擔があることとなる。これはすべて克服されねばならぬ。經濟的考慮を恐らく最高位にすら置く考へそのものを粉碎して、別の、生物學的價値によつて置き代へることによつて、克服されねばならぬ。

これと全く同樣に破壞的作用を爲したので、全く同樣に打破されねばならぬ今一つの思想は次の通りであつた。卽ち、偶像として崇められる時に民族を滅ぼすことのあるのは、啻に物質的所有物だけに限らず、全く同樣に精神的所有物も然りである。嘗て、所有は人を怯懦にする、と言はれた。さて、我々は辛酸多かつた大戰後の時期に、精神的所有物もまた人を怯懦にすることを學んだ。所有物を失ふことを人は喜ばないのである。長年の間に獲得し、將來それを基にして生きて行かうと思つてゐる或物を――物質的なものにしろ、

精神的なものにしろ――持つてゐると、それを危機の時代に危險に曝すことを喜ばず、寧ろ兵站部に退いて、たとへ精神的なものに過ぎないにせよ、その所有物を守るものである。

これは、知識市民階級、特に學徒をして、大戰後の時期や根本的な政治的鬪爭に於て斷念させた現象であつた。彼等は物質の世界に於てはも早や何の誇示し得べきものもなく、據るべきものもなかつた――貯蓄は疾くに租稅に取られるか、インフレーションのために烏有に歸するかしてゐた。しかし彼等は精神的所有物とその環境とを持つてゐた。彼等はこの環境を震駭されることを欲せず、またそれは、人々を戰場を離れて兵站に押し遣るに足るほど力强かつたのである。これは重要なことである。これが重要なことであるといふ所以のものは、あの今一つの言葉、卽ち知識は力なり、といふ怖ろしい言葉（これは經濟は運命なり、といふ言葉よりもつと古い）も窮極に於て生物學的危險と衰滅の原因であつたといふことを我々はこのことから學び知るからである。しかし知識は斷じて精神の世界

の全内容ではなくて、僅かに極めて小さな・機械的に獲得された一部分に過ぎない。

しかし世代相次いでこれに――即ちこの獲得された資産に、この、汝の知識は力なり、といふ言葉に――慣らされ、かくて諸世代が反生物學的な、獨逸語で言ひ換へれば反生命的（レーベンスファイントリッヒ）な價値や價値づけへと教育されたのである。それが反生命であるといふのは、生命から出發せずして、單に頭腦の無味乾燥な・理論的な考察から出發したからである。――かやうな價値をも、我々は撃破し、もつと生命に近い別の價値をそれに置き代へなければならない。この別の價値といふのは、反知識的だつたり反精神的だつたりはしないが、しかしこの知識と精神といふ部分領域を、直接に生命の諸力や根源そのものから發するより大きな全體へ編入するのである。

かやうな克服されねばならない思想は非常に多い。最後の、最も怖るべき思想は人間平等の思想であつて、これは權利の平等と義務の平等といふ誤れる觀念を齎し、一世代を擧げて、あの男にはあれだけの義務があるから、俺にもそれ以上の義務はない、と細かく、

判斷し、依姑地に比較考量する習慣になつてしまつた。——この思想が一般にあらゆる最高最大の價値を破壞し、淘汰と生活とを促進する唯一のものを悉く破壞したのである。その結果は、無責任になつたドイツ人の家族は一人か二人の子供を產んで二世代後には死絶えてしまひ、これに反して大酒飲みとか白痴とかが馬鹿な子供を六人も七人も遺した。

かうしたことにはすべて根本的な深い關係があり、かうしたことはすべて我々の精神的狀態の何等かの外面的な部分領域に關聯するのではなくて、直接に窮極の根本一般に觸れてゐる。從つて、かうしたことはすべて知性の世界を超えてゐるのである。今となつてこれ等の恐るべき結果を知的・統計的に闡明することによつて、この出生激減を何とかして喰ひ止め得るかのやうに考へるのは誤りである。今日にして事態が變化しなければ如何に怖ろしいか、そして如何なる結果になるに違ひないかと、いふことを絕えず語り、それを逐一整然と科學的に實施することによつて、健全にして價値ある子孫の一層の繁殖のために何物かを寄與し得るかの如く考へるは誤りである。否、今日の人間のこの人爲的な誤つ

た態度は、我々がこの人間の本質の最も深奥な箇所を內面的に把へる術を會得し、その人間を完全に鑄直ほす時にのみ、結句克服され得るであらう。而も、この人間を把へ鑄直ほすのは、精神と知識の分野に於てではなく、また、その人間に甚だ多くの統計の數字を覺え込ませて、後で試驗して訊ねるといふ方法によつてではなくして、その人間を自由主義的精神の冷くて生命に緣のない世界から、生命の太陽が眞の健康な綠の草地の上に、溫く直射する別の世界に連れて行くことによつて爲すのである。この世界では、銘々の人間が、己れの生命の全力を盡し、肉體・靈と精神・己れの有する力のすべてを擧げて、意識を絕して生き拔くであらう。

優生學や人種生物學の研究が我々の直ぐ眼前に曝したやうな怖るべき結果を我々が避けようとする場合、我々の人種政策的要求や方策にその必ず獲得しなければならぬ成功を與へる唯一の可能性は、以上に述べた通りである。かくて、我々が「敎育」と名づけたものはすべて、窮極に於て、も早や學校や知性の關はる事柄ではなく、講習や敎授や學習欲の

關はる事柄ではなくて、未曾有の精神的覺醒と最も內奧の世界觀的再生の關はる事柄である。卽ち、悟性の力や印刷されたり話されたりした言葉の力をではなくて、未曾有のものではあるが眞正にして內面的に眞實な暗示の力を働かせる場合にのみ、畢竟、解決され得るとすればされ得るやうな事柄である。

民族全體が昨日まで高く仰いでゐた政治的目標が粉碎されて他の目標と置き代へられ、かくて、逃亡兵や浮浪人も指導者となることが出來た民族が內面的に變化して、忽ち再び自明にして無意識的に體驗せられる名譽觀念を有する國民となつたといふこと、この事は嘗て宣傳によつて可能だつたのであるが——これは今やこのより大きな、そしてより深い領域に於ても繰返されなくてはならない。目的のための手段として、またその曉には以上の事を基礎として法律を作るために、繰返すのではなくて、——あらゆる法規一般を無用ならしめるために繰返すのである。何故なら目的なり目標自體は、この國民が生活とは何であるかを再び知る時に、——否、それを「知る」のではなくて、ただ無意識的に「生き

る」時に、到達されてゐるからである。
かくて固より人種政策教育は、何かの學問部門を巧妙で快適な形式で講述する任務を有する專門家のための任務より無限に大きなものとなる。これは畢竟一の世界觀鬪爭であつて、我々はこの鬪爭に當面してゐるのである。我々はこの鬪爭に於て、自由主義の時代に、否恐らく更にそれ以前に溯る數百年數千年の間に打建てられ解明された誤れるものをすべて擊破しなければならない。卽ち人間が經濟や、知識や、科學や、いはゆる平等の權利義務等々に不自然に注意を拂ふことを廢させて、その人間に再び別の・本來の立場を與へるのである。この立場といふのは、例へば今日の農村に於けるやうに、半ば未開の地域の原始人の裡に生きてをり、同樣に別の場所にも、卽ち教育に損はれてゐない子供の本然の感覺の裡にも、生きてゐるものである。
以上のことは要するに――これによつて我々は、結論となるべき最後の思想に到達するのであるが――未曾有の靈的革命に他ならない。何故なら、その場合には、上記のやうな

價値や過去二十年か百年位か或はもつと溯つて啓蒙時代以來存在した腐朽した事物が粉碎されなければならぬだけでなく、もつともつと長い間存在した何等かの價値も動搖を來すかも知れないからである。また、全世界の相貌が單に現在に於てだけでなく、未來に關してだけでなく、更に過去を振返る場合にも、一變して、我々が昨日善と稱んだものも、今日この全然新しい價値づけと全然新しい感受方法の光に照らせば惡と思はれることになるかも知れない。また、我々が歷史を見て昨日否定したものを、今日肯定しなければならないかも知れない。

反對に、大戰前のある世代や大戰後の怯懦な世代が不滅不動の精神的所有物なりと考へたものが悉く根本的に再檢討され、捨てられたり取上げられたり更めて取上げられたりすることになるかも知れない。それ等のものから全く異る形を作り出さねばならないのであつて、それは例へば一片の金屬を改鑄するやうなものである。かうしたことはすべてありさうなことである。かうしたことは必要なのだが、それは何かの理論的精神的な兒戲のためではなく

て、法則との生命の偉大な連繫や、原始的ではあるが、生命そのものを保持するので決定的に偉大な生ける人間の感覺と感情への理解と內面的成長を人間に再び與へんがためである。かうしたことは必要である。

しかしそれは書齋の學者の關知する事柄ではなく、演壇で講演したり、本に書いたり、ラジオで放送したり、法律に定めたりするやうな問題ではなくて、――我々すべての者の一人一人に、その全生涯の每日每日、每時每時關はる事柄である。何故なら、民族に、我々すべての者に、そして外國のすべての者にも、新しい生活內容を與へることに成功するか否かといふこの問ひに、結局我々と我々の子孫の未來が懸つてゐるからである。認識に基き、また立法の與へる種々の可能性によつて、健康な・給附能力ある・數的に有力な子孫の一世代に生活への意志とその意志の實現とを齎すことにもし成功しなければ、その時には、單に我々の子孫に取つて極めて悲觀的な將來の見透しがあるだけでなく、別のもつと悲觀的な、そしてもつと怖ろしい事が起るのである。

即ち我々と諸君が從來爲して來たこと、未來を築くために我々が爲したこと、屢々辛い死に直面させたばかりでなく、刻々に生を辛いものにした怖ろしい靈的鬪爭を行つて我々が十年の間を通じて爲したと思へること——我々が爲し且つ戰つたこれ等すべてのことが結局無意義であつた、すべて、大戰に於て斃れた二百萬の犧牲者と同樣無意義であつた、二千年を通じて血と淚とを以て綴られた全獨逸史と同樣に無意義であつた、といふことになるのである。これらすべてのことが怖るべき誤謬となり、無意義な衰亡となるといふ結果になり、遂には、百年か百二十年經つうちに、滅落した波斯人や、印度人等々位のものしか殘らなくなり、後世の異人種の時代の漠然とした昔噺となるであらう。——個人的な幸福は、問題とならぬと考へた者も常にあつた。彼等は勇敢であつた。身心を捧げた。ところが世界觀の決定さるべき偉大な瞬間に、從來のあらゆる献身努力を內面的に合理化して完成に到らせるためには、今やこの領域に於ける献身、即ち革新への假措する所なき意志が必要であることを彼等が敢て認識しなかつたが故に、すべては水泡に歸し、彼等は歷

史の暗い懐に沈淪したのである。

これが、我々が今日當面してゐる見透しである。これが人種政策教育の課題である。これが、我が民族精神の維持といふ全問題中に占むる人種政策教育の意義である。今日の我々の政治は末梢的領域に關係せず、中心そのものに關係してゐる。それは、話したり喋つたり、本に書いてあるのを暗記して後で何處かで暗誦したり、試驗の時に滔々と述べ立てるやうな事柄には關係しない。反對に人間がそれ自身に於て更新されねばならぬといふと、我々自身も服してゐる生ける生命の偉大な力や法則を再び何處にか幾分でも感得するといふことが重要となつてゐるのである。

民族生活や人間生活が我々の中や周圍にあるすべてのものと分離してゐると考へるのは正しくない。反對に我々はすべて成生と消滅の大きな流れの中の小部分であるといふのこそ正しいのである。この消滅と更新の偉大な法則を我々自身の身邊に於て、また我々自身の内部に於て實現する場合にのみ、我々はこの流れに對して正しい態度を取り、この流れ

に抗し、そしてこの流れの中で我々の意義と我々の使命とを實現することとなるであらう。これを我々の民族に傳へることが重要である。するとこれは夫々の者に取つて、何かの神聖な時に、驚くほど明かとなるに違ひない。そしてそれを出發點として、次には徐々に全く新しい全く別の態度によつて、その人は貫かれるであらう。この態度といふのは恐らく概念的に言葉に把へることは出來ず、感じ、體驗し、外部世界に於て生かすことの出來るものである。これが人種政策教育の任務である。

我々は相携へて仕事に取りかからう。相携へてこの仕事を達成することの出來る方法を探さう。我々は、以上の事柄に關して賢明な知識人と靜かに甘んじて議論もしよう。だが、この領域に於ける窮極の推進力・最奥の力は本能の中に、血液の中に、靈の中に生きてゐることを忘れまい。今日國民中の數百數千の者を震撼し、内面的に全く更新させて昨日と別のものになしたこの靈的體驗をそれに共鳴することの出來るあらゆる人々に傳へ、この人々をも自己の未來のために戰つてゐる民族の流れの中に引入れるべき方法を、人種

政策教育の總分野の中に發見するとともに努めよう。

獨逸政治大學叢書
ナチス獨逸の人種問題

㊞ 定價一圓五十錢

出文協承認 ア 170182

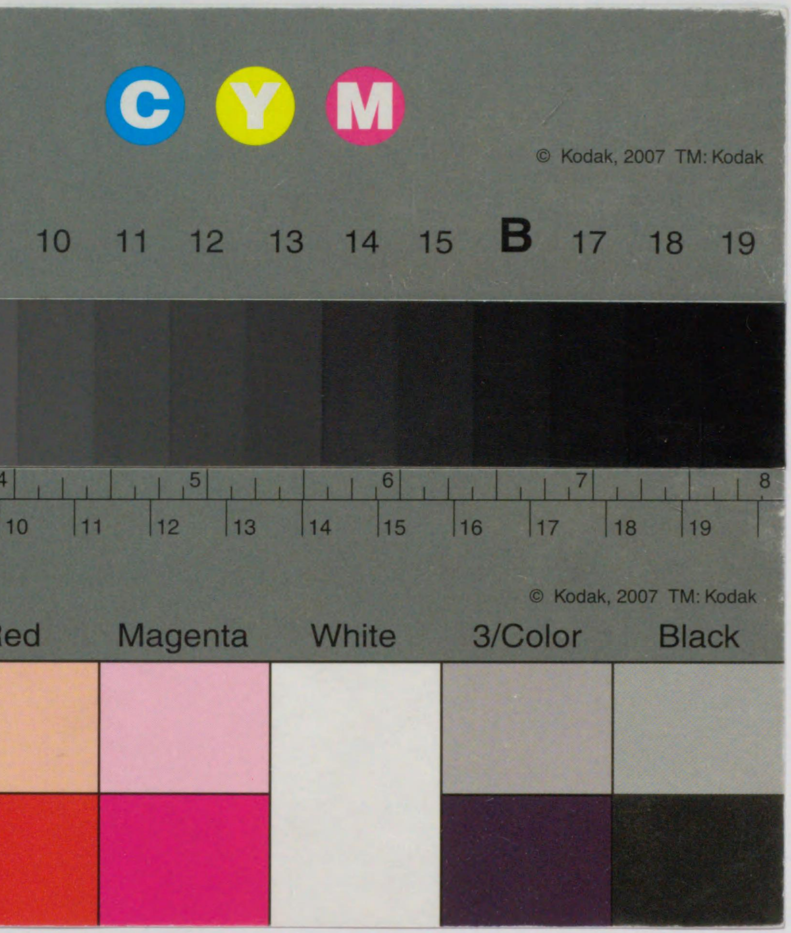
昭和十七年十月十五日印刷
昭和十七年十月二十日發行

著作權者 日獨文化協會
發行者 東京市京橋區銀座西一ノ三 増田義彦
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 肥塚一郎
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 (東東一)大日本印刷株式會社
配給元 日本出版配給株式會社
發行所 東京市京橋區銀座西一ノ三 實業之日本社
電話京橋(56)五一二一—五
振替東京三二六

弊社出版物中萬一落丁・亂丁がありました節は御取替へ致します故お申し越し下さい

(杉村製本)

17　12月16日


C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
4 5 6 7 8
10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Red Magenta White 3/Color Black


Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9
inches 1 2 3
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9
Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow